

ISSN 1344-4433

# 愛知文教大學論叢

第 20 卷

2017

愛 知 文 教 大 學

---

## 目次

---

### 論文

事例に基づく二段階意思決定 ～ 新語・流行語大賞の世代間格差をケースとして～	小林正樹	1
プログラミングとおもちゃ	早川 渡	13
後期近代社会におけるフリースクール運動 — 「教育機会確保法」の成立に着目して —	竹中 烈	23
就職に対する意識調査から見た、属性ごとの大学生のキャリア観 — 本学学生アンケート調査を参考に —1	小川現樹	35
愛知文教大学の中国語教育 — CCラウンジでの学習支援を中心に —	西口智也	49
国際理解への取り組み — 愛知文教大学国際交流センターの活動 —	勝股行雄	65
康有为教育思想在现代教育中的传承	马 燕 王 昕	85
古文学習方法論② 「二つの叙法 —— 古文学習への導入」	高橋良久	97
研究室ノート		109
~~~~~		
本藩と支藩の職制上の人事交流 ～ 尾張藩と高須藩を事例に～	稲垣知子	—(142)
~~~~~		

## 事例に基づく二段階意思決定 ～ 新語・流行語大賞の世代間格差をケースとして ～

小林 正樹

### 1. はじめに

旧稿「人による最終判断を導入した2段階意思決定手法」(小林, [1], 2013) においては, 機械 (アプリケーション・ソフトウェア) が最終決定を下すのではなく, 二つの選択肢を提示し, 人間がその中から最終決定を下す, という意思決定手法であった. しかし決定を伴う一般的な行為, 例えばコンテストやスポーツ大会といったものは, 何段階かの予選があり, 最終的に決勝でその優勝者を決定するアルゴリズムである. 前回の提案以降, この考え方を取り入れることにより, さらに機械による正確さと速さ, さらにその上で人間の感情を取り入れた意思決定を行うことが出来るという考えに至った. そこで今回は毎年開催される「新語・流行語大賞」を例に取り, これを最優秀作品の意思決定問題として捉える. と同時に, その最終結果について毎度, 疑問が起こる現状に関して, 若者の年代格差問題として調査を行ったアンケート結果を分析する.

### 2. 二段階意思決定手法

以前に提案した「2段階意思決定手法」は, 第一段階として, コンピュータによって膨大なデータを処理し, 多くの選択肢の中から二つの選択肢まで選抜を行い, 人間に提示する. これまでコンピュータが最適であると判定を行った第一位の結果だけを最適解として表示していたものを, 第一位, 第二位の二つの結果を提示する. これにより第一段階では, 迅速かつ正確に処理を行うというコンピュータの長所を活かす. 次に第二段階として, コンピュータによって提示された二つの選択肢の中から, 人間の手により, 二者択一の手法によって最終的な意思決定の判断を下す. これによって, コンピュータ処理によって消される人間性, すなわち人間の考えを反映できない欠点をカバーすることが可能となる. 二者択一の方法論としては, サーストンやシェッフエの対比較評価法が有名であるが, これらの有用性は既に証明されている. このように, 前提条件としてのいわゆる「二者」をコンピュータによって導き出させることによ

り、多くの選択肢の中から質の高い二つの選択肢が提示され、さらにその先に人が条件判断を加味して二者択一を行うことにより、正確かつ人間性を持った意思決定がなされ、従来行われてきたよりも質の高い意思決定が可能になると考えられる。

### 3. 一般的な多段階意思決定手法への適応

しかし一般的には、そのアルゴリズムは異なっている。ここで従来の二段階以上の意思決定を「多段階意思決定」と表現する。例えば就職活動やコンテストにおいて、書類審査、面接審査、最終審査、と段階的に候補者を絞り、最終的に一人を選択するという意思決定が行われる。就職等では最終段階で選ばれる者が一人であるとは限らないし、またコンテストでも最優秀賞の他にもいくつかの賞が存在する場合も少なくない。ここでは三段階、もしくは四段階と複数の段階を経ている。その際、トーナメント方式のように、一度落選を行った者に対する敗者復活等のしきみがない限り、再候補に挙がることはない。すなわち、いちど間違った判断が下されてしまった候補者については、二度と審査の対象となることはない。しかしその何段階の審査の過程において、その都度、審査を行う者が異なっていたり、また基準が違っていたりと、統一が取れていない場合や、縁故採用やコネクション等で勝ち残っていく場合等も考えられる。すなわち、多段階の審査を経ることによって、審査のばらつきを押さえ、意思決定を正しいものにする利点があると考えられよう。また日本の経営の特色は、当落の過程開示を個人ではなく企業に帰するという方法を取る。しかし何段階もの同ステップを繰り返すことは、時間を要する。また企業では会議によって全てが決定するために、その会議の開催を待たないと決定が行われず、たとえば就職活動などで、ある企業がせつかく良い人材を採用する予定が見込まれても、その者が先に他社での内定を得てしまうことによって、その企業の内定を辞退してしまう可能性も少なくない。

このように、既存の多段階的な意思決定の短所である「時間がかかる」という点をカバーするのが、提案している二段階の意思決定手法である。しかしこの短所としては、そのアルゴリズムを予め厳格に決めておく必要があるという点である。スポーツ競技に見られるトーナメント方式などの場合には、点数が

高い方が勝ち進むという単純な決定方法が使用されるが、人物重視の面接であったり敗者復活戦が設定してある場合などには、点数化を行うための加重方法や採点基準といったアルゴリズムを、事前に当該のシステムに導入しておかなければならない。またそれらの基準が変わる場合にはその都度、変更を余儀なくされる。さらにそれらアルゴリズム自体に問題がある事が判明した場合には、大きな問題に発展してしまうことは否めない。これは一般的に、現状をコンピュータシステムに移行させる際にも起こりうる問題であるが、その変更の頻度が多くなればなるほど、トラブルが発生しうる可能性も高くなることは、容易に想像できよう。

このように考えると、既存の意思決定を多段階、すなわち複数回行うと言ったこと自体が本当に必要であろうか。一定の意思決定手法で、最終の二者まで一意に意思決定を行う事が可能であるのではないか。なお企業の就職活動のように、最終的に一人を選択せず、複数人の選択を行う場合は別問題であるので、今回は除外する。また就職試験の場合には、該当者無しも選択肢の一つである。これは、就職試験は複数回実施することが可能であり、どちらかと言えば最適停止問題に近い問題であると捉えられる。コンテストなどでも、「該当無し」という結果を見かけることがしばしばある。しかしこれは提案モデルの中ですでに導入されている。なぜならば、拙モデルの中では最終的に二つの選択肢が提示されるものであり、ここから一つを人間が選択する二者択一の意味決定である。そのなかで実際問題として必ず二者択一をしなければならないという必要性があるモデルと無いモデルがある。たとえばトーナメントや点数等により必ず第一位を決定しなければならない場合は、明らかに最終の意思決定が必要な場合である。しかし前述の就職試験やロトなどにおいては、必ずしも最終の一人が決定される必要はなく、例えば該当者無しや次回へ持ち越しという最終結果になる場合もある。したがって、最終的に二者択一と言う選択肢が提示されるもの、実際には「選択しない」という第三の選択肢が隠されているわけであり、実際には三者択一という判断を迫られているものである。しかしながらそこで意思決定者は置かれている状況を最も知り尽くしているわけであるから、選択の必要性および不必要性については最も理解をしているはずである。前述の通りこれは最適停止問題と絡めることによって、数学的にも解決す

ることが可能である問題である。どちらかと言えばこれまでの多段階意思決定問題は、企業体質やまたショーアップのために何度も行われている場合が多いという感否めない。したがってトーナメント方式のような場合を除き、複数回の意思決定を繰り返して多段階意思決定を行う必要もなく、最終的に二段階意思決定で一意に最終の二候補を導出し、その後、人間の意思により一つの選択肢を決定、もしくは選択をしないという手法と捉えることが出来よう。

#### 4. 実例検証

これらの意思決定事例を、毎年開催されている「新語・流行語大賞」に当てはめて考えてみたい。新語・流行語大賞は、自由国民社が昭和59(1984)年から始めた、その年の新語と流行語に対する顕彰である。当初は新語部門と流行語部門に分離しており、それぞれに金賞、銀賞、銅賞、特別賞、そして大衆賞、特別語録賞、特別功労賞、表現賞等が贈られていた(年度によって異なっており、表現部門が存在した年もある)。平成3(1991)年より各部門において大賞が設けられ、平成6(1994)年から、新語と流行語を分けずに大賞とトップテン入りの選抜形式となり、現在の表彰方式となった。また平成15(2003)年より自由国民社に加えて株式会社ユーキャンが提携に入り、現在に至っている。自由国民社は「現代用語の基礎知識」を出版する出版社であり、その掲載内容が世相を反映することから、その内容を毎年12月の初旬に公表している。その選考方法については、新語・流行語大賞のウェブサイト内において、以下のように記載されている(参考文献[2]より引用)。

この賞は、1年の間に発生したさまざまな「ことば」のなかで、軽妙に世相を衝いた表現とニュアンスをもって、広く大衆の目・口・耳をにぎわせた新語・流行語を選ぶとともに、その「ことば」に深くかかわった人物・団体を毎年顕彰するもの。

1984年に創始。毎年12月上旬に発表。『現代用語の基礎知識』読者アンケートを参考に、選考委員会によってトップテン、年間大賞語が選ばれる。

選考委員会は、姜尚中(東京大学名誉教授)、俵万智(歌人)、室井滋(女優・エッセイスト)、やくみつる(漫画家)、箭内道彦(クリエイティブ・ディレ

クター)、清水均 (『現代用語の基礎知識』編集長) で構成される。

自由国民社主催、ユーキャン新語・流行語大賞受賞ワードの決定については、新語・流行語大賞審査委員会及び大賞事務局が実施しております。各ワードの受賞理由・選考方法等についてのお問合せについては、弊社ではお答えしかねます。ご了承くださいませ。

新語・流行語大賞の選定方法は、まず 30 語程度の選定 (ノミネート) が行われ、公表される。これが第一段階の意思決定であると言えよう。つぎにアンケートを参考に選考委員会と大賞事務局が選定を行い、大賞が意思決定されている。選考委員は年により変更があり、具体的にどのようなアルゴリズムによって決定しているか、その意思決定手法については公表されていない。しかしここに何らかの意思決定手法が用いられていることは間違いない。したがって二段階に意思決定がなされている事例である。ところが例年、第一段階の意思決定結果である、新語・流行語大賞のノミネート段階において、ほとんど流行していないのではないかと、また耳にしたことがないような単語が入ってくる場合が少なくない。これは語句の選定が、あらゆる世代にわたって行われているためであると考えられる。特に近年、若年層がテレビ視聴を行わなくなり、ゲームやアニメ、インターネットに移行、逆にシルバー世代はネット用語等の流行に対して疎い。いわゆる世代間格差であり、それらが広がっているためであろう。たとえば新語・流行語大賞では毎年のように、NHKの連続テレビ小説や大河ドラマから、そのフレーズがノミネートされている。これはそのテレビを視聴している人にとってはたいへん聞き慣れた言葉であり、選定されていることに異論はないかもしれないが、当該番組を見たことがない人にとっては多くの場合、耳にしたことのない語句であるために、その語句がノミネートされたことを知った際に「なんだろう?」「本当に流行していたのか?」といった不信感がまとわることは否めない。そこで今回、若者にターゲットを絞り、ふりかえって 2016 年の「若者」における新語・流行語大賞をアンケートにより調査することとした。

## 5. アンケートと世代間格差

今回、「若者」を対象にアンケートを行った。若者とは厚生労働省の基準によれば、15歳から34歳までの者を指す。そこで2016年において事前に選ばれた30の新語・流行語に加え、なぜこの言葉やフレーズが入っていないのかと議論になっていた単語を含め、独自にノミネートとして97語を選出した。その後、15歳から34歳の若者だけに、直接もしくはインターネットを通じて、「あなたが考える“若者の”新語・流行語大賞」を選び、回答をもらった。インターネットでは、オンラインのウェブアンケートサイトである「SurveyMonkey (サーベイモンキー)」を利用した。アンケートの質問は、以下の2問である。

- Q1. 年齢を教えてください  
Q2. あなたが考える2016年「若者の」新語・流行語大賞はどれですか？ ひとつだけ選んでください。

結果、472件の回答を得ることが出来た。以下にその結果を記す。なおQ2.の項目にある「30選」というのは、○が2016年新語・流行語大賞のノミネート30語として選ばれている単語であり、うち◎は年間大賞、●はトップテンに入選した単語であることを示す。

Q1. 年齢を教えてください		
Answer Options	Response Percent	Response Count
15歳	0.4%	2
16歳	9.5%	45
17歳	8.9%	42
18歳	10.8%	51
19歳	15.0%	71
20歳	13.3%	63
21歳	13.8%	65
22歳	9.1%	43
23歳	3.4%	16

24 歳	3.0%	14
25 歳	4.9%	23
26 歳	1.3%	6
27 歳	0.4%	2
28 歳	2.3%	11
29 歳	1.5%	7
30 歳	0.6%	3
31 歳	0.2%	1
32 歳	0.8%	4
33 歳	0.6%	3
34 歳	0.0%	0
<i>answered question</i>		472

Q2. あなたが考える 2016 年「若者の」新語・流行語大賞はどれですか？ ひとつだけ選んでください。				
Rank	Answer Options	Response Percent	Response Count	30 選
1	君の名は。	13.8%	65	○
2	ポケモン GO	9.7%	46	●
3	その他 (具体的に回答してください)	7.6%	36	
4	恋ダンス	6.1%	29	
5	PPAP	5.7%	27	●
6	性の喜びを 知りやがって！	4.2%	20	
7	(僕の)アモーレ	3.8%	18	●
8	ゲス不倫	3.4%	16	●
9	パリピ	3.2%	15	

事例に基づく二段階意思決定  
 ～ 新語・流行語大賞の世代間格差をケースとして ～

10	snow／スノる	2.8%	13	
11	SMAP 解散	2.5%	12	○
12	ぺこ&りゆうちえる	2.3%	11	
13	斎藤さんだぞ	2.1%	10	○
14	逃げ恥	2.1%	10	
15	菅田将暉	2.1%	10	
16	神ってる	1.7%	8	◎
17	トランプ現象	1.7%	8	●
18	ガルパンはいいぞ	1.5%	7	
19	歩きスマホ	1.3%	6	○
20	フェブ姉さん	1.3%	6	
21	AI	1.1%	5	○
22	センテンススプリング	1.1%	5	○
23	新井さん クソコログランプリ	1.1%	5	
24	メンタルリセット	0.8%	4	
25	グラブる	0.8%	4	
26	伊勢志摩サミット	0.8%	4	
27	パーフェクトヒューマン	0.8%	4	
28	アスパラガフ	0.8%	4	
29	おそ松さん	0.6%	3	○
30	シン・ゴジラ	0.6%	3	○
31	文春砲	0.6%	3	○
32	保育園落ちた日本死ね	0.6%	3	●
33	VR	0.6%	3	
34	ほぼほぼ	0.6%	3	
35	EU 離脱	0.4%	2	○
36	びっくりぽん	0.4%	2	○
37	マイナス金利	0.4%	2	●

38	生前退位	0.4%	2	
39	お気持ち	0.4%	2	
40	第三者の厳しい目	0.4%	2	
41	こち亀終了	0.4%	2	
42	2.5次元	0.4%	2	
43	18歳選挙権	0.4%	2	
44	熊本地震	0.4%	2	
45	違法ではないが 一部不適切	0.4%	2	
46	り／りよ	0.4%	2	
47	アスリートファースト	0.2%	1	○
48	新しい判断	0.2%	1	○
49	聖地巡礼	0.2%	1	●
50	民泊	0.2%	1	○
51	レガシー	0.2%	1	○
52	リア充	0.2%	1	
53	マスゾエする	0.2%	1	
54	ピコ太郎	0.2%	1	
55	高齢譲位	0.2%	1	
56	黙れ小童	0.2%	1	
57	北海道新幹線	0.2%	1	
58	安倍マリオ	0.2%	1	
59	両成敗	0.2%	1	
60	KSK	0.2%	1	
61	リルリルフェアリル	0.2%	1	
62	豊洲市場	0.2%	1	
63	グレートだぜ	0.2%	1	
64	ホラッチョ川上	0.2%	1	
65	精査	0.2%	1	

事例に基づく二段階意思決定  
 ～ 新語・流行語大賞の世代間格差をケースとして ～

66	草(www)	0.2%	1	
67	有村架純	0.2%	1	
68	とりま	0.2%	1	
69	くまモン元朝張れ絵	0.0%	0	○
70	ジカ熱	0.0%	0	○
71	タカマツペア	0.0%	0	○
72	都民ファースト	0.0%	0	○
73	パナマ文書	0.0%	0	○
74	盛り土	0.0%	0	●
75	とと姉ちゃん	0.0%	0	
76	高畑充希	0.0%	0	
77	組市松紋	0.0%	0	
78	二重国籍	0.0%	0	
79	朝が来た	0.0%	0	
80	小池知事	0.0%	0	
81	笑点 50 周年	0.0%	0	
82	電通	0.0%	0	
83	世界同時株安	0.0%	0	
84	オートファジー	0.0%	0	
85	山の日	0.0%	0	
86	民進党	0.0%	0	
87	海の森陸上競技場	0.0%	0	
88	水素水	0.0%	0	
89	4連覇	0.0%	0	
90	せこい	0.0%	0	
91	二世タレント	0.0%	0	
92	卒論	0.0%	0	
93	ニホニウム	0.0%	0	
94	カズレーザー	0.0%	0	

95	リオ五輪	0.0%	0	
96	琴パウワー	0.0%	0	
97	BAN	0.0%	0	
98	のん	0.0%	0	
<i>answered question</i>			<b>472</b>	

既報の通り、ユーキャン「新語・流行語大賞」では「神ってる」が年間大賞として選出された。しかし若者に限っては第16位、率にして1.7パーセントに過ぎなかった。しかも選択した8人の内訳を分析すると、20歳から25歳のみであり、その平均年齢は22.5歳であった。すなわち高校生や未成年にはあまり受け入れられておらず、逆に26歳～34歳にも選んだ人は居なかった。この単語は野球から来ているため、ごく一部の層にしかヒットしていない可能性はあろう。逆に若者へのアンケートで一位になった「君の名は。」はアニメ、また映画において若者世代に大いに受け入れられたものであり、トップテン入りしている「聖地巡礼」にもつながっている。いっぽうノミネートされていない単語のうちで若者のアンケートのトップテンに入選した言葉として、「恋ダンス」「性の喜びを知りやがって!」「パリピ」「snow/スノる」が挙げられる。これらは順にテレビ番組、ネットで流行した言葉、若者用語、スマートフォンアプリであり、他の年代の人たちがあまり利用しない用語である点から、若者の特徴であると見なすことが出来よう。また大賞の選定および本アンケートを行った年末近くに流行したものが多く、1年間を通じての新語・流行語大賞としては適していないという考えも可能であり、一過性の言葉でもあろう。また3位の「その他」であるが、ほとんどが少数意見であり、多いものでも2票である。内容としても蓮舫、朴槿恵といった話題になった人名が多く、さらにそれらに類する単語も選択肢に入っていたため、実質的には同じイメージでの事項と捉えることもできよう。ともあれ若者として全体的には、テレビ、ウェブ、スマートフォン等、いわゆるマルチメディアから発生した事項に関する単語が多く入選しており、政治や経済、時事問題に関する単語が弱いことが見て取れる。しかしテレビでも大河ドラマや連続テレビ小説といったNHKの関連語句は入選しておらず、ごく一部の人気ドラマに集中した結果ではあるが、「恋ダンス」「snow

「スノる」といった言葉がその流行にもかかわらず本来のノミネートに挙げられなかったことは、疑問の残るところである。

## 6. 今後の課題

今回、世間にノミネート作品および大賞が発表された直後にこのアンケートを行った。そのためアンケートに答えた者があらかじめ結果を知っている可能性が高く、その意思決定にバイアスがかかっている可能性が否定できない。さらにアンケートで問うていない男女比を知る必要がある。その元で、男女別のデータを比較することも興味深いと思われる。ノミネート時点からの意思決定を明確化させること、どのような理由でその言葉を選んだのかという過程を含め、その意思決定の過程を明確化させる必要がある。2017年は、世間とは全く切り離し、独自にアンケートを実施、若者の新語・流行語大賞を選定したいと考えている。その手法についてはまだ確定していないが、ある程度の選択肢がないと、意思決定することは難しい。しかしながら今回のように選択肢の数が多すぎると、逆に意思決定に迷いが生じてしまったり、すでに既存の場合でもそうであるが、同種の選択肢が混在するというようなケースになってしまい、正しいアンケートを行うことが出来ない。また前述のように、アンケートを取るその時点で流行している対象語がどうしても上位に来てしまう。年間を通じて、その年を的確に表すことが出来るような新語・流行語大賞の意思決定を行う方法の確立を考え、バイアス除去のために、世間のノミネートから大賞の発表までの間に先に結果を出し、比較を行う必要があると考える。引き続き研究を続けていきたい。

## 【参考文献】

- [1] 小林正樹, 「人による最終判断を導入した2段階意思決定手法」, “NAIS Journal” Vol.8, 2013.
- [2] 生涯学習のユーキャン「新語・流行語大賞について」ウェブサイト (<http://www.u-can.co.jp/company/shingo.html>) 平成29(2017)年9月10日現在.
- [3] SurveyMonkey (サーベイモンキー) ウェブサイト (<https://jp.surveymonkey.com/>) 平成29(2017)年9月10日現在.

## プログラミングとおもちゃ

早川 渡

### 1. はじめに

ここ数年、新聞、雑誌や報道番組等での特集でも見られるようになってきたキーワードはいろいろあるのだが、気になるものは、「プログラミング」である。検索サイトを利用し「プログラミング」を検索すると、約 42,200,000 件が表示された。昨年度は、約 33,300,000 件が表示されたので、前年比 1.17 倍になっている。

昨年度は、日本の教育に関して、「学習指導要領」と「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて」を概観し、その利用について考えていったのであるが、今回は、子どもたちが手にすることができるおもちゃに関して見ていくことにする。その利用方法によって、将来どのような考え方ができるのかを考えていきたい。

### 2. 近年のおもちゃの話題

近年のおもちゃに関する話題の中から「展示会」で発表されているものを見ていくことにする。大きなものでは、東京おもちゃショーがあり、教育に関するものとしては、Maker Faire Tokyo を見ていくことにする。また、ゲームをメインにするものとして、東京ゲームショウについても触れておきたい。

#### 2-1. 東京おもちゃショー

ホームページの概要には、以下のように示されている。

東京おもちゃショーは、(一社)日本玩具協会が主催する、国内最大規模の玩具の展示会です。

今年の会期は 2017 年 6 月 1 日(木)～4 日(日)の 4 日間です。最初の 2

日間は、ビジネス関係者向けの「商談見本市」、後半の2日間はお子様・ファミリーなど一般の方にお楽しみいただける「一般公開」となっています。

## 2-2. Maker Faire Tokyo

ホームページの概要には、以下のように示されている。

Maker Faire Tokyo は Maker ムーブメントのお祭りです。ユニークな発想と誰でも使えるようになった新しいテクノロジーの力で、皆があつと驚くようなものや、これまでになかった便利なもの、ユニークなものを作り出す「Maker」が集い、展示とデモンストレーションを行います。多くのブースでは、実際に作品に触れたり、ものを作る体験を行うことも可能です。

## 2-3. その他

特にゲームにおいて、プログラミングに関係するものとするれば、東京ゲームショウもある。エンターテインメントが主になるのであるが、その中でも、知育に関するものもある。

ホームページのプレスリリースには、以下のように示されている。

東京ゲームショウ 2017（主催：一般社団法人コンピュータエンターテインメント協会 [略称：CESA、会長：岡村 秀樹]、共催：日経BP 社 [社長：新実 傑]、会期：9月21日～24日、会場：幕張メッセ/以下、TGS2017）は、いよいよ開幕を来週21日（木）に控え、直前情報として会場マップ、イベントステージプログラム、整理券配布情報を発表します。今回、小中学生までの来場者を対象とした「ファミリーゲームパーク」を充実するほか、TGS 公式アプリ「TGS2017」が大幅リニューアルし、位置やスケジュールの情報に加えて、Twitter 連動やクーポン機能も備えました（近日アップデート予定）。会場の模様は、TGS

公式動画チャンネルでインターネットライブ配信します。

### 3. プログラミング

今回は、東京おもちゃショーと Maker Faire Tokyo の二つの展示会において紹介されている商品について、プログラミングに関するものを見ていくことにする。

特に、子ども向けのおもちゃについては、どのようなものがあって、どういう工夫がされているかをみていくことにする。

### 4. 商品

#### 4-1. トイ・プラットフォーム「toio」

株式会社ソニーの開発したプラットフォームである。

それは、工夫する心に火がつく体感トイ。

手を動かして遊ぶ。

考えながら夢中になる。

偶然の発見が、

もつともつと！を

次々と引き出していく。

夢中になる瞬間、

ひらめく喜び。

未来をつくる子どもたちに、

“創意工夫の原体験”を。

サイトによると体感型のトイ・プラットフォームで、子どもたち自らの創意工夫によって遊ぶ楽しさが広がるものである。別売りの対応タイトルと組み合わせることで、アクションゲームやパズルゲーム、動きのある工作などを直接触りながら楽しめることがポイントとなっている。

製品構成は、高性能モーター内蔵の「toio コア キューブ」2 台とそれ

それぞれのキューブを操作するためのコントローラ「toio リング」2台。そして、それらを制御する本体「toio コンソール」となっていて、子どもたちが使いやすい工夫がされている。

製品の紹介動画では、子どもたちが様々な方法で遊ぶ様子を確認することができる。目の前で動くキューブを楽しそうに触っている姿を見ると、仮想的でない本当の感覚が得られるような感じがする。

予約を始めたところ、2017年6月1日、お得な初回限定の「全部セット（税込2万5855円）」と「基本セット（税込2万1557円）」の先行予約が開始されたが、即日完売したようである。なお、正式発売日は12月1日であるので、その人気は大きなものであるし、興味深いものでもある。

ちなみに発売に合わせ、レゴを組み合わせて遊べるゲームやピタゴラスイッチなどを手がける「ユーフラテス」監修の「工作生物 ゲズンロイド」なども同時にリリースする予定であるので、馴染みのあるレゴを使いながら、いろいろな体験ができるようになることが予想される。

他にも、パートナーとしてバンダイをはじめとする各社がタイトルを企画・開発しているということから今後どのような方向性で発表されていくのかは期待したいところである。

#### 4-2. プログラミングロボ コードA・ピラー

遊びながら実験の楽しさを教えてくれるイモムシ型ロボが、子どもの問題を解決する力、計画し準備する力、客観的に考える力を育みます。

コード・A・ピラーは、パーツの連結を工夫することで子どもの考える力を伸ばすおもちゃです。つないだり、つなぎかえたり、遊び方は無限大。問題を解決する力、計画し準備する力、客観的に考える力を養いながら、実験する好奇心を刺激します。コード・A・ピラーでプログラミングの楽しさを味わおう！

赤ちゃん向けのおもちゃやグッズを販売する老舗ブランド「フィッシャ

ープライス」が、幼児向けの新世代おもちゃとして開発したプログラミング学習ロボットである。

イモムシの胴パーツには、直進やサウンドなどの命令コードが内蔵されており、つないだ順番にイモムシが動作する。どんな動きになるか考えることで、プログラミングの基本的な知識を自然に学ぶことができる。

本体は、電源スイッチのある頭部と、コーディングした4種類の胴体パーツ7個で構成されている。胴体パーツはひとつひとつ取り外しができ、それぞれ“直進”、“右折”、“左折”、“音を鳴らす”といった意味をもっている。胴体パーツは、前と後ろにUSBの入出力端子がついており、子どもでも簡単に取り外しができるように設計されている。

コード・A・ピラーの対象年齢は3～6歳。日本でも、発売前から新聞やテレビなどで取り上げられ、コード・A・ピラーを教材とした「3歳からのプログラミング教室」まで開講されるなど、プログラミング学習の低年齢化はどんどん進んでいる。

#### 4-3. 子ども向け知育アプリ「ワオっち！」

「学び・感動カンパニー（株）ワオ・コーポレーション」は“学びの驚きと感動をすべての人へ”をキーワードに様々な教育活動を行っています。

「ワオっち！」も、小さなお子さまが保護者の方と一緒にあって、学ぶ楽しさの中に、驚きや感動を見つけられること、そして、保護者の方とのコミュニケーションの時間を創出することで、お子さまの言葉を育み、感性を豊かに育てるお手伝いが出来ることが目標です。

「ワオっち！シリーズ」を運営する「学び・感動カンパニー（株）ワオ・コーポレーション」は、“学びの驚きと感動をすべての人へ”をキーワードに、幼児から社会人までを対象に「全国の教室での指導」と「eラーニングによる在宅教育」そして、情操面の働きかけとしての「各種“エデュテ

インメント”活動」を行う企業である。

「ワオっち！シリーズ」では、30年以上の幼児教育で培った実績をもとにしたカリキュラムで、幼児期に必要な力を身につけるキッズ学習アプリを多数配信している。

#### 4-4. 「アーテック エジソンアカデミー」を展開するアーテックがユニークなプログラミング学習キット「アーテックロボ」

ブロック遊びから始める

ロボットプログラミング。

アーテックロボはブロックで遊びながらかたちを組み立て、プログラミングをして思い通りの動きを与えるプログラミングロボットキットです。全国の学校でもプログラミング学習として採用されている、学校教材メーカー発のロボットをあなたの家にも。

本体は Artec 社のブロックで作っていく。ロボットの頭脳になるのが基板部分で Studuino という基板である。これがブロックに組み合わせられるようになっているので、好きな場所に組み込んで全体の形を作っていく。

タイヤをつけたりこれを土台にしたりと安定する工夫をしながら組み立てていく。LED、ブザー、モーター、音センサー、赤外線センサーなどの電子パーツをつけていく。ブロック仕様なので好きな場所に付けたり外したりすることが簡単にできる。これらの電子パーツにはそれぞれ機能があって、センサーは反応するための入力に対して利用され、LED やブザーは光や音を出すことによって出力される。モーターは駆動で DC モーターを使えばタイヤを簡単につけることができる。

プログラミング自体はパソコンで専用ソフトを使って行う。作成したプログラムをロボットに転送し、ロボットが単体で動けるようになる。

まずはパソコンに、このロボット用のプログラミングできる環境を作る。プログラミングに使うソフトウェアには、ブロックタイプと、アイコンタ

イプがある。ブロックタイプのプログラミング環境は、Scratch をベースに作られているのでほぼ同じであるが、電子パーツの制御をするための仕組みが入っている。ロボットがどうしたらどう動くのか、このソフト上でプログラムを作っていく。完成したプログラムはUSB ケーブルでパソコンにつないだロボットに、パソコンから転送する。コードをはずしてロボット単体で楽しむことができる。

#### 4-5. ハナヤマが取り扱う、アメリカのメーカーが開発したバランスロボット「CODER MiP」

遊びながらロボットプログラミングを学ぼう！

コーダーミップは、遊びながらプログラミングが学べるロボットトイです。赤外線センサーや角度センサー、音センサーが内蔵されており、スマートフォンと専用アプリを使って、ジェスチャーやバランス、音の感知を初心者でもとても簡単にプログラミングできます。

開発元である WowWee の情報

ROLL INTO THE FUTURE

Perched atop unique dual wheels, this multifunctional and autonomous robot is more than just a toy. Equipped with GestureSense™ technology, any hand motion controls MiP™, or load up the free MiP App on an iOS or Android smart device, and your eyes will light up at what MiP™ can do.

FEATURES

MiP responds to hand gestures, carries its own weight, and comes with a free app that enables you to drive it, battle other MiPs, and more!

TECHNOLOGY

We inject cutting edge technologies into our products that enable

them to do some pretty powerful things.

コーダーミップのプログラミング方法は、スマートフォンでアプリを起動、ブロックを組み合わせてプログラミング、作成したプログラムで動かすという流れである。

## 5. まとめと今後について

いろいろなおもちゃについて、概要とそれに関する特徴などを見てきた。基本的には、子どもたちが触っていくことができるもので、大きさも手に取りやすく設計されているように思われる。また、プログラミングに関しては、パソコンを利用することも可能であるが、スマートフォンやタブレット端末などを利用し、アプリのダウンロード後に使用可能になるものが一般的な流れとなっているように思われる。この流れは、もともとの玩具であったレゴ (LEGO Education) で利用されていたり、また Scratch などがもともとなっていたりして、これらを子どもたちがより使いやすい環境を整備することが考慮された結果の方向性であると感じた。

昔のおもちゃとは異なり、電気を使って、それらを組み合わせながらいろいろな学び方をしていくこととなる。ただし、おもちゃとしては、やや価格面では高額になってしまうことになるが、将来への投資であると考えれば、いろいろな判断はできるのではないかと思われる。

今後は、日本で2020年度から始まるプログラミング教育必修化の直前にどのような業界で、どういったことが考慮されたプログラミング教育が行われるかという近い未来を見ていきたいということと今後子どもたちがどのようにプログラミング教育を受けられる環境が作られ、広がっていくかなどを見ていきたいと考えている。

## 6. 終わりに

今回は、プログラミングをキーワードに、おもちゃについて見てきた。

日本でも、すでに 2020 年から始まるプログラミング教育の必修化に関して、いろいろな企業が、いろいろな工夫をしたおもちゃを開発し、そのおもちゃに対応するプログラミングの方法を提供し始めている。また、すでにプログラミング教室などを開講する企業も増えてきている。保護者もニュースなどで情報を得ることで、いろいろな教育方法を考えることとなる。その中で、プログラミングの能力の向上が、論理的思考の向上に結びつくようないろいろな経験をさせながら、子どもたちは育っていくことになるのであろう。これが将来の開発者として育っていくかは不透明であるが、期待したいこととして、現在の IT 技術者の不足を解消するような方向に進むことを願っている。

本文中の製品名およびサービス名は、一般に各開発メーカーおよびサービス提供元の商標または登録商標である。

#### 参考文献

1. 東京おもちゃショー2017 INTERNATIONAL TOKYO TOY SHOW  
<http://www.toys.or.jp/toyshow/> (最終検索日：2017年9月22日)
2. Maker Faire Tokyo 2017  
<http://makezine.jp/event/mft2017/> (最終検索日：2017年9月22日)
3. 東京ゲームショウ 2017  
<http://expo.nikkeibp.co.jp/tgs/2017/> (最終検索日：2017年9月22日)
4. トイ・プラットフォーム「toio<sup>TM</sup>」 | First Flight  
<https://first-flight.sony.com/pj/toio> (最終検索日：2017年9月22日)
5. Think & Learn プログラミングロボ コード・A・ピラー  
[http://www.fisher-price.com/ja\\_JP/product/98301](http://www.fisher-price.com/ja_JP/product/98301) (最終検索日：2017

年9月22日)

6. 子ども向け知育アプリ『ワオっち!』シリーズ

<http://waochi.wao.ne.jp/> (最終検索日: 2017年9月22日)

7. アーテックロボ | 株式会社アーテック

<http://www.artec-kk.co.jp/artecrobo/ja/> (最終検索日: 2017年9月22日)

8. Coder MiP (コーダーミップ) coder-mip | 株式会社ハナヤマ

<http://www.hanayamatoys.co.jp/product/category/variety/codermip/coder-mip.html> (最終検索日: 2017年9月22日)

9. WowWee

<http://wowwee.com/products/robots> (最終検索日: 2017年9月22日)

10. LEGO Education

<https://education.lego.com/ja-jp> (最終検索日: 2017年9月22日)

11. Scratch - Imagine, Program, Share

<https://scratch.mit.edu/> (最終検索日: 2017年9月22日)

後期近代社会におけるフリースクール運動  
- 「教育機会確保法」の成立に着目して -

竹中 烈  
Takeshi, TAKENAKA

1. 問題関心

戦後日本において、学齢期の子どもが学校に行かない、もしくは行けない状態がどのように意味づけられているかという構築主義的アプローチは、学校社会における子どものあり方だけでなく、義務教育制度そのものや社会意識の変容などといった様々な問題意識と絡まり合いながら多様な展開を見せてきた。例えば、不登校問題の捉え方には、不登校を逸脱や病理とみて矯正や治療の対象とする捉え方や子どもの人権や多様な学びの保障という文脈から選択の結果とする捉え方などがあり、その内実や時代や社会状況に応じた変容に関心が向けられてきた。貴戸(2004)は、不登校の意味づけの時代や社会状況に応じた変容に目を向け、「逸脱・病理」の物語から「選択」の物語への変容と枠づけることで、「選択」の物語の影に隠れた不登校経験者の生きる上での葛藤を指摘している。また、近年では、子どもの貧困問題や教育格差の問題を起点にした進路選択のための基礎学力保障の必要性和結び付けられ、新たな問題関心と共に捉えられる傾向もある。<sup>(1)</sup> 詳述すれば、山田(2010)は、進路選択の問題から不登校を捉え、不登校経験者を主な対象にした定時制課程や単位制課程を設置する学校や非一条校である「通信制サポート校」などの新しいタイプの学校が多くみられ、実質不登校の子どもたちの進路選択の受け皿として固定化されてきており、こうした動向を「不登校トラック」の出現と形容している。前期中等教育後の子どもたちの96%が全日制高校に進学する中、残りの約4%の子どもたちや全日制高校を中退した子どもたちにとって非主流の後期中等教育

機関は、主流では支えきれない子ども・若者のセーフティネットとして重要な役割を担っており、このような「不登校トラック」に位置付けられる教育機関の学校生徒文化や対人関係、卒業後の進路選択に焦点を当てた研究の蓄積が近年顕著である。(酒井・林2012, 伊藤2015, 内田2016)

このような中で、不登校の子どもたちの学校外の居場所のひとつとして役割を果たしているのがフリースクールである。奥地(2005)が述べるように、1985年に自身で設立した東京シューレがフリースクールの先駆けと言われ、不登校の子どもたちの学校外の学びの実践だけでなく、社会や学校の不条理や矛盾を指摘し学校外の学びの正統性を対外的に強く主張してきた。

2001年にはNPO法人全国フリースクールネットワークも設立され、「子どもの権利」を中心に据える理念に賛同する居場所が47団体加盟し、ひとつのネットワークを形成することとなる。2016年12月7日に国会で新法として「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」(以後、「教育機会確保法」)が可決された政治的動きにも、奥地圭子を中心とするNPO法人全国フリースクールネットワークが強く関わっており、これらのフリースクールを中心とした学校外の居場所同士の連携は、社会運動体(ネットワーク)として教育や行政に影響を与えうる存在となりつつあると捉えられる。

本論文は、近年のそういった不登校の捉え方や不登校生の子どもたちの居場所の現状をふまえ、「教育機会確保法」の成立をめぐるフリースクール運動をGiddens(1990=1993)やBeck(1994=1997)が掲げる後期近代化の表象やBauman(2000=2001)が指摘する液状化かつ流動化する社会のありさまとして考察するものである。Giddens(1990=1993 他)やBeck(1994=1997)は、現代社会を後期近代(ハイモダニティ)にとらえ、社会の伝統的役割関係が融解していくなかで、個人が個人化(脱埋め込み)される一方で、その不確かさの中で生じるリスクのマネジメントや自己形成を個人で引きうけなければならないと指摘する。加藤(2012)は学校に行かないことを「い

かに意味づけ、解釈するかは社会を編成する力学として考察する必要がある」と指摘しているように、個人や社会のあり方の変化と不登校問題の捉え方は強く結びつくものである。

次章（2章）では、一連の後期近代化論について自己の在り方に着目しながら理論的概略について言及し、3章では近年、特定の不登校生の居場所が中心となって実現した「教育機会確保法」が成立した背景について社会運動的な側面から概観したい。4章で「教育機会確保法」を推進するフリースクール運動と一連の後期近代化論との連関について考察を加えたい。

## 2. 後期近代社会論の概略

後期近代社会とは不確実性と多様な選択肢が混在する環境によって成り立っている。その環境ではライフプランニングを基にした「自己の再帰的プロジェクト reflexive project of the self」(Giddens, 1991=2005, 訳書 p5)に沿った自己、ひいては社会的制度が形成される。こういった変容によって生じる社会生活の開放性や自己アイデンティティや権威とみなされる社会規範の多様化（脱埋め込み）が、より個人の自己存在の重要性を際立てる。<sup>(2)</sup> 同様の文脈で Furlong・Cartmel (1997=2009)も後期近代におけるアイデンティティの脱埋め込みについて指摘している。

後期近代におけるアイデンティティの脱埋め込みが意味することは、若者、とくにあまり恵まれない社会経済的地位にある若者は、分裂し、調和を欠いたアイデンティティをなんとかうまく扱い、またこれを正当化する方法を見つけなければならないということである(Furlong・Cartmel, 1997=2009, 訳書 p118)。

一方で、一連の後期近代化論は「自己の再帰的プロジェクト reflexive project of the self」(前掲)がもたらす「個人の無意味感」をはじめとす

る「実存的不安」の増大も強調する。この不安が人々に自己の「社会的居場所」を求める欲望を刺激し、脱埋め込みをより志向した自己肯定や自己確認を反芻させることとなる。Bauman(2000=2001)の引用文も指摘するように、安定した「存在論的安心 ontological security」(Giddens, 1991=2005, 訳書 p39)の獲得が人々の行動原理となるのである。<sup>③</sup>

共通の利益を基礎にした交渉的合意によってではなく、共通のアイデンティティによって安定をみいだすことが、もっとも合理的な、いや、もっとも効果的なものごとの進め方として浮上したのだ(Bauman, 2000=2001, 訳書 p139)

では、より自己存在の重要性が際立ち、絶え間ない不安の中で、さらなる自己の安定を求めようとする「自己の再帰的プロジェクト reflexive project of the self」(前掲)を可能とする後期近代社会の特質とは何か。Giddens(1991=2005)はモダニティのダイナミズムの特質を端的に3点で言及している。ひとつめは「時間と空間の分離」であり、ふたつめが「脱埋め込みメカニズム」、みつつめが「制度的再帰性」である。これまでの記述と重複する部分もあるが、「時間と空間の分離」とは、場所の状況拘束性が弱まり、新たな形で分離された時間と空間の再統合が促されるというダイナミズムである。「脱埋め込みメカニズム」とは「信頼」を通じた抽象的システムによって相互行為を場所の特殊性から切り離す機能のことである。「制度的再帰性」とは社会生活の組織および変形において、社会生活の状況についての知識に照らして継続的に修正されることを意味する。これらのモダニティのダイナミズムを表す特質は、序章でも言及した「教育機会確保法」の成立の背景を理解するうえで非常に示唆深い。

### 3. 公教育を志向するオルタナティブ教育

「教育機会確保法」は、不登校の小中学生が通うフリースクールや家庭での学習が義務教育として認められる可能性をもつ理念法であり、2016年12月に国会において可決された。内容はあくまでも理念法であり、国や地方公共団体が中心となってすべての児童生徒が安心して教育を受けられるように学校の教育整備を行うだけでなく、多様な学習活動や休養の必要性をふまえ学校復帰にこだわらない情報提供、助言、支援を行っていくことが明記されている。

不登校の子どもたちの学校外の学びを義務教育として保障し、ひいては不登校生の居場所の存在価値を際立たせようとする社会的運動は、奥地圭子が主宰する東京シューレが中心となって推し進められてきた。奥地(2005)は、2005年の段階で、著書の中で既にこういった動きの必要性について言及している。

多様な教育制度を社会に用意していく場合、まず手がかりになるのは、すでに存在し、子どもや親が活用しているオルタナティブな教育機関を正式に認めていくことでしょう。(中略) そのために、「オルタナティブ教育法」とか「フリースクール教育法」など法的措置が取られる必要があります(前掲, p228)

またこの動きは東京シューレだけではなく、2001年に設立されたNPO法人全国フリースクールネットワークの加盟団体同士で運動の理念や意義の共有を行いながら進められていったことも特筆すべき点であろう。その理念や意義とは、不登校の子どもたちの学びの現状を義務教育制度に位置づけられない不安定なものであり、その学びにかかる費用は無償ではなく保護者の負担によってまかなわれているとみなし、自身を公教育に位置づけることでその問題を解消しようとするものであった。図1は、NPO法人全国フリースクールネットワークへの加盟団体数の変化を2001年の設立年から時系列で整理したグラフであり、その運動の広がり具合が確認できる。設

立年（総数 47 団体）から 2010 年（総数 82 団体）にかけて順調にその数を伸ばし、2011 年に一度落ち込みを見せるものの、その後すぐに回復基調に転じ、2015 年には総数 84 団体が加盟することになる。また表 1 は、2016 年 4 月 15 日に行われた「教育機会確保法」についての共同記者会見の発表者の氏名と所属をまとめたものである。この表からは、不登校をめぐる社会的運動がフリースクールをはじめとする不登校生の居場所だけでなく、障害者運動や学校制度改革など多様な領域に拡散していることが窺える。

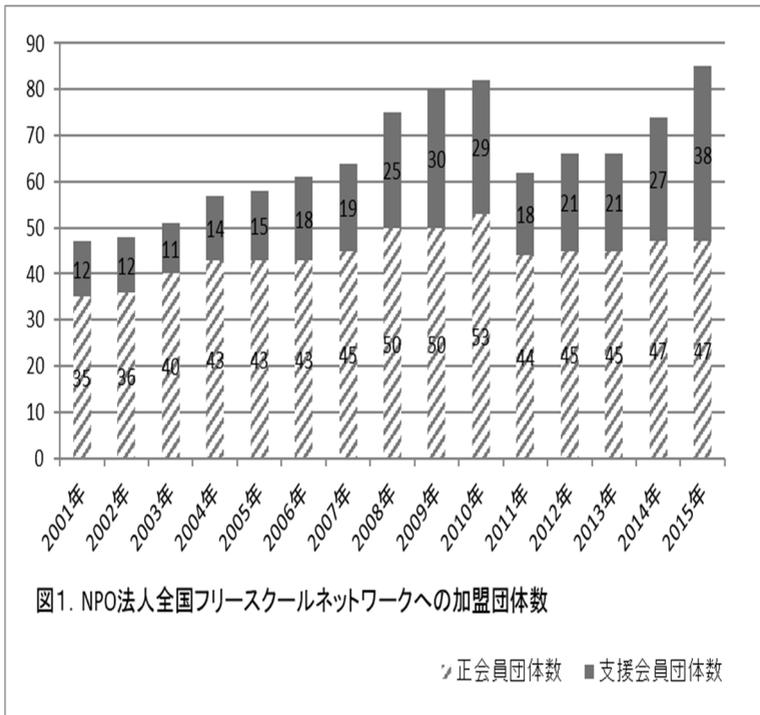


表1. 2016年4月15日に行われた「教育機会確保法」についての共同記者会見の発表者

氏名	所属
下村小夜子	不登校・ひきこもりを考える当事者と親の会ネットワーク代表、登校拒否を考える会 佐倉・千葉休もう会世話人
伊藤書佳	不登校・ひきこもりについて当事者と語り合いたいけふくろうの会代表
高垣忠一郎	登校拒否・不登校問題全国連絡会代表、京都教育センター代表
池田賢市	中央大学文学部教授教育学専攻
石井小夜子	弁護士
山下耕平	フリースクール・フォロ理事・事務局長
中村文夫	公教育計画学会会長
高木千恵子	障害児を普通学校へ・全国連絡会運営委員
中島浩壽	日本社会臨床学会運営委員
内田良子	NPO法人登校拒否・不登校を考える全国ネットワーク有志連合・子ども相談室「モモの部屋」主宰

高山(2016)を参照して作成

「教育機会確保法」の成立に至る経緯から、フリースクールをはじめとする不登校生の居場所が公教育化を志向する流れが鮮明になり、一連の社会的運動が既存の不登校問題にとどまらない多様な問題関心の下支えされていることを明らかにした。では、このような変容を後期近代社会の表象としてどのように捉えることができるのか。次章で後期近代化論との接合を試みたい。

#### 4. 後期近代社会の中のフリースクール運動

不登校とは社会構築主義的な概念であり、学校を休む、学校に行かないという行為を自己及び他者がどのようなまなざしを向けるかによって、その概念が持つ意味合いは多様に変化する。ただ、現代の学校社会においては、学校を一時的にでも離れることには、ネガティブな意味づけが付される。<sup>(4)</sup> 学校という制度がもつ求心性が薄れつつある現代において、学校という場所で自己を見いだすことが難しい子どもたちは底知れぬ実存的不安を抱えることにもなる。そういった実存的不安を解消させるために、ネガティブな意味づけや学校そのものから子どもたちを避難させ、不登校に当事者の視点から新たな意味づけを与える点に、フリースクールをはじめ

とする不登校生の居場所の役割があり、この点において「自己の再帰的プロジェクト reflexive project of the self」(Giddens, 1991=2005, 訳書 p5)に沿った自己形成のありさまをみることができる。2章で確認したGiddens(1991=2005)のモダニティのダイナミズムの特質を糸口としながら、「教育機会確保法」の成立にみるフリースクール運動の再帰性について考察する。

### (1)「時間と空間の分離」

学校を休む、学校に行かないという行為は、それまで自明視されていた時間や空間とのつながりを断つことであり、不登校の子どもたちは、それまでとは異なる時間や空間に位置づけられる。つまり、学校という場所の状況拘束性が弱まり、不登校の子どもたちは再帰的に自己のあり方を模索する必要性に迫られるのである。そういった子どもたちを新たな形で統合する受け皿となったのがフリースクールをはじめとする不登校生の居場所といえよう。

### (2)「脱埋め込みメカニズム」

Giddens(1991=2005)は「脱埋め込みメカニズム」の抽象的システムについて貨幣経済を例とする「象徴的通標」と医者やカウンセラー、セラピストをはじめとする「専門家システム」のふたつのタイプがあるという。学校を休む、学校に行かないという行為は、現状においては医療・心理や福祉の専門的領域に接続されやすい。そういった「場」では、子どもたちの相互行為を場所の特殊性から切り離す機能が作用する。東京シューレの代表である奥地(2005)自身も不登校の正統性を「子どもの権利」という憲法や子どもの権利条約など法規を意識した概念を用いて主張しているし、一方で近年の不登校問題は発達障害や子どもの貧困といった医療・心理や福祉の専門的領域との関連で語られる傾向が強くなってきている。学校を休む、学校に行かないという行為は個別的な行為は、不登校という文脈で

一般化され、その特殊性から切り離される。とすれば、学校を休む、学校に行かないという行為は、抽象的システムである不登校という社会的問題を通して脱埋め込みメカニズムが作用しているといえる。

### (3) 「制度的再帰性」

Giddens(1990=1993)は「再帰的秩序化と再秩序化」という表現でも言及しているが、「教育機会確保法」の成立も「制度的再帰性」によって説明することができる。後期近代社会における再帰性によって、絶えず修正が加えられるのは個人のアイデンティティだけではない。フリースクールを公教育の選択肢として位置づけようとする動きは、少なくともフリースクールの萌芽期であった1980年代には見られなかった動きであり、1990年代の通学定期券運動や2007年に学校法人格の「東京シューレ葛飾中学校」の設立を機にどんどんと加速していくことになる。自己の存在論的不安を乗り越えることを意図した不登校の社会的認知を求める動きが、結果的に制度的な改革を実現することとなるのである。

## 5. おわりに

本稿では、「教育機会確保法」を推進するフリースクール運動と一連の後期近代化論との連関について考察を試みた。「教育機会確保法」は、理念法であり、国や地方公共団体がとるべき具体的な施策については言及されていない。それは今後の議論に委ねられる部分であり、実際全国各地で不登校生の居場所に関わる市民団体等が主導となって講演会や勉強会が活発に開かれている。市民サイドからどのような事柄が要求され、行政サイドがどのような施策を講じるかは、まさにこれからであるが、この過程においても、本稿で指摘したダイナミズムを作用すると考えられる。本稿で整理した枠組みを参照しながら、現在進行形である「教育機会確保法」を軸としたフリースクール運動の動向を捉えていくことを今後の課題としたい。

<註>

- (1) 2016年8月29日付の『Fonte』（不登校新聞社発行）では、「平成27年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」の結果をふまえて、学校にほとんど通わない「年間出席日数が10日以下」の状態を「無登校」という言葉を用いて新たな問題提起を行っている。
- (2) Beck(1994=1997)は集合的な社会的アイデンティティの弱体化による人生経験の多様化が社会的紐帯の緩みを生み出すと説明している。
- (3) Furlong・Cartmel(1997=2009, 訳書 p281)は、人々が絶えず抱える不安を脱埋め込みによる主観と客観の乖離として「認識論的誤謬」と表現している。
- (4) 山田(2010)は、長期欠席の妥当な理由について時系列に整理し、1950年代では家庭の経済的理由が多くを占めていたが、1980年代以降では学校での人間関係やいじめなどの理由が多くなっていると指摘している。

<参考文献>

- Bauman, Zygmunt, 2000, LIQUID MODERNITY, Polity press., (=森田典正訳, 2001, 『リキッド・モダニティ 液状化する社会』大月書店).
- Beck, Ulrich, 1986, RISKGESELLSHAFT: Auf dem Weg in eine andere Moderne, Suhrkamp Verlag., (=東廉・伊藤美登里訳, 1998, 『危険社会—新しい近代への道』法政大学出版局).
- Beck, Ulrich・Giddens, Anthony・Lash, Scott, 1994, Reflexive Modernization, Polity Press., (=松尾精文・小幡正敏訳, 1997, 『再帰的近代化—近現代における政治、伝統、美的原理』而立書房).
- 藤根雅之・橋本あかね, 2016, 『全国のオルタナティブスクールに関する調査報告書』全国オルタナティブ学校実態調査プロジェクト。
- フリースクール全国ネットワーク編, 2004, 『日本のフリースクールの現状と未来への提言』

- Furlong, Andy・Cartmel, Fred, 1997, *Young People and Social Change*, Open University Press., (=2009, 乾彰夫・西村貴之・平塚眞樹・丸井妙子訳『若者と社会変容 リスク社会を生きる』大月書店).
- Giddens, Anthony, 1990, *The Consequences of Modernity*, Polity Press., (=1993,『近代とはいかなる時代か?—モダニティの帰結』而立書房).
- Giddens, Anthony, 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Polity Press., (=2005, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会』ハーベスト社.)
- 伊藤秀樹, 2009, 「不登校経験者への登校支援とその課題: チャレンジスクール, 高等専修学校の事例から」『教育社会学研究』84 pp207-226.
- 伊藤秀樹, 2015, 「“非主流”の後期中等教育機関を概観する: 生徒層・カリキュラム・進路」『東京大学大学院教育学研究科紀要』54, pp. 551-563.
- 加藤美帆, 2012, 『不登校のポリティクス 社会統制と国家・学校・家族』勁草書房。
- 貴戸理恵, 2004, 『不登校は終わらない - 〈選択〉の物語から〈当事者〉の語りへ』新曜社。
- 奥地圭子, 2005, 『不登校という生き方—教育の多様化と子どもの権利』日本放送協会出版。
- 酒井朗, 林明子, 2012, 「後期近代における高校中退問題の実相と課題—『学校に行かない子ども』問題としての分析」『大妻女子大学家政系研究紀要』第48巻, pp. 67-78.
- 高山龍太郎, 2016, 「不登校の子どもの学習権保障をめざす運動 - 多様な教育機会確保法案を中心に」『第68回日本教育社会学大会資料』.
- 竹中烈, 2016, 『変化する「居場所」・多様化する「居場所」——新たな学校のあり方を考える』『児童心理』70(4), pp38-44.
- 内田康弘, 2016, 「サポート校生徒と大学進学行動—高校中退者の「前籍校」の履歴現象効果」に着目して」『教育社会学研究』第98集, pp. 197-217.

山田哲也, 2010, 「学校に行くことの意味を問い直す—『不登校』という現象—」志水宏吉監修『教育社会学への招待』大阪大学出版会, pp. 77-95.

就職に対する意識調査から見た、属性ごとの大学生のキャリア観

-本学学生アンケート調査を参考に-1

Outlook on carrier of the university student , judging from a survey for finding employment. -reference by student questionnaire survey(1)

小川現樹

近年就職市場（企業においては採用市場）においては、超売手市場と言われている。その中で学生の就職に対する意識はどのようなものか、将来働くことについてどのように考えているか、年次ごとの変化を追い、キャリア教育の手法について考えていきたい。

今回は紙面の関係で今年度春学期のアンケート集計データのみの提示になる。考察については次の機会に行いたい。

アンケート 「就職についての意識調査」

- アンケートの趣旨：現在の就職市場において、将来の夢や就きたい仕事、働くことへの価値観や仕事選びの基準がどのように変遷するか。また大学時代の取り組みと就職がどのように変遷してゆくかの考察。
- アンケート実施期間：2017年7月18日～28日
- アンケート実施対象：愛知文教大学に在籍する一般学生及び留学生（1～4年次）。対象者の属性は図1を参照されたい。（n=213）
- 調査方法：1年次～3年次は、2017年度の必修キャリア科目である、「大学の学びとキャリア設計Ⅰ及びⅡ」「キャリアデザインⅠ及びⅡ」「キャリアプランニングⅠ及びⅡ」内において、調査該当日の出席者を対象に。また4年次については「キャリアアップゼミA」と、担当教員研究室への来訪者及びキャリアセンター来訪者に対して実施した。
- 2017年度春学期の調査を「time01」とし、現1年次生の意識の変化も追って行く。

		全体	1年次	2年次	3年次	4年次
全体		213	77	58	59	19
		100.0%	36.2%	27.2%	27.7%	8.9%
属性	一般	71	23	17	19	12
		33.3%	10.8%	8.0%	8.9%	5.6%
	留学生	142	54	41	40	7
		66.7%	25.4%	19.2%	18.8%	3.3%

(図 1) ※上段：回答者数 下段：構成比 (対全体)

■ アンケート内容：

1. あなたに夢はありますか？
2. 自分のやりたい仕事を決めていますか？
3. 就職について不安はありますか？
4. 就職に対して、なにか準備をしていますか？
5. 就職を意識しはじめた時期は？
6. 働くことについて、あなたの考え方に近いものを【ひとつ】教えてください
7. 企業（就職先）を選ぶときに重視することは何ですか？（3つお答えください）
8. 将来的に「転職」をどう思いますか？
9. 大学生活で最も力を入れていることを【ひとつ】教えてください
10. 日本での就職を考えていますか？【留学生のみ】
11. キャリアセンターを利用したことがありますか？
12. 就職に対しての不安があれば記入ください。（自由記入）

なお、今回の集計結果の掲載については、4、7、8、11、12を除外している。

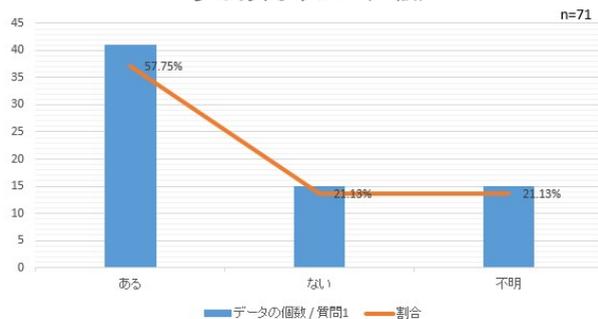
【集計】アンケート内容1 (全体 n=211)

夢はありますか？(全体)



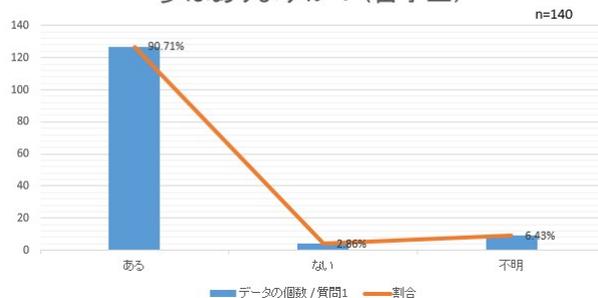
【集計】アンケート内容1 (全体 (一般学生) n=71)

夢はありますか？(一般)

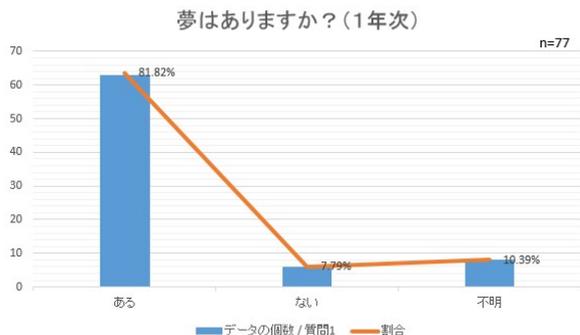


【集計】アンケート内容1 (全体 (留学生) n=140)

夢はありますか？(留学生)



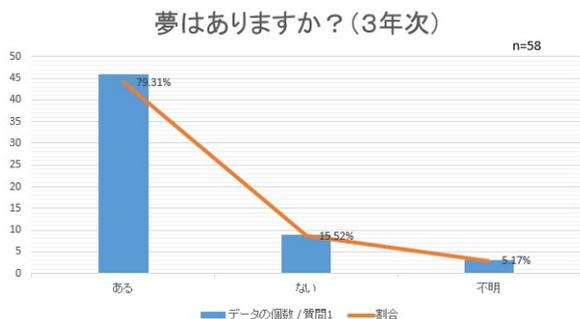
【集計】 アンケート内容 1 (1年次 n=77)



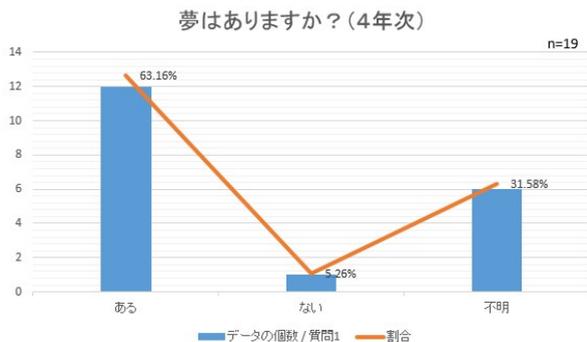
【集計】 アンケート内容 1 (2年次 n=57)



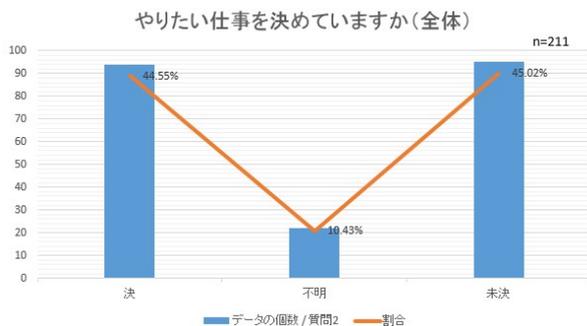
【集計】 アンケート内容 1 (3年次 n=58)



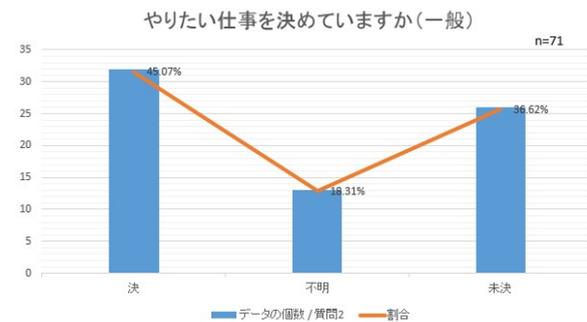
【集計】 アンケート内容 1 （4年次 n=19）



【集計】 アンケート内容 2 （全体 n=211）

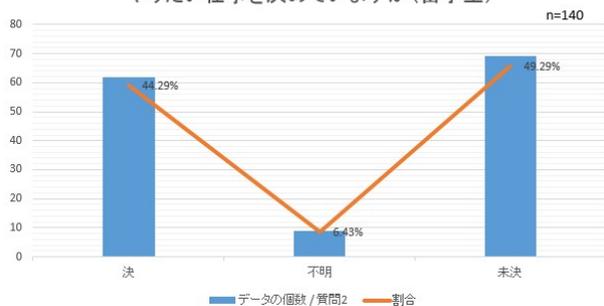


【集計】 アンケート内容 2 （全体（一般学生） n=71）



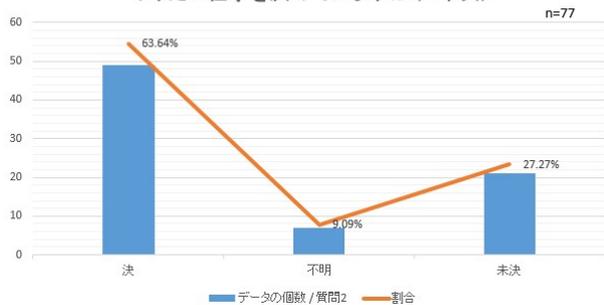
【集計】 アンケート内容 2 (全体 (留学生) n=140)

やりたい仕事を決めていますか(留学生)



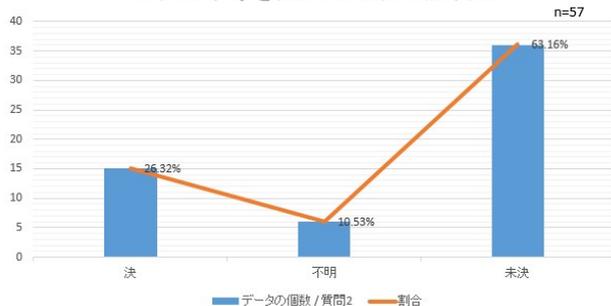
【集計】 アンケート内容 2 (1年次 n=77)

やりたい仕事を決めていますか(1年次)

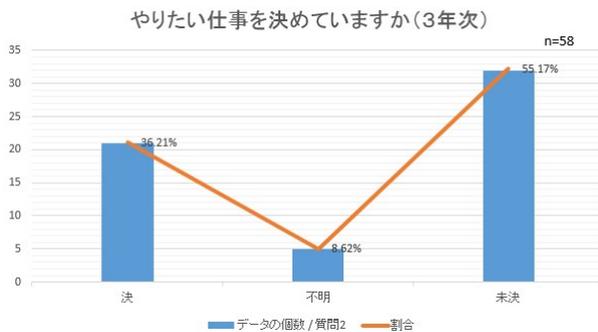


【集計】 アンケート内容 2 (2年次 n=57)

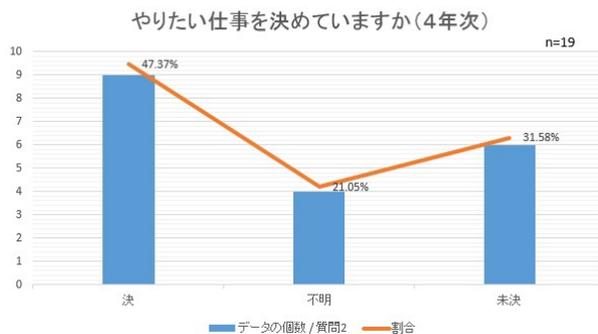
やりたい仕事を決めていますか(2年次)



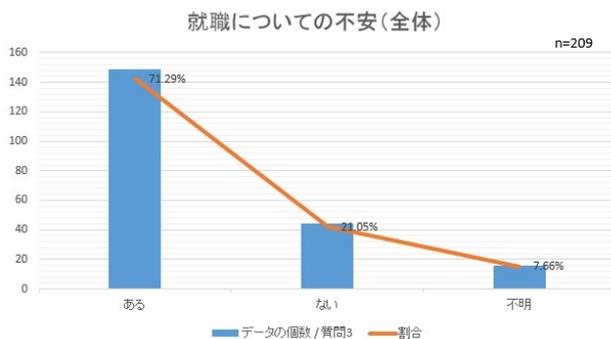
【集計】 アンケート内容 2 （3年次 n=58）



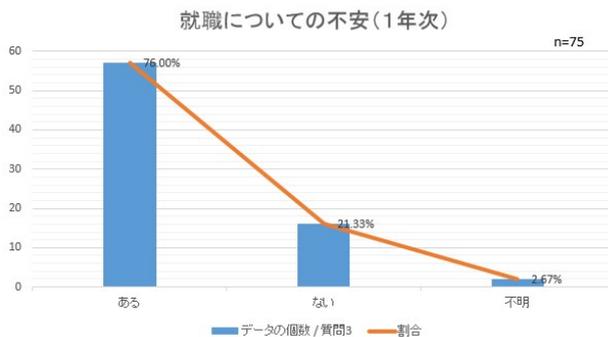
【集計】 アンケート内容 2 （4年次 n=19）



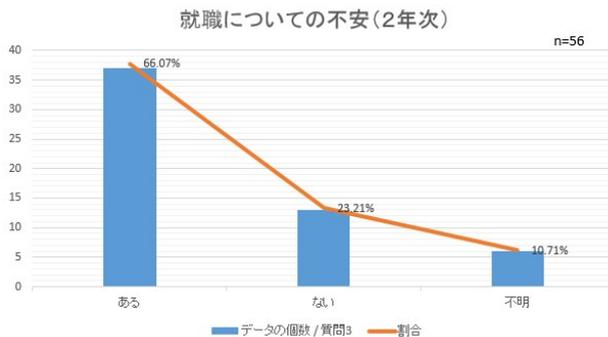
【集計】 アンケート内容 3 （全体 n=209）



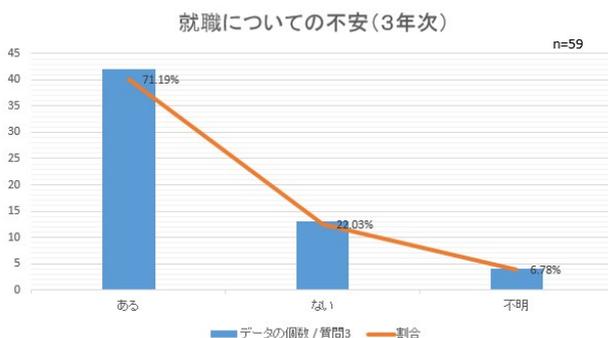
【集計】 アンケート内容 3 (1年次 n=75)



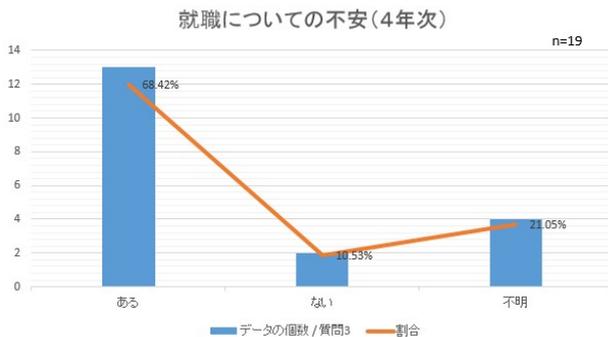
【集計】 アンケート内容 3 (2年次 n=56)



【集計】 アンケート内容 3 (3年次 n=59)



【集計】 アンケート内容 3 (4年次 n=19)



【集計】 アンケート内容 5 (全体 (一般学生) n=71)



【集計】 アンケート内容 5 (全体 (留学生) n=131)



【集計】アンケート内容 6 (全体 n=201)

働き方の価値観(全体)



【集計】アンケート内容 6 (全体 (一般学生) n=69)

働き方の価値観(一般)

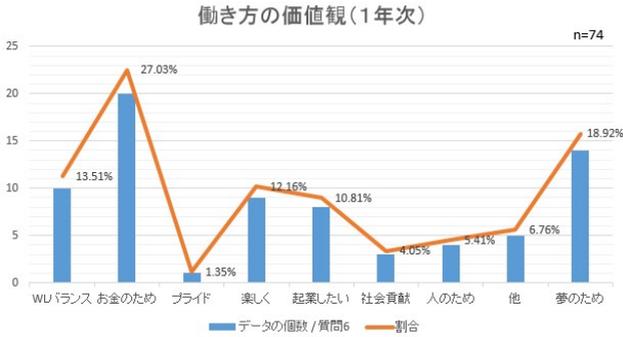


【集計】アンケート内容 6 (全体 (留学生) n=132)

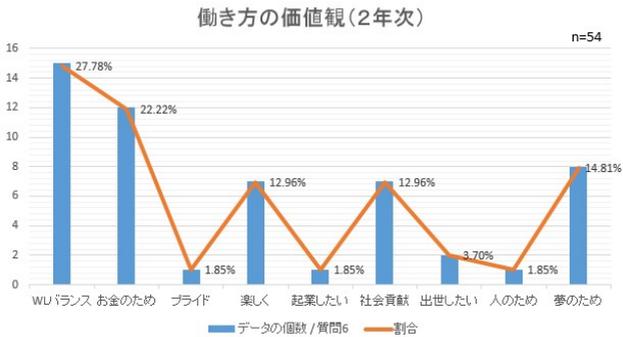
働き方の価値観(留学生)



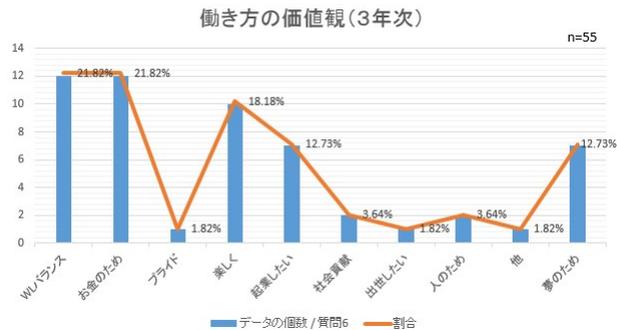
【集計】アンケート内容6（1年次 n=74）



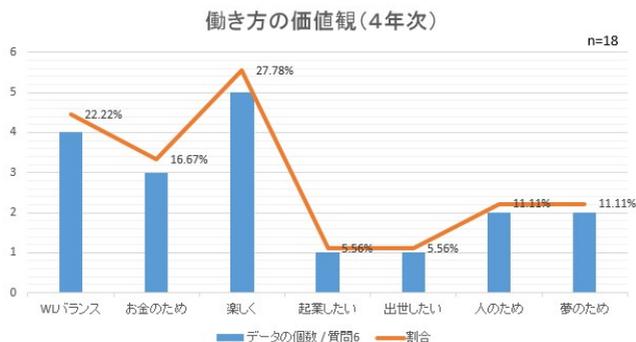
【集計】アンケート内容6（2年次 n=54）



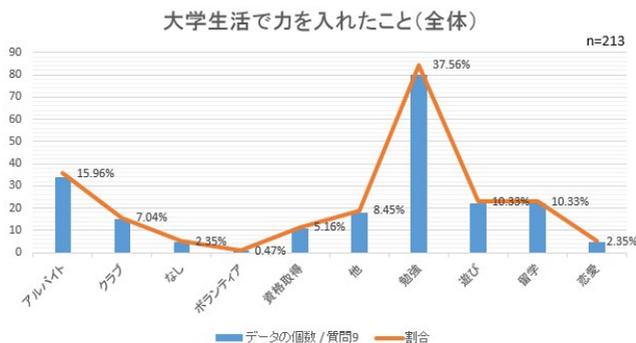
【集計】アンケート内容6（3年次 n=55）



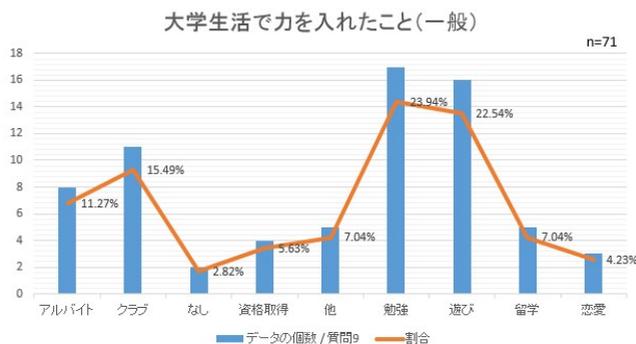
【集計】アンケート内容 6 (4年次 n=19)



【集計】アンケート内容 9 (全体 n=213)



【集計】アンケート内容 9 (全体 (一般学生) n=71)



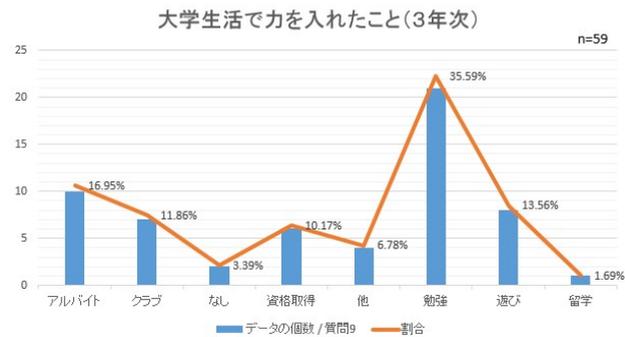
【集計】アンケート内容9（1年次 n=19）



【集計】アンケート内容9（2年次 n=58）

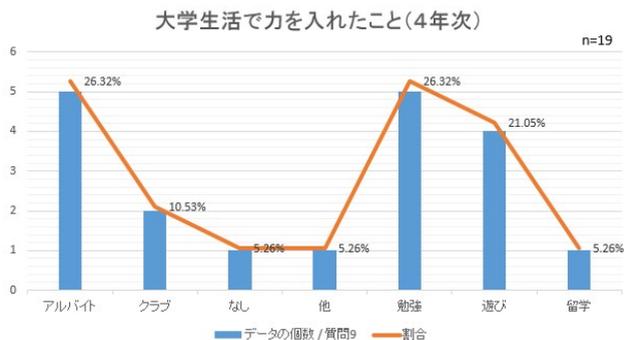


【集計】アンケート内容9（3年次 n=59）

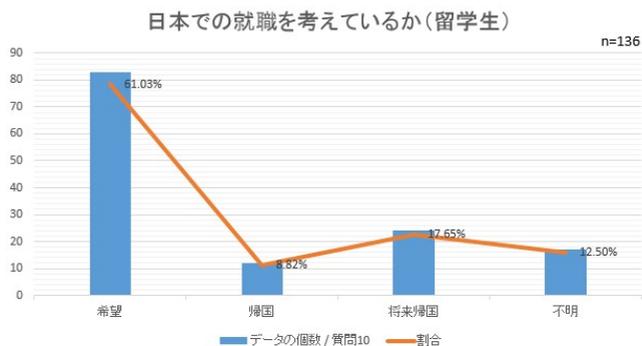


就職に対する意識調査から見た、属性ごとの大学生のキャリア観  
— 本学学生アンケート調査を参考に — 1

【集計】 アンケート内容 9 (4年次 n=19)



【集計】 アンケート内容 10 (全体 (留学生) n=136)



## 1 はじめに

現在、愛知文教大学（以下、本学。）では、次のような「教育課程の編成及び実施に関する方針（カリキュラム・ポリシー）」にもとづき、「グローバル英語プログラム」および「教員養成プログラム」とあわせて、「中国語・中国文化プログラム」というかたちで、中国語教育に力が入れている。（愛知文教大学2017）

人文学部人文学科では、教育目的を達成し学位を授与するために、言語による自己表現力や社会人基礎力、そして日本の伝統文化の理解を重視する教養教育と、「グローバル英語プログラム」、「中国語・中国文化プログラム」、「教員養成プログラム」という教育プログラムを中心としたカリキュラムを編成しています。

(pp. 13-14)

ここ数年間、中国語系科目の再編成が継続して行われ、2015年度のカリキュラムでは、外国語コースの学生たちを対象に、1年次に週2回90分の中国語授業が必修化された。さらに、2016年度のカリキュラムでは、留学生を除く全学生を対象に、1年次に週2回90分の中国語授業が必修化された。これらの成果は、次に示す【表1】のように近年のHSK合格結果にはっきりと表れている。

そして、本年2017年度のカリキュラムでは、さらなる中国語教育の発展を目指し、留学生を除く一般学生を対象に、1年次には週2回90分の必修の中国語授業の他に、2年次には週1回90分の2つの中国語授業うち、少なくとも1つを選択するかたちで必修となった。

【表1】 入学年度別 HSK 合格者率 一覧表 [2017年9月時点]

学年 (入学年度)	HSK 3級	HSK 4級	HSK 5級	HSK 6級	合格者 数	履修者 数	合格者率 (%)
卒業生(2013)	1	3	1	0	4	21	19
4年生(2014)	2	3	2	1	6	24	25
3年生(2015)	2	2	1	1	4	11	36.4
2年生(2016)	2	0	1	0	3	21	14.3

※HSK3級（初級）から6級（上級）までの数値は、のべ合格者数。

※2016年度入学の2年生たちの大半は、2018年3月にHSKを受験する予定。

そこで本稿では、スタートしてから半年が経過した現段階で、本年2017年度の新カリキュラムにおける「中国語・中国文化プログラム」について、CCラウンジでの学習支援を中心に、現状を分析し、今後の改善策と展開について述べていくことにする。

## 2 中国語・中国文化プログラムの授業科目

さて、本学2017年度カリキュラムの「中国語・中国語プログラム」では、【表2】のように、1年次には、発音を中心に中国語の基礎を身につけてもらい、2・3年次には、習熟度別に「中級中国語」（中級レベル）と「中国語講読」（中・上級レベル）の少なくとも一つを履修し、HSK各級の合格を目指してもらっている。

そして、3年次からは、より高度かつ実践的な語学力を習得してもらうために、「ビジネス中国語」「通訳中国語」「観光中国語」「医療中国語」などの、専門性の高い中国語の授業が用意されている。

【表2】 2017年度カリキュラム 中国語関連科目 一覧表

科目名	授業の内容と目的	学年配当	単位	必修
入門中国語文法 (HSK2級)	中国語の発音と基礎を学ぶ	1年春期	2	必修
入門中国語作文 (HSK2級)	中国語の発音と基礎を学ぶ	1年春期	2	必修
HSK 対策中国語集中講座A	夏の長期休暇中に HSK 合格を目標に集中勉強	1年春期	1	
中国語圏の歴史 (前近代)	中国語圏の古代から前近代までの歴史を学ぶ	1年春期	2	
中国語圏の文化と思想	中国語圏の文化と思想を広く学ぶ	1年春期	2	
初級中国語文法 (HSK2級)	中国語の初級文法を習得する	1年秋期	2	必修
初級中国語作文 (HSK2級)	中国語の初級文法を習得する	1年秋期	2	必修
HSK 対策中国語集中講座B	春の長期休暇中に HSK 合格を目標に集中勉強	1年秋期	1	
中国語圏の文学	中国文学を古典(漢文)を通じて学ぶ	1年秋期	2	
中国語圏の歴史 (近現代)	中国語圏の近代・現代の歴史を学ぶ	1年秋期	2	
中国語講読A	HSK3級レベル長文の読解とリスニングを練習	2年春期	2	選択必修
中級中国語 (HSK3級)A	HSK3級レベルの文法と作文を学ぶ	2年春期	2	選択必修
教養中国語A	基礎から文法を学ぶ。主に留学生が対象	2年春期	2	
日中文化交流A	日本に影響を与えた中国文化を学ぶ	2年春期	2	
漢文学A	中級レベルの漢文学習。教職国語の必修科目	2年春期	2	

中国語講読B	HSK3級レベルの長文の読解とリスニングを練習	2年秋期	2	選択必修
中級中国語(HSK3級)B	HSK3級レベルの文法と作文を学ぶ	2年秋期	2	選択必修
教養中国語B	基礎から文法を学ぶ。主に留学生が対象	2年秋期	2	
日中文化交流B	日本に影響を与えた中国文化を学ぶ	2年秋期	2	
漢文学B	上級レベルの漢文学習。教職国語の必修科目	2年秋期	2	
上級中国語(HSK4級)A	HSK4級レベルの文法と作文を学ぶ	3年春期	2	
ビジネス中国語A	ビジネスに役立つ文書・メールの作成練習	3年春期	2	
観光中国語A	通訳案内士を目指した、中国語による観光案内練習	3年春期	2	
中国地域研究A	中国の社会問題に関する講義とグループワーク	3年春期	2	
上級中国語(HSK4級)B	HSK4級レベルの文法と作文を学ぶ	3年秋期	2	
ビジネス中国語B	ビジネスに役立つ文書・メールの作成練習	3年秋期	2	
観光中国語B	通訳案内士を目指した、中国語による観光案内練習	3年秋期	2	
中国地域研究B	中国の社会問題に関する講義とグループワーク	3年秋期	2	
通訳中国語A	日中同時通訳を目指した、実践トレーニング	4年春期	2	
医療中国語A	医療事務など、実務的な中国語能力の開発	4年春期	2	
通訳中国語B	日中同時通訳を目指した、実践トレーニング	4年秋期	2	
医療中国語B	医療事務など、実務的な中国語能力の開発	4年秋期	2	

本学では、円滑なコミュニケーションとは対峙する相手が住む国の文化や歴史的な背景の理解があつてこそ実現するものだという考えから、【表2】のように、語学系の授業だけでなく、中国語圏についての理解を深めるため、「中国語圏の文化と思想」「中国語圏の文学」「中国語圏の歴史（前近代）」「中国語圏の歴史（近現代）」「日中文化交流」「漢文学」など、文化・歴史系の授業が様々に用意されている。

また、本学では、中国語学習のサポートとして、この数年来実施されてきた、「中国への長期交換留学制度」「中華文化倶楽部での日中学生間の相互学習」「授業期間および長期休業期間の教員による HSK 対策補習」「中国語ルームでのネイティブ学生たちによる学習支援」に加えて、本年度から「中国語 HSK 目標達成型奨学金」と「CCラウンジでの学習支援」がスタートした。【注1】

### 3 中国語 HSK 目標達成型奨学金

本学には4種類の学内奨学金(愛知文教大学奨学金・愛知文教大学特待生奨学金・愛知文教大学外国人留学生奨学金・目標達成型奨学金)があるが、そのうちの目標達成者を対象とする「目標達成型奨学金」に、本年2017年4月に、「中国語 HSK 目標達成型奨学金」が以下のような新たななかたちで加えられた。

【表3】 愛知文教大学 中国語 HSK 目標達成型奨学金

① HSK6 級合格：10000 円の奨学金を支給。	(団体受験料：8554 円)
② HSK5 級合格：5000 円の奨学金を支給。	(団体受験料：7193 円)
③ HSK4 級合格：3000 円の奨学金を支給。	(団体受験料：5638 円)
④ HSK3 級合格：1000 円の奨学金を支給。	(団体受験料：4666 円)

※在学期間中1回に限り、HSK2 級検定料相当(4277 円)を受験者全員に補助。  
※また同補助とは別に、3 級以上の合格者には、上記のごとく奨学金を支給。

本年2017年度の新カリキュラムでは、1年秋期の必修科目「初級中国語文法(HSK2級)」の履修者は、原則として、学期末(本年度は2018年3月)に2級レベル以上のHSKを受験することになっている。しかし、【表3】のように、在学中1回に限られ、合否にかかわらず、本学からHSK2級相当の検定料(団体割引後価格の4277円)が補助されるため、事実上、自己負担金無しでの受験が可能となっている。また、HSK3級以上の場合でも、合格した場合は、前述の検定料補助金にプラスして、級ごとに奨学金が支給されるので、結果的に検定料が返金される仕組みとなっている。

こうした、経済的な後押しにより、本年度末の2018年3月のHSKには、現1年生たちの他、現2年生以上の在校生たちの受験が促進されることも期待される。

#### 4 CCラウンジでの中国語学習支援の現状

CCラウンジは、「Chinese Communication Lounge」の略称であり、学生たちの授業外の自主的な中国語学習を促進することを目的に、本学の入試広報センター長の山本眞琴氏による立案とカリキュラムリーダー(中国語)の辻千春氏による設計で、本年4月から本学国際交流センター内に設置された。【注2】

同ラウンジには、中国語の辞書や参考書が用意されており、学生たちは自由に利用できるようになっている。また、本年度秋期からは、映画やドラマ、アニメなどのDVD教材も学生たちが自由に利用できるように準備中である。

さらに、同ラウンジでは、本学中国語科教員の馬燕氏と筆者とのコーディネートにより、毎週決まった時間にTA・SAに任命された中国語ネイティブの留学生たちに在室してもらい、訪れた学生たちへの中国語指導を行っている。(今年4月に正式に任命された本学の中国人の院生TA1名と学部生SA5名が交代で担当。)

特に、1年生たちには、本年度、筆者が担当した春期必修授業「入門中国語文法(HSK2級)」にて、少なくとも週に1回、CCラウンジにてTA・SAの中国語指導を受けるようにと指導しており、秋期の必修授業「初級中国語文法(HSK2級)」においても、継続して受講生たちに同学習支援の利用を推奨していく予定である。

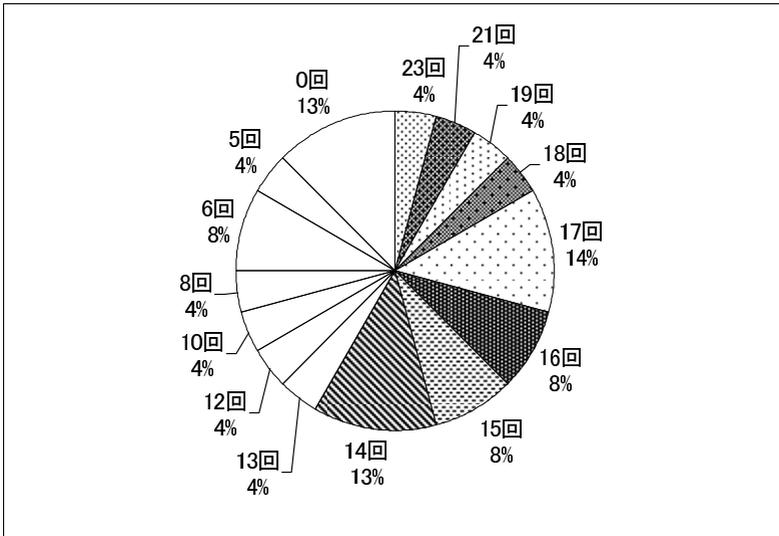
【表4】 2017年度 春期 CCラウンジ TA・SA 在室スケジュール

曜日	1限 9:20 - 10:50	2限 11:00 - 12:30	昼休み 12:30 - 13:10	3限 13:10 - 14:40	4限 14:50 - 16:20	5限 16:30 - 18:00
月			CCラウンジ	CCラウンジ (6月に追加)		
火			CCラウンジ			CCラウンジ (6月に追加)
水			CCラウンジ		CCラウンジ	
木		CCラウンジ (6月に追加)	CCラウンジ		入門中国語 作文 (HSK2級)	
金	入門中国語 文法 (HSK2級)		CCラウンジ		CCラウンジ	部活 (中華文化 倶楽部)

この【表4】のように、本年度の春期授業期間中、1年生の中国語授業「入門中国語作文 (HSK2級)」（木4限）と「入門中国語文法 (HSK2級)」（金1限）が入っていない曜日であっても中国語を勉強できるようにするため、4月14日金曜日から7月27日木曜日まで14週にわたって、月曜日から金曜日までの昼休みと、水曜日4限と金曜日4限、さらに6月からは月曜日3限と火曜日5限と木曜日2限、TA・SAたちにCCラウンジに在室してもらい、1年生たちにはピンインの発音と教科書本文の朗読を中心に、上級生たちには作文の添削やHSK対策など中国語の学習指導をもらった。

このように、CCラウンジでの学習支援の環境を整えたにもかかわらず、1年生受講生全24名の、この春期の平均利用回数は「12.3回」（全14週）あり、必修授業「入門中国語文法（HSK2級）」で課した「少なくとも週に1回はCCラウンジでの学習支援を利用する」という目標を、平均の数値は下回った。

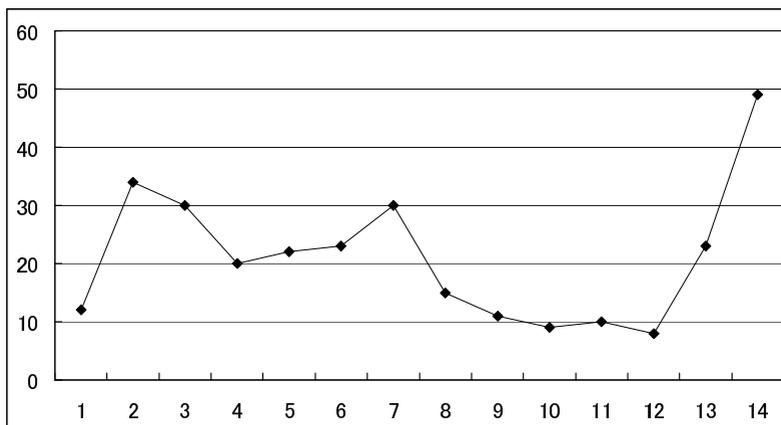
【表5】 2017年度 春期 CCラウンジ学習支援 個人利用回数（1年生：全14週）



しかし、【表5】からも明らかのように、「少なくとも週に1回」、つまり「全14週のうち14回以上」という課題をクリアしたのは、24人のうち14人（最多23回）で、全受講生の半数以上となる「54%」に達している。

また、下記の【表6】からわかるように、時期によって学習支援の利用者数に大きな変動も見られる。その一番大きな要因は、1年生の必修の中国語授業「入門中国語作文（HSK2級）」と「入門中国語文法（HSK2級）」の試験日程によるものと考えられる。

【表6】 2017年度 春期 CCラウンジ学習支援 週間利用者数 (1年生)



※縦軸は一週間ごとの学習支援の利用者のべ人数で、横軸は金曜日から翌週の木曜日までの1週間を単位とした、第1週から第14週までを表す。

実際、この春期、両授業では合同で、中間試験が6月15日木曜日(第8週)に、期末試験が7月28日金曜日(第14週)に実施されており、その各前週に実施された教科書本文の朗読試験の対策と併せて、1年生たちが足繁くCCラウンジに通い、TA・SAたちの学習支援を利用している状況が読み取れる。

そこで、本年度秋期からは、両授業の中間試験および期末試験の実施直前の2週間については、月曜日から金曜日までの昼休みには、通常の学習支援担当TA・SAの他に、さらに1名を追加して同1年生受講生たちに対応することも検討したい。

## 5 今年度秋期以降のCCラウンジでの中国語学習支援

既に述べたように、今年度春期に、4月14日金曜日から7月27日木曜日まで14週にわたって、CCラウンジでの中国語学習支援を実施した。その最終日の後、1年生たち(24名中21名)に実施したアンケートと結果が以下の通りである。

【資料7】 2017年度 春期 CCラウンジ学習支援 1年生アンケート結果

No	項目	評価					平均値
		5 人 数	4 人 数	3 人 数	2 人 数	1 人 数	
1	あってよかった。	9	7	4	1	0	4.1
2	内容は適切だった。	8	6	3	4	0	3.9
3	分量は適切だった。	6	7	5	2	1	3.7
4	昼休み(週5回)の実施は適切だった。	6	7	5	3	0	3.8
5	「水4・金4限」の実施は適切だった。 (4月～5月)	5	5	9	1	1	3.6
6	「水4・金4+月3・火5・木2限」の実 施は適切だった。(6月～7月)	8	5	6	2	0	3.9
7	楽しかった。	8	7	4	2	0	4.0
8	中国語の勉強に役立った。	10	5	4	2	0	4.1
9	中国語の勉強に意欲が湧いた。	5	10	4	2	0	3.9
10	中国語の検定試験(HSKなど)にチャ レンジしたくなった。	4	6	7	4	0	3.5
11	中国語を話す国に対する関心が高 くなった。	4	10	6	1	0	3.8
12	中国語を話す国へ行きたくな った。(旅行など)	4	5	9	1	2	3.4
13	中国語を話す国へ留学に行きたく な った。	3	5	9	2	2	3.2
14	中国語を話す国へ長期留学(半年以 上)に行きたくな った。	3	5	9	2	2	3.2

15	中国人TASA(たち)と交流したくなった。	4	4	9	3	1	3.3
16	学内の中国人留学生(たち)と交流したくなった。	3	6	10	1	1	3.4
17	学外の中国人留学生(たち)と交流したくなった。	3	6	10	1	1	3.4
18	一般の中国人(たち)と交流したくなった。	3	6	9	2	1	3.4
19	総合的に判断して、今学期のCCラウンジに満足だった。	7	7	5	1	1	3.9
20	次学期も、CCラウンジを利用したい。	8	5	7	1	0	4.0

※項目ごとに、「5:強くそう思う」「4:そう思う」「3:どちらでもない」「2:少しそう思う」「1:全くそう思わない」の5段階で評価してもらうとともに、自由記述により感想や意見、要望などを求めた。

同アンケート【表7】では、項目19の平均値が3.9と、1年生たちがこの春期のCCラウンジでの学習支援に対して、おおむね満足しているという結果が出ている。それに、項目20の平均値が4.0と、本年度秋期以降への期待も大きいことがわかる。

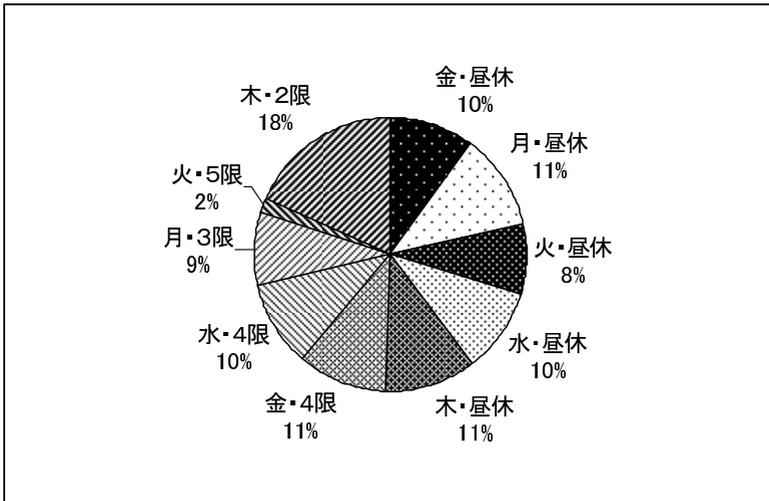
また、項目9の平均値が3.9で項目10の平均値が3.5と、中国語学習と検定試験受験に対する意欲の向上につながっていることもわかった。項目8「中国語の勉強に役立った。」の平均値が4.1で、全項目の最高値となっていることから、同CCラウンジでの取り組みは、本学の中国語学習の欠かせない要素になっていくことであろう。

なお、自由記述については、残念ながら5名からしか回答がなかった。そのうち1名は「発音と文法の基礎が学べて良かった。秋期も引き続き中国語頑張りたい。」という好意的な回答であったが、他の4名はみな「CCラウンジの人によって答えが違って、対策プリントの答えが分からなかった」など、対策プリント(中間試験および期末試験の2週間前に配布する、教科書の復習プリントのこと)に関

苦情であった。この件に関しては、今年度秋期以降は TA・SA たちに同プリントの模範解答を配布し、その通りに添削するように依頼することにより改善したい。

それから、この春期のCCラウンジでの学習支援で、最も苦勞したのが、TA・SA たちの在席時間帯の配置であったが、項目4「昼休み（週5回）の実施は適切だった。」の平均値が3.8と高かったのと、項目5「水4・金4限の実施は適切だった。（4月～5月）」の平均値3.6に対して項目6「水4・金4+月3・火5・木2限（6月～7月）」の平均値3.9にアップしていることから、学生たち（1年生）にとって適切な時間帯の配置であったことがわかった。このことは、以下の実際の彼らの利用状況からも明らかである。

【表8】 2017年度 春期 CCラウンジ学習支援 時間帯別 週間利用率（1年生）

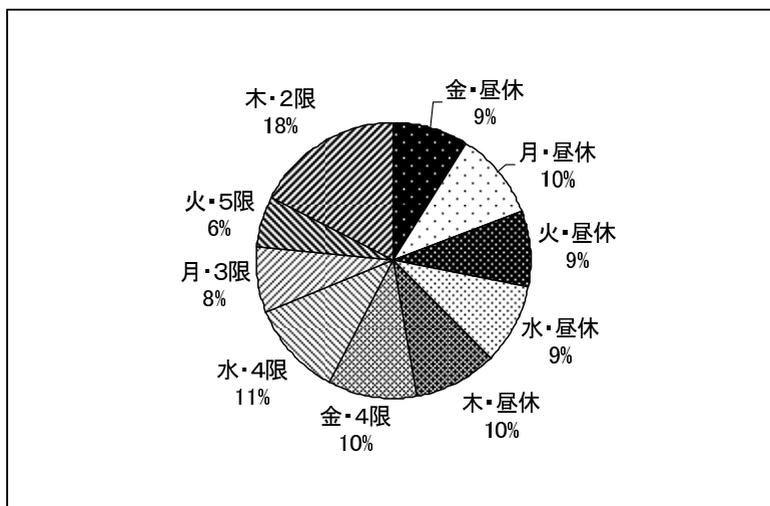


上記【表8】から、昼休みの5回の時間帯と、それ以外の5回の時間帯の割合が、ちょうど50%ずつであったことがわかる。これは、授業の履修状況の影響を受けにくい昼休みの5回に学習支援の利用が集中することを避けるため、事前に同1年

生たちの利用可能時間帯を調べ、他の5回の時間帯に配置した効果であるといえる。

また、その昼休み以外に配置した5回の時間帯に関しては、「火曜日の5限」の週間利用率が2%と、他の4回の時間帯に対して極端に小さく見えるが、これは、2年生以上の上級生たちの学習支援の利用（上級生の利用者は5名で、のべ利用回数は29回）も考慮したからであり、彼らの利用回数を1年生たちの利用回数に加えたデータである下記【表9】では、週間利用率は6%に上がってくる。

【表9】2017年度 春期 CCラウンジ学習支援 時間帯別 週間利用率（全学年）



上記【表9】のように、時間帯ごとの学習支援の利用者数がほぼ均等であるということは、CCラウンジでの待ち時間の軽減につながっており、結果としてTA・SAによる学習支援の効率化が促進されたと言えよう。【注3】

そこで、本年度秋期も、昼休みの5回の時間帯をベースに、1年生および上級生の中国語学習者たちの希望を事前に調査し、バランスの良く適切な時間帯にTA・SAたちを配置し、CCラウンジでの学習支援のさらなる充実を図っていきたい。

## 6 むすび：課題と展望

本学では今後、授業のカリキュラムと内容の充実化はもちろん、本稿で中心的に述べてきたCCラウンジなど、課外の中国語学習サポートについても、さらなる整備を進めていく予定である。

この「CCラウンジ」での学習支援は、昨年度秋学期に実施していた「中国語ルーム」での学習支援コーディネートの経験をもとに工夫を重ねた結果、本稿で報告したように、本年度は比較的順調なスタートであったと言える。

しかし、当面の課題として、1年次には設置されておらず、習慣化されていない現2から4年次の上級生たちに、CCラウンジの利用を浸透させていくには、さらなる工夫と働きかけが必要になってくると考えられる。

また、現1年生が来年度には2年生となり、新1年生たちと共同でCCラウンジを利用するようになった場合の、TA・SAによる中国語学習支援の利用頻度については未知数であり、人手や時間の不足が予想される。

それらの問題に関して、解決の糸口になりえるものと考え、筆者が現在「アカデミアゼミ」を通じてゼミ生たちと共同研究しているのが、「一般学生と留学生たちによる協働学習法」である。[注4]

本学におけるその有効性については、昨年2015年度まで本学にて長年中国語系科目を担当された寺西光輝氏（現・鹿児島大学）が既に数年前に指摘してくださっている。（寺西2013）

本学では、数年におよぶ本学教職員たちによる努力の結果、本稿でも報告してきたように、HSKなど検定試験合格に関する成果は徐々に上がりつつあるが、今後は、世界的な中国語教育の動きとなっている『わかる』中国語から『できる』中国語へ』『わかる』中国語は『できる』中国語の基礎であり、『できる』中国語は『わかる』中国語の発展である。『できる』力の育成を中国語の教育実践において如何に実現させるか。」（胡2009）という課題について、より一層積極的に取り組んでいきたい。

**【注】**

- [1] 2017年度に実施された中国語教育の改革として、奨学金と学習支援の他に、前年まで夏季と春季の長期休業期間に筆者が自主的に実施していた HSK 対策の「補習」が、【表2】にあるように、「HSK 対策中国語集中講座A」(夏休み)と「HSK 対策中国語集中講座B」(春休み)というかたちで、「正規の授業」になったことがあげられる。
- [2] CCラウンジの設置以前、昨年 2016 年度の秋期には、本学教員の馬燕氏と筆者とのコーディネートによって「中国語ルーム」が実施されていた。実際には、本学研究棟5階のスタディールームにて、中国語の学習支援を目的に、「面接試験により選抜した中国語圏留学生たちを SA (Student Assistant) に任命し、毎週 2 回中国語学習者向けに習熟度別の中国語指導を行う」というかたちであった。(愛知文教大学 2017 : pp 35)
- [3] 【表8】と【表9】のもとになっているCCラウンジでの学習支援の時間帯ごとの実施回数と、それを受講した学生たちの実数は以下の通りである。

	金 昼 休	月 昼 休	火 昼 休	水 昼 休	木 昼 休	金 4 限	水 4 限	月 3 限	火 5 限	木 2 限
各回実施回数	14	14	13	14	14	14	14	8	8	8
1年生受講者数	34	39	27	34	37	37	35	17	3	36
全学年受講者数	34	39	32	36	37	40	42	17	13	38
1年生平均受講数	2.4	2.8	2.1	2.4	2.6	2.6	2.5	2.1	0.4	4.5
全学年平均受講数	2.4	2.8	2.5	2.6	2.6	2.9	3.0	2.1	1.6	4.8
全学年最多受講数	5	9	6	7	8	8	8	7	2	11
全学年最少受講数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

- [4] アカデミアゼミについては、本学『学生便覧 2017』（pp.12）の中で、次のように説明されている。

「アカデミアゼミ」（3、4年次対象）は、研究したいテーマについての知識を身につけ、研究を進めていくためのゼミナールです。「アカデミアゼミ」では、学生は専任教員いずれかの研究室に所属しますが、希望者が多数の場合は選抜となる場合もあります。（中略）「アカデミアゼミ」では「卒業研究」および「卒業論文」の作成を行いません。卒業研究や卒業論文作成は、知識を得るだけでなく論理的思考や独創性などを養うものであり大学での学びの成果を形として残すことができます。

#### 【参考文献】

- [1] 愛知文教大学 2017 『平成 29 年度 大学機関別認証評価 自己点検評価書 [日本高等教育評価機構]』 愛知文教大学
- [2] 寺西光輝 2013 「中国人留学生と日本人学生による協働学習—中国語文献のピア・リーディングを通して」、『中国語教育』11（pp.84-85）
- [3] 胡玉華 2009 『中国語教育とコミュニケーション能力の育成—「わかる」中国語から「できる」中国語へ』（pp.51） 東方書店

## 国際理解への取り組み

### 一 愛知文教大学国際交流センターの活動一

勝股 行雄

#### 1 はじめに — 国際交流センター再出発

1990年代以降、経済環境、労働環境のグローバル化により、従前からの朝鮮半島、中国出身者に加え、南米、東南アジア、南アジアなど新たな国から数多くの外国人が日本に居住するようになった<sup>1)</sup>。それは日本人に多文化共生、国際理解を社会の重要課題として認識させることになった。またこうした外国人居住者増と時を同じくして、アジア諸国からの若者が日本を留学先を選ぶようになり、日本語習得と様々な知識技術の獲得を目指して勉学に励んでいる<sup>2)</sup>。愛知文教大学でも現在はベトナム、ネパールを中心とする留学生が在籍し、その数は年々増加傾向にある。

他方、日本人学生に対しては、こうしたグローバル化に対応できるグローバル人材育成の必要性は高まる一方であり、その方策として留学が以前にも増して重要視されるようになった。それに呼応する形でたとえば日本政府は「若者の海外留学促進実行計画<sup>3)</sup>」を策定するなど、日本人学生の留学推進に努めている。

このように教育においてもグローバル規模での交流が求められることとなった。この状況に高等教育機関として対応するため、愛知文教大学では2016年4月、以前からあった国際交流センターを発展的に改組する形で再スタートさせた。新組織ではセンター長のもと、英語、中国語、ドイツ語を専門とする教員を構成員とし、また英語と中国語を母語とする外国人教員もスタッフとして配置された。事務局内には学生向けカウンターを備えた本部を置き、専従の事務局員が庶務担当として常駐することになった。

主な業務として取り組んでいるのは次のような項目である。

- 1) 日本人留学生派遣
- 2) 海外語学研修の企画実施
- 3) 本学在籍留学生の研修旅行企画実施
- 4) 交換留学

これ以外にも留学生生活相談、留学生在籍確認、小牧市国際交流協会事業との協働等、様々な業務をこなしているが、本稿では上記4点について具体的な事例を挙げつつ報告する。

## 2 日本人留学

本学から英語圏への留学生を送り出す場合は、基本的に提携校留学をさせている。

本学では提携協約を結んでいる教育機関を以下の通りに持っている。

- ESL カナダ・トロント校

ELS Language Centers, Toronto (Toronto, Canada)

- ESL カナダ・バンクーバー校

ELS Language Centers, Vancouver (Vancouver, Canada)

- ブリッジインターナショナル

Bridge International College of English (Auckland, New Zealand)

- ディーキン大学附属英語学校

Deakin University English Language Institute (Melbourne, Australia)

いずれもいわゆる語学学校である。次の表はディーキン大学附属英語学校の本学学生が履修するコース名とそのレベルを示したものである。

IELTS Score <sup>4)</sup>	Course
4.0	General English : Pre-Intermediate 2
4.5	General English : Intermediate 1
5.0	General English : Intermediate 2
5.5	General English : Upper-Intermediate 1
6.0	General English : Upper-Intermediate 2
6.5	General English : Advanced

本学からの留学生はいずれの提携校でも一般英語 (General English) コースを選択し、順次力を伸ばして上級レベルへ進んで、最終的には Upper-Intermediate までは修了させるように指導している。さらに力のある者には正規学部進学コース EPA (English for Academic Purposes) まで進むことを推奨している。

留学指導のプロセスは希望者との面談から始める。留学への意欲、その目的、希望する国と期間について、本人の語るところをよく聞き、本センターは留学先の説明に加え、過去の事例を示しつつ適切なアドバイスを行うようにしている。上記教育機関への留学については本学は以前よりエージェント、Melbourne Education Centre (MEC) へ諸手続きを依頼している。本センターは本人との相談後、留学するにふさわしいと判断すれば MEC へ紹介し、その後の本人とエージェントとの連絡相談の仲介役を務める。また提携校留学は6カ月または1年の期間となるので学生ビザが必要となる。申請は代行業者に依頼することもできるが、自分で行う場合は本センターが申請手続きのサポートを行う。一例としてオーストラリアのケースをあげる。その流れは以下ようになる。

- ① オンライン申請 (eVisa) を行うためのアカウントを取得
- ② オーストラリア大使館の Website にアクセスして申請用紙に入力する

- ③ (MEC を通じて送られてくる) 入学許可書 **Confirmation of Enrolment (CoE)** を申請用紙に添付
- ④ オーストラリア留学生健康保険 **Overseas Student Health Cover (OSHC)** への加入済証明書を申請用紙に添付

オーストラリア留学については以前は指定医療機関での健康診断が必要であったが、現在は日本国籍を持つ者に対しては免除となった。ただし、1年間、日本を離れるに当たっては、念のために健康診断と歯の検診を受けておくことを強く勧めている。また渡航のための航空機便の手配についても本センターが旅行会社を紹介している。

所定の手続きが完了したところで、対象者にエージェントによる事前指導の時と場を設定する。留学についての心構えから始まり、留学全般の留意事項、過去のトラブル事例の紹介と注意喚起などがその指導項目である。出発直前には国際交流センターによる直前指導を行っている。ここでは、生活上の様々な注意事項を改めて確認し、また留学中は定期的に留学報告を本センターあてにするよう指導する。また留学中の海外での学修を本学で単位認定するための要件を具体的に示す。たとえば1年留学の上限である30単位認定するためには

- ・ **General English Course** の **Upper Intermediate** まで進むこと
  - ・ 学修時間が本学30単位相当の授業時間90分×15回×30を上回ること
  - ・ 留学終了後に速やかに時間割を添付した成績証明書を提出すること
- などの点を確実に理解させる。また、事故、病気など緊急事態が生じた時の行動についても連絡先と連絡の手順について指導を行う。同時に、後述する(株)アイラックの危機管理システム活用アプリケーションを各自のスマートフォンのインストールさせる。

### 3 海外語学研修

2015年度、試行としてフィリピン・セブ島での2週間の英語研修をセブ医科大学付設英語学校で実施した。いわゆる英語圏とはみなされない国での英語研修という思い切った試みであったが、母語でないにもかかわらず世界トップレベルの英語運用能力人口を持つ国フィリピンで学ぶことに大きな意義があると判断して実施したものである。この国での英語研修には以下のような点が特長として挙げられる。

- 日本から近く、費用全体のコストダウンができる場所での研修である。
- マンツーマン・スタイル中心の指導が受けられる。
- 当該学校は **English Only Zone** を設けるなどして英語を話さざるを得ない環境づくりに当たっている。
- 教師自身が第2言語として英語を学習した経験から外国語として英語を学ぶ学生に寄り添った指導が期待できる。
- これからのグローバルスタンダードになるであろうアジアの英語に積極的に触れることができる。
- フィリピンという異文化社会を経験する。

初年度は未だ国際交流センターの体制は整わぬ中、春期に説明会を開くなどして参加者を募り、4名の参加で11月に実施した。2週間の日程を終えて帰国した参加者からは、一対一での授業形式が濃密で効果的であったこと、授業の進め方も納得ゆくものであったこと、フィリピンの市井の人々の暮らしぶりも目の当たりにしたが、改めて日本との違いを認識させられ大きく視野が広がった、との好印象が聞かれたが、その一方で、校舎の古さ、食堂の貧弱さや、仲介エージェントの動きが不十分との指摘も受けた。結論として4名とも帰国後の英語学習への取組みが以前より意欲的になり、

英語でのコミュニケーションに積極的になったと答えている。英語力伸長と異文化との接触経験から学ぶという所期の目標は達成することができたと考えられる。

2016年度は前年の反省を踏まえながら、再度の実施に向けて、6月に全学生向け説明会、7月に第2回説明会を行って、参加を呼びかけた。11月、10名の参加を得て、以下のようなプログラムで実施した。

#### 実施期間・場所

- 期間 平成28年11月14日(月)～11月25日(金) (出発13日、帰着26日)
- 場所 フィリピンセブ島：セブ医科大学附設英語学校  
(住所：Dr. P.V. Larrazabal Ave., NRA, Subangdaku, Mandaue City, Cebu, Philippines – 6014 TEL: (+63) (032) 238-3754)
- 宿泊地 セブ医科大学附設英語学校学生寮

#### 実施スケジュール・時間割等

11月13日(日) 中部国際空港:15:20発(セブ直行便) ⇒19:05現地着、出迎え、学生寮入寮

11月14日(月) オリエンテーション

08:30 ～	ビザ申請書の作成と案内
09:00 ～	レベルテスト
13:00 ～	学校案内(規則・各教室)、セキュリティ(指紋認証)
16:00 ～	日本人スタッフの案内で近くのショッピングモールにて買い物、両替
16:50 ～	学校に戻り、滞在中の電気代、水道代支払い、時間割配布、テキストの購入

11月15日(火)～11月25日(金)《19日(土)20日(日)は休講》

07:00～08:00	朝食	13:00～13:50	5時限
08:00～08:50	1時限	14:00～14:50	6時限
09:00～09:50	2時限	15:00～15:50	7時限
10:00～10:50	3時限	16:00～16:50	8時限
11:00～11:50	4時限	17:00～18:00	夕食
12:00～13:00	昼食	18:00～	自由研修時間

11月26日(土) 退寮、セブ空港9:15発(直行便) ⇒中部国際空港14:20着

大きなトラブルもなく、順調に日程をこなして10名は帰国した。このうちとりわけ1年生参加者は、その後も語学習得への意欲をさらに高め、2017年9月現在で参加6名中、4名がオーストラリアと中国北京に1年間の長期留学中である。

#### 4 留学生研修旅行

本センターは国際交流、国際理解の推進をその目的として掲げており、本学在籍の留学生の日本への理解を深めることがその大きな使命あることは言うまでもない。留学生は本学では、国際日本文化コースという括りで在籍しており、カリキュラムの中には日本文化、日本社会についての留学生用科目が用意されており、留学生たちはそれを受講して日本文化社会について学んでいる。本センターの大切な役割は、教室内で彼らが身につけた日本に関する知識を、学外へ出て、肌で体験させる機会を提供することである。そこで、そのための企画として留学生研修旅行を実施することにした。その際の留意した点は以下のようなものである。

- 日本文化、日本社会へのより理解を促すため、単なる物見遊山的なものではなく、歴史、あるいは日本の科学技術に実際に触れることを主眼とする。
- 日本の伝統文化の体験をより確かなものにするため、実技を伴う体験学習を行程内に盛りこむ。
- 母国とは異なる日本の自然にも触れさせる。
- 企画は外部の旅行エージェントではなく、本センターで行う。
- 交通手段は人数が50を超えなければスクールバス、超す場合は外部バスをチャーターする。
- 日本人学生も参加できる余地があれば、参加させ、普通の大学構内

では経験できない学生同士の交流の機会とする。

2016年度から2017年度にかけては以下の企画を実施した。

①「English Day Camp」2016年8月8日

英語ネイティブスピーカー教師3名、英語教員2名、事務局員1名の引率で日本人学生7名と留学生8名の参加で初の本センター企画行事として犬山市のキャンプ場で行われた。現地に着くとまずは英語による自己紹介、続いて英語ゲーム、英語を用いたアクティビティで体を動かしたのコミュニケーションに励んだ。昼食はバーベキューを味わい、午後はキャンプ場周辺でハイキングを楽しんだ。猛暑の中ではあったが、様々な活動と英語を通して日本人と留学生との交流と相互理解が図られた。



昼食風景

②「歴史の町、犬山と犬山焼体験」2016年8月18日

留学生研修旅行の初回として、日本の歴史と伝統にじかに触れて体験する機会として計画した。ただし、ポスター等で周知する期間が短く、また夏季休業に入っていたこともあって参加者16名とこじんまりしたグループバス旅行となった。スクールバスを使用して、最初に日本最古の現存天守を持つ犬山城を訪れた。天守閣の最上階まで上がって、木曾川を見降ろす光景を楽しみ、館内の展示物を見学したあと、城下町の風情を残す町並みを散策した。市内のレストランでバイキング方式の昼食を取ったあと、午後のプログラム、犬山焼体験に向かった。

犬山焼は元禄年間に犬山藩藩主の庇護のもとに始まったとされる歴史ある技術で、当日は、工房でロクロを使い、窯元の指導のもと、各自



犬山焼体験

で焼き物の制作に取り組んだ。まず当主の模範実演でロクロ上での皿や茶碗の成型を目の前でつぶさに見た。粘土の塊が見なれた食器の形に変わってゆく様子に参加者からは感嘆の声が上がった。続いて留学生たちは粘土とロクロに戸惑いながらも、なんとか各自思い思いのデザインで皿やコップを完成させた。焼きや絵付けは窯元に任せ、2ヵ月後に完成品が手元に届いた。

### ③「新旧日本を巡る」2016年11月4日

日本の科学技術と古き伝統に触れることを狙った企画である。参加者は48名、スクールバスを使用した。まず名古屋市金城埠頭にあるリニア鉄道館を訪れ、日本の代表的先端技術とも言える新幹線、リニアモーターカーの展示を見学し、新幹線のシミュレーション運転の体験もした。昼食は館内レストランで取った。



有松絞製作体験

午後は東海道の宿場町有松に古くから伝わる有松絞の工程の一つ「括り」を体験した。針と糸を使うやや細かな作業で不慣れな男子学生もいたが、こうした作業に慣れた女子学生の助けを得て、完成

させた。そのあと、江戸期に遡る宿場町に保存された旧家を見学した。留学生の誰もが知っている鉄道路線名としての「東海道」のルーツを知らしめることもできた。

### ④「白銀の奥美濃と和紙作り」2017年2月2日

母国にはないものを日本で経験させるという本研修旅行の典型とも言えるのがこの雪山体験である。秋期終了直後の2月、56名の参加で、豪雪地帯として知られる岐阜県郡上市の高鷲スノーパークと和紙で有名な美濃市「和紙の里」へチャーターバスで向かった。まず、午前中

はスキー場で雪に触れる。ゴンドラに乗って標高 1500m 地点まで登って雪山の雄大な景観を味わった。熱帯亜熱帯のインドネシア、ベトナムの学生にとっては母国では見ることのできない雪にじかに触れるという貴重な体験であったし、急峻な氷雪の峰の連なるヒマラヤの国ネパ



雪山にて

ールの学生にとっても、緩やかに起伏する山々が豊かな雪で覆われているのは印象的な風景だったようである。

スキー場レストランでの昼食のあと、美濃市へ行き、伝統工芸としてユネスコ文化遺産にも指定された美濃和紙づくりを体験した。取り組んだのは制作工程の中の紙すきで、係員の指導のもと、もみじの葉をあしらったデザインの和紙を全員 1 枚ずつ作成した。それを終えたあと、古くから商人の町として栄えた美濃市の町並を見学した。総走行距離が 300 キロ近くと、日程的にきついものはあったが、参加者の満足のゆく行事になった。

⑤「地引網とバーベキュー」2017 年 8 月 9 日、18 日

2017 年度第 1 回は、海辺を目的地にして意味ある活動ができないかを念頭に企画を検討した。そこで活動の中心に置いたのは地引網である。海に囲まれた日本において魚介類は欠くことのできない食材であり、漁業は日本の食を支えている歴史ある産業であることは留学生たちも知識としては知っている。そうした日本の漁業の一端を知るために、日本各地で古くから行われている地引網を、愛知県の漁業の中心でもある知多半島にて経験させることにした。昼食は自分たちが捕獲した魚を用いて海辺でのバーベキューとした。一緒に火を起し、調理して、新鮮

な魚を食する中で、学生同士の親睦を深めるという狙いもあった。当日



海鮮バーベキュー

なので、2つの日程に分け、チャーターバスを利用した。

は天候にも恵まれ、食後は参加者皆でゲームを行うなどして楽しい時を過ごした。1年生留学生はまだ国別のグループで固まる傾向があったが、この旅行を通じて国を越えての相互理解と交流が深まったのではないかと感じる。なお参加者は108名に達した。

## 5 交換留学

本学の交換留学プログラムは、北京外国語大学と2004年、北京連合大学と2006年に交換留学協約を結んだところから始まり、以来、毎年交換留学を行っているが、その詳細については別の機会に委ね、本稿ではタイ交換留学について述べる。

本学は、2016年6月、タイの **Suan Dusit** 大学ホアヒン校と交換留学協約を結んだ。本学としては、エアラインビジネスを始めとする観光 (**tourism・hospitality**) 分野に強みを持つこの大学で、本学学生に英語を媒体とした観光分野の知識やスキルを身につけさせること、航空会社やホテルでのインターンシップを経験させたい、という狙いがあった。タイ側としては、アジアの最先進国日本でその社会や文化について学ぶということに意義を見出したものである。この協約に基づき、タイへの派遣とタイ学生受け入れを2017年に行う運びとなった。

### 1) 本学からの学生派遣

本学からの派遣については、ポスターによる告知、2016年12月にタイ

留学説明会を実施した結果、1名の参加希望者が出た。渡航準備は1月末から開始、まず学生ビザ取得のための手続きに取りかかった。タイ大使館への留学ビザ申請書とともに以下の書類を作成、用意した。

- ・パスポートコピー
- ・タイ **Suan Dusit** 大学の入学許可書(英語版)
- ・本学からの本人推薦状(英語版)
- ・経歴書 (**Personal History**)
- ・戸籍謄本
- ・保護者による身元保証書(英語版)

また留学ビザ発給のためにはタイ大使館での面接が課せられるので、その予約も必要であった。これら申請手続きはオンラインで行うので、国際交流センター前にあるパソコンを用い、センター担当者監督のもとで本人が書類入力し、送信して申請を行った。記入した書類はプリントアウトしたものを本センターで保管した。ビザ発給の審査は順調に行われ、4月初旬には渡航準備が完了、4月18日にタイへと渡った。

## 2) タイ学生受け入れ

一方、受け入れの実務は2017年2月初めに開始した。タイ学生の学生ビザ申請のためには、まず日本側での在留資格認定 (**Certificate of Eligibility**) が先行して必要である。名古屋入国管理局による在留資格認定がなされて証明書交付を受けたあと、それを在タイ日本大使館に提出することでビザが発給される。そこで本センターが諸書類の書式を用意してタイに送り、記入のうえ、こちらへ送ってもらう必要があった。まず入国管理局に申請するための英語版在留資格認定申請書 (**Application for Certificate of Eligibility**) を入手するところから始めた。申請書に添付せぬ

ばならないのは以下の書類であるが、これまでの中国交換留学では日本語版を使用してきたため、まず英語版作成が急務であった。

- 交換留学出願書 (Application Form for International Exchange program)
- 経歴書 (Personal History)
- 経費支弁書 (Certificate of Financial Support)
- 誓約書 (Oath)

これをタイへ送って記入のうえ返信してもらい、さらに不備な点をこちらでチェックして送り返し、再記入というプロセスとなった。また交換留学であるため当該学生について以下の書類もタイ側に作成送付を依頼した。

- 在籍証明書 (Certificate of Enrollment)
- 成績証明書 (Academic Transcripts)
- パスポートコピー

このタイ側とのやり取りには予想外に時間がかかり、全ての書類が整ったのは3月に入ってからであった。全書類に加えて以下のものも添付して名古屋入国管理局に書類提出をし、在留資格認定を申請した。

- 本学入学許可書 (Letter of Acceptance)
- Suan Dusit 大学との交換留学協定書の写し

資格審査には約2週間の日数がかかり、本学が在留資格認定書を手にしたのは4月に入ってからとなってしまった。ただちに認定書をタイへ郵送し、それに基づいて Suan Dusit 側でバンコクの日本大使館で学生ビザ申請を行ってもらった。結局、本学の新年度開始には遅れて5月1日、3名のタイ女子学生が到着した。彼女たちの住居は春日井市高蔵寺の女子寮とされ、到着当日、寝具等を購入してよいよ留学生活が始まった。来日後の生活のための必要諸手続きには次のようなものがある。翌日午後を使って春日井市役所でセンター事務担当者の監督のもとに行った。

- ・在留カード交付申請
- ・住民異動届記入提出
- ・国民健康保険加入

さてタイ留学生の受講プログラムは彼女らの本学到着を待ってから決定することになっていた。本人たちの日本語能力を見極める必要があったためである。ただちに判明したのは基本的な挨拶以上の日本語力は持っていないということであった。Suan Dusit 大では現在、日本語授業は開講されていないため、やむを得ぬところではあった。本学在籍の一般留学生は一定以上の日本語力を備えて入学し、留学生用授業であっても英語科目以外はすべて日本語で行われるため、彼女らに多くの授業は理解困難であった。そこで国際交流センターとしては以下の履修方針を策定した。

- 1) 英語科目を1日1～2科目、選択する。
- 2) 日本文化に関わる実技系科目を取らせる。
- 3) 体育実技を時間割に入れる。
- 4) 日本語基礎と日本文化への導入科目をタイ交換留学プログラム科目として正規科目外に設定する。

また留学中の生活面では以下のような形で指導することとなった

- ・日本での生活に慣れるまで世話役 (*guardian, chaperone*) を同じ寮に住む3年生女子学生に務めてもらう。
- ・毎朝、国際交流センターで出席確認をする。
- ・対処に戸惑う事態に遭遇したら、ただちに国際交流センターに連絡相談する。

続いて、履修方針にしたがって週時間割の確定を行った。英語科目はネイティブスピーカー教師の授業を選択させた。その中には、日本人学生との授業内交流のできるものを用いることで1年日本人学生必修の

Conversation を入れた。日本文化に関わる実技系科目としては、書道と日本文化演習の茶道と香道の授業に参加させた。ただし、茶道、香道については、実技授業に出させる前に、若干の導入が必要との配慮で、4回、日本文化序説という英語による特設授業を行い、その後和室での授業に参加させた。体育実技は日本武道である合気道が開講されているので、これを選択させた。また結果として金曜日がblankとなったため、6月から稲沢市に位置する本学の姉妹校である短大の授業も入れることになった。

以下が春期、秋期の時間割である。

	1限 (9:20~)	2限 (11:00~)	3限 (13:10~)	4限(14:30~)
月		Conversation		Writing
火		書道	体育：合気道	
水			Oral Communication	Reading
木		日本語基礎	Introduction to Japanese Culture /日本伝統文化演習	
金	短大にてピアノ実習、歌唱練習、調理実習、保育実習を受講			

	1限 (9:20~)	2限 (11:00~)	3限 (13:10~)	4限(14:30~)
月		Conversation	Reading	Media English
火		書道	体育：合気道	
水	Listening for TOEIC	茶道	Oral Communication	
木	日本語基礎	日本語基礎		
金	初歩中国語			

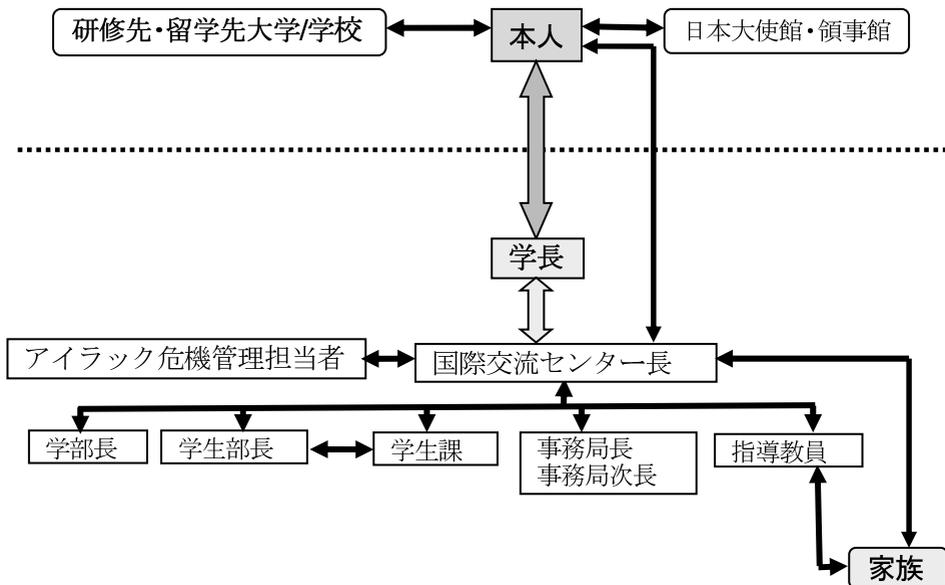
3名の留学生には授業以外にも、花火見物、日本のお祭りを体験する機会を設けた。また7月から8月に計6回実施されたオープンキャンパスではアシスタントを務め、英語公開授業の助手、見学者の案内などの業務を任せた。11月には大学祭、短大大学祭、高大連携をしている愛知県立高校でタイ舞踊を披露した。

新たな提携校からの交換留学生の受け入れは本センターにとっては初めてのことで、試行錯誤の連続であった。幸い、順調に事は運んだ。2018年1月末までの留學生活の中で日本についての理解をさらに深めてほしいと期待するところである

## 6 留學にかかる危機管理体制の構築

昨今、世界各地で発生するテロ事件や災害、事故犯罪等に、日本人が巻きこまれる事例が時として報道される。当然、本学学生の留學先となる国でも日本ではありえないような危険が潜んでいる可能性がある。それゆえ、安心安全な留學を保証するための体制づくりは留學を推進してゆくうえで欠かせないところである。そこで、留學中の本学学生が事件、トラブル、あるいは病気、怪我に見まわれた際に、誰が連絡を取り、どのように指示し、その状況、情報を学内でどう共有するかを明らかにするため、本センターは非常時の対応組織図づくりを行った。なお、本学では危機管理のエキスパートとして知られ、世界各地にサポートデスクを持っている㈱日本アイラックと危機管理契約を結び、海外現地でのトラブル発生時の対処支援が受けられるようにもしている。

次にあげるのが非常時の連絡指揮系統図である。



## 7 むすび

国際交流センターの新規業務開始から1年数カ月が過ぎた。その間、国際交流、国際理解を目標に掲げてきたが、そもそもこの言葉は、頻繁に語られながらも具体的にはどのようなものを意味するのかは、場面、文脈により実に多様である。本センターとしては本学の置かれた状況をよく見極めながら、海外留学業務と本学在籍留学生の研修企画運営という点にこの言葉を反映させて活動してきた。

2015年、初めてのアジア英語研修の募集を開始し、ポスター掲示、チラシ配布、説明会開催をする中で筆者が感じたのは、留学、あるいは異文化に入ってゆくことについて、認識、態度、意欲などの点で学生間にきわめて大きな差があることであった。目を輝かせてぜひ参加したいと言ってくる

る者がいる一方で、声がけをしても、海外など絶対に行きたくはないと言いつ放つ者も少なからずいた。外国社会や異文化を未知なる知識経験の宝庫として肯定的にとらえるか、あるいは忌避すべきものとして否定的にとらえるか、という違いであろう。留学や異文化交流に消極的な学生を目の当たりにすると、以前から指摘されてきたこと<sup>5)</sup>ではあるが、日本人の若者の中には自分の「居心地のいい場所、コンフォート・ゾーン (Comfort Zone)」に安住してしまう傾向が少なからずあるということを実感せざるをえない。

しかし、総人口がいよいよ減少に転じた日本では、今後、外国語と異文化を携えて日本にやって来る人々の数がますます増加してくることは誰の目にも明らかである。つまり異文化は早晩身近な所までやって来る、その時、右往左往するより、今、自分から日本を出て、異文化に飛びこんでゆく気概を学生たちに持たせたい、と留学関連業務に関わる者として切に望むところである。

一方、留学生研修を実施する中で、彼らの中に、日本への関心を示さぬ者がいることも痛感させられるところである。そもそも、留学生全員が日本文化や日本社会に興味を持って日本にやって来ていると考えるのはいささか皮相にすぎるだろう。おそらく経済的、社会的理由が重層的に絡み合った結果として日本を留学地として選んだ者も少なからずいるはずである<sup>6)</sup>。

たとえもしそうであっても、日本文化に親しませ、日本社会についての好意的な知識経験を身につけさせることは、日本を留学先として選んだ彼らにとっても、我々大学側にとっても、そしてさらには日本にとっても、意味あることだろう。その機会と場を出来る限り与えることは、留学生を受け入れている教育機関としての責務であると言える。

日本人学生にとっても留学生にとっても、異文化理解、国際理解は、たやすいものではないが取り組む価値がある。そう信じて、本センターは、

企画した諸活動に地道に取り組み、学生たちに働きかけ、訴えかけてゆこうと考えるものである。

<注>

1) 総務省統計局「外国人人口の推移」による。

<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2005/gaikoku/00/01.htm>

2) 2008 年策定の「留学生 30 万人計画」は次のように述べ、日本国政府が留学生数拡大を強く推し進めている。「日本を世界により開かれた国とし、アジア、世界との間のヒト、モノ、カネ、情報の流れを拡大するグローバル戦略を展開する一環として、2020 年を目途に留学生受入れ 30 万人を目指す (p. 1)」。

3) この一環として、たとえば文部科学省は 2013(平成 25)年 10 月より「留学促進キャンペーン『トビタテ! 留学 JAPAN』」を開始して、高校生、大学生の留学を強く推進している。

4) TOEFL と並んで非英語圏の学生が英語圏大学入学の際に課せられる英語能力試験で、ケンブリッジ大学英語検定機構、ブリティッシュ・カウンシルなどが運営している。

5) 太田(2014)は日本人の留学者数の減少の理由を考察しているが、その一つとして日本人の若者の「内向き志向」をあげている(p. 14)。

6) これに関しては岩切(2015)が留学生へのインタビューをもとに詳述している。

<参考文献>

岩切朋彦「日本語学校におけるネパール人学生の様相とその諸問題」、『西  
南学院大学大学院国際文化研究論集』, pp. 79-112, 2015 年

<http://repository.seinan-gu.ac.jp/bitstream/123456789/1093/1/glis-n9-p79-112-iwa.pdf>

太田 浩「日本人学生の内向き志向に関する一考察」, 『留学交流』Vol.40,  
日本学生支援機構, 2014年

内閣官房『留学生30万人計画骨子』, 2008年

<http://www.kantei.go.jp/jp/tyoukanpress/rireki/2008/07/29kossi.pdf>

## 康有为教育思想在现代教育中的传承

The inheritance of Kang Youwei's educational thoughts in modern education

马燕 王昕

### 内容摘要

在近代中国教育史上,康有为的教育思想占有重要的地位,它既是中国传统教育的继承与发展,也是康氏向西方学习真理的重要组成部分。他创造性地提出了德、智、体全面发展的近代教育学纲,远学德国,近采日本,开启了西方资本主义教育制度进入中国的闸门。他亲执教鞭,编写教材,创办新式学堂,披荆斩棘,开拓创新,为创立中国近代教育思想体系,建立了不世之功。康有为的教育思想是他维新变法改造中国的主要杠杆,又是他“教育救国”思想的展现与实践,是中国现代教育传承不可或缺的重要环节。

**关键词** 教育思想 现代教育 传承 教育救国

### 一. 教育世家: 从长兴学到万木草堂

康有为的教育思想渊源流长、根深叶茂。南海康氏是以教育事业起家而终身执斯业。康有为的祖父康赞修,曾任广东钦州学正、连州训导,笃守程朱之学,是岭南的传统教育世家,被世人尊为“连州公”。从启蒙开始,少年康有为就经常在祖父身边读书诵经,得到他的精心指点,接受着严格的封建传统教育训练。以“三纲五常”为核心内容的封建伦理道德,在年幼的康有为心中打下了深深的根基。

康有为出生在一个以“读书做官”论为指导的封建大家族,他博闻强记,过目成诵,自诩“十一龄能文,十二览传记”,被时人视为神童。可是,自古神童多寂寞。他虽然熟读儒家经典《大学》、《中庸》、《论语》及朱注《孝经》,但康有为从小生性讨厌八股制艺,喜欢博览群书,好撰写那些意气纵横起伏跌宕的诗文,尤其酷爱阅读经说、史乘、考据之书。所以,从十四岁开始,在家长们的督责下参加童子试<sup>[1]</sup>,由于文不对题,不善于作陈腐老套的八股文体,这位“神童”也每每名落孙山。

在科举道路上屡受挫折的康有为,逐渐省悟到,在一个文盲充斥的国度里要想“救

亡图存”，首要的任务是培养有文化有觉悟的人才，他认为“以国民之愚，而人才之乏也。非别制造新国之才，不足以救国，乃决归讲学于粤城。”<sup>[2]</sup>他把从事教育工作作为进行政治维新活动、振兴中华的重要手段。他坚定地认为：“欲任天下之事，开中国之新世界，莫亟于教育。”<sup>[3]</sup>这是康有为决心自己办学以培养变法人才的思想出发点。

1890年（清光绪十六年）春，康有为举家迁往广州。在他的学生陈千秋、梁启超的协助下，租赁长兴里邱氏书屋（今广州市中山四路长兴里3号）正式开办学堂，唤名长兴学舍。广东俊彦韩文举、梁朝杰、曹泰、王觉任、麦孟华、陈和泽、林奎等青年学子先后联袂入学，成了康有为的第一批学生。

长兴里是广州的一条小小的横街。光滑的长条石板铺路，沿街房屋错落有致，邱氏书屋就深藏在巷内。这里原系广东邱姓家族读书人到广州考科举时居住和读书的地方，始建于清代中叶嘉庆年间。这是一座前后三进的大院落。周围有高高的围墙，屋宇宏阔，气象庄严，迎面大门楼上，镶嵌着一块青石板，上刻“邱氏书屋”四个大字。走上台阶便是正堂，堂内四根红色圆柱，直冲屋顶，大厅宽敞而明亮，正是康有为抖擞精神授课的理想课堂。这一年康有为刚满34岁，精力充沛，信心十足。他中等身材，体格健壮，面色浅黑，前额宽阔，上唇留着整齐的黑胡子，眉宇间透着一股阳刚之气，走起路来很有赳赳武夫、堂堂师表的气概。他每天黎明即起，身穿一件绸布长衫，从住处云衢书屋步行至长兴学舍，聚精会神，“与诸子日夕讲业，大发求仁之义，而讲中外之故，救中国之法。”<sup>[4]</sup>他每天讲学时，则高坐堂上，不设书本，不写教案，而凭惊人的记忆力，援古证今，诵引传说，原始要终，会通中外，一讲就是半天。他强记雄辩，滔滔万言，如大海扬波，如黄河奔流，诚可谓诲人不倦的一代宗师。

由于来康有为处求学的人数不断增多，他的教学点也一再迁移堂址。到1893年（清光绪十九年）再迁至广府学宫仰高祠（今广州市工人文化宫），来学者达100余人，由陈千秋、梁启超充任学长，还特地装上一方匾额，题上“万木草堂”四个大字。1897年（清光绪二十三年）夏，万木草堂达到全盛时期，康有为欣然说：“时学者大集，乃昼夜会讲。”<sup>[5]</sup>康有为在这里筚路蓝缕培养出了第一批有别于士大夫的变法维新人才。它向世人宣告：中国资产阶级萌芽状态的新型学校在广州破土而出了。

从1891年开办长兴学舍，到1898年戊戌变法时，万木草堂被清政府下令封禁辍

讲止，康有为在广州办学前后8年。在这漫长的8年中，康有为曾多次离开广州，或是入京应试，或是外出游览讲学，但他对万木草堂学生们的授业并未因此而终止，学生们更没有因此而旷课，仍按其所订章程正常进行。康有为每次外出前都会给学生留下作业，并指定阅读书籍，回来后进行检查、个别谈话指导。学生们也在此期间，或聚而会讲，或各就心得演述，相互探讨，夙夜进修不懈。他的这种培养学生互相学习和独立思考能力、激发学生在学习热情的教学方式与我们今天提倡的培养学生“主动学习”的教学方式是何等的相似。万木草堂的学生张伯桢回忆说：“先生四方讲学，出游之日多，在草堂之日少，析疑答问，时以书札往来。”<sup>[6]</sup>康有为一旦外出归来，则又听夕讲述，放言高论，听者无不动容。

康有为在他创办的学堂里，既是总监督（校长），又是总教授（教员）。他的教学内容是新鲜的，教学态度是诚恳的，教学方法是理论联系实际的。他每次升座讲学时，必先使人敲鼓三通，四邻学生闻声毕至，往往逾一二百人，座无虚席，人满为患，康有为见状大乐，论事益发纵横，谈笑风生，旁若无人。梁启超回忆说：“其授业也，循循善诱，至诚恳恳，孔子所谓诲人不倦者焉。其讲演也，如大海潮，如狮子吼，善能振荡学者之脑气，使之悚息感动，终历不能忘，又常反复说明，使听者涣然冰释，怡然理顺，心悦而诚服。”<sup>[7]</sup>另一位学生张伯桢深情地写道：“先生博综群籍，贯穿百氏，通中西之邮，参新旧之长。余从学之余，辄为笔录，积久成帙，时而温习，回念师门，犹不胜时雨晞阳之感。”<sup>[8]</sup>康有为学术上的高见卓识和诲人不倦的教育精神，给学生们留下了难忘的印象。

万木草堂的教育革新事业在国内影响日益扩大，同时也受到一些外国志士的支持和帮助。日本兵库县美方郡的田野福次，早年就读于东京专门学校，因赞成康有为的主张，也受聘为万木草堂的教习，并师从康有为问学。戊戌政变之际，他护送万木草堂的数十名学生逃亡香港，又援助康有为流亡日本，这是不可忘记的历史事实。

康有为一生有三次大讲学时期，第一次在广州万木草堂，第二次在桂林广仁学堂，第三次在上海天游学院。1923年（民国十二年），他在济南和青岛成立孔教会时，曾与当地士绅商议筹办曲阜大学，由于受到山东军阀的排挤而未成功。康有为开办曲阜大学的构想虽未实现，但却为在上海开办天游学院打下了思想基础。1926年（民国十五年），康有为在上海愚园路194号开办了一所万木草堂式的小型学堂一天游学院。

康有为自任院长兼主讲，以龙泽厚为教务长并教经学，况周颐教词曲，阮鉴光教日文，罗安教英语，另聘学有专长的教授数人任教，专收已有相当学问的青年入学，它采用演讲加讨论的教学方式，以期收到教学相长的效果。从现存一份铅印的《天游学院简章》<sup>[9]</sup>可以窥见康有为办学的旨趣和内容。其标榜的宗旨是，“本院为学术最高深之研究院，以研究天地人物之理，为天下国家身心之用为宗旨”。从课程设置上看，它包括了中国传统的经学、儒学和史学，又开设英文、法文、德文、日文，有一定的汇通中西教育的尝试。在考生中，康有为特意识拔台湾反抗日本统治的爱国志士林奄方和陈鼓微，康有为不仅给他们寄去了旅费，帮助他们从台湾偷渡出来，而且让他们住在自己家中，用假姓名注册。康有为慨然免收这两位台湾学生的学费，同时供应他们的生活费用，表现出爱国一家的博大胸怀。天游学院的学生虽然屈指可数，康有为逝世即行停办，办学时间不过一年，但是这些学生后来还是在各方面为祖国作出了应有的贡献。

## 二. 考察教育：“远法德国，近采日本，以定学制”

在中国近代史上，冯桂芬、王韬、郑观应等人都提出过变科举、兴学校、学西学的教育主张，康有为的贡献在于第一次系统地把西方行之有效的大学、中学、小学的学制介绍给中国，并主张中国必须立即推行这一新型的教育制度。他在戊戌年间的许多文章和奏折中充满了引进西方教育制度的箴言说论，使康氏的教育思想具有鲜明的开放性格，进而为近代中国确立资本主义教育制度奠定了理论基础。

康有为在考察了西方的教育制度后，认识到教育制度是培养人才的关键，试看欧美和日本迅速崛起，皆因重视教育智慧其民而创立适合本国实际的教育制度。他亲眼看到人家的儿童自六、七岁皆入学，有不入学者责其父母，故乡村小学遍地开花，各国读书识字的比例达到百分之七十，其学校经费美国达到八千万，英国的大学生达到万余人。尤其是后起的德国和日本，都是以重视教育普及知识为驱动力，他们有一套完整的优秀教育制度值得中国学习。康有为明确地提出：“今各国之学，莫精于德，国民之义，亦倡于德，日本同文比邻，亦可采择。请远法德国，近采日本，以定学制。”

[9]

康有为以极大的决心建议把德国普及教育机制引入中国，步武欧美全力发展教育

事业。他认为欧洲早在我国明朝时期就捷足先登近代教育殿堂，开启普及全民教育的智慧之门，废止贵族受教育的特权及其文化垄断工具，并详细介绍德国近百年发展教育及其学制结构说：“近百年间，文学大兴，普之先王大非特力，馆法名士窝多于其生苏诗宫而师之，聘柏罗斯其于瑞士，而创国民学，令乡皆立小学，限举国之民，自七岁以上必入之，教以文史、算数、舆地、地理、歌乐，八年而卒業，其不入学者，罚其父母。县立中学，十四岁而入，增教者科尤深者兼各国文，务为应用之学。其初等科二年，高等科二年。初等二年者，中学必应卒業者也。自是而入专门学者听之。专门者，凡农商矿林机器工程驾驶，凡人间一事一艺者，皆有学，皆为专门也。凡中学专门学卒業者，皆可入大学，其教凡经学、哲学、律学、医学四科。自是各国，以普之国民学为师，皆效法焉。”<sup>[11]</sup>

由此可见，康有为已清醒地认识到，普及教育对一个国家不论在物质技术上还是文化精神的修养上，以及在此基础上的强大军事力量的形成上，都是至关重要的决定因素。

当然，在借鉴日本教育方面，康有为考虑得更加细致周详。他认为日本重视普及小学，为全民教育打下了深厚的基础。他说：“日本汲汲于限民六岁入学，男女并教无一人之遗，至今三十年，人才蒸蒸，著述如林。农工商兵皆已有学，故耕植、制造、转运之业，日益精新，骤强之故由此哉！”<sup>[12]</sup>

康有为在《日本变政考》一书中，提出向日本教育学习的五个方面，都是采自明治维新的教育内容，他说：“日本之骤强，由兴学之极盛。其道有学制，有书器，有译书，有游学，有学会，五者皆以智其民者也。五者缺一不可。”<sup>[13]</sup>日本明治维新以后追求欧美的教育模式，在很短的时间内取得了智民强国的效果，康有为则力主学习日本教育模式，改变中国愚昧落后的局面，他以羡慕的口吻说：“泰西之强，由于人才，人才出于学校，日人变法，注意于是。大聘外国专门教习至数十人，小学有五万余所，其余各学，皆兼教五洲之事。又大派游学之士，归而用之，数年之间，成效如此。”<sup>[14]</sup>可见康有为在借鉴日本教育成功经验时，已把中国传统优秀文化与西方先进文化结合起来，把书本知识与科学实验结合起来，把学校教育与社会教育结合起来，使他的教育思想充满开放的、实测的、普及的特色，为提高中华民族全民素质设计了一条充满智慧的教育道路。他说：“以区区三岛地，当吾国十一，而大学堂七区，盖

不以京城限也。若以吾国而论，则大学堂应有七十区矣。纵无七十区，而上海、广东等天下辐辏之所，亦应立为大学堂，以教学者。其小学教科书至精详矣，其官学公学所费至千万，乃至官给补助，小学者亦五十余万，而幼稚园、蒙学、盲哑学尚不在内，其学费过我多矣。”<sup>[65]</sup>

康有为明确指出，日本教育成效显著，是因为举国重视。他尤其赞赏日本女子教育的成功与发达，他说：“日本变法，亦重女学，女生徒至二百余万。女教习至千余员，女学校至千余所，其教法与西国略同。盖恐其民之多愚而寡智，故广为教育，使男女皆有所用。”<sup>[66]</sup> 康有为是一个人道主义者，他一向同情中国乃至世界妇女不幸的遭遇，认为女子的智慧不亚于男子，她们对人类的贡献甚至超过了男子，男子以强力把妇女压在社会最底层，剥夺了她们受教育的权利是不公平的。他不仅教自己的女儿读书，而且让她们学习外国文字。他在戊戌年间大声疾呼提倡女学，为中国二万万妇女争取受教育的权利，是近代中国提倡女子教育的先驱。在康有为主张男女平等的思想影响下，中国出现了不裹足会、天足会、女学会、不缠足会，并在上海创办了务本女学和经正女学等女子学校。康有为不仅是近代中国引进西方教育制度的理论家，而且也走在推行西方教育制度实践的前沿。

### 三、教育创新：提出德、智、体全面发展的新学纲

在明确了教育目的之后，为了使教育内容规范化，使学生的学习有所归依，康有为根据自己所掌握的中外教育史资料，糅和中外古今教育的优点，于1891年（清光绪十七年）亲自主定了《长兴学记》作为学规，分为“学纲”、“学科”“科外学科”三个方面，在指导学生在学习过程中，起到了纲举目张的作用。“学纲”又以“志于道，据于德，依于仁，游于艺，四言为纲。”<sup>[67]</sup> 四纲之下设若干学科，分别归属于“德育”、“智育”和“体育”。康有为把中国传统教育思想归纳为德、智、体三个方面，而以德育为先的方针，是康有为的发明创造，从而在中国教育史上第一次明确提出了学生要在德、智、体三个方面全面发展的教育思想，并且身体力行，把这种进步的教育思想付诸实践。我们今天推行的现代教育科学体系，不可否认也传承着近代教育先行者康有为等人的教育智慧因素。

在德育方面，康有为在《长兴学记》中对学生提出了进行格物、厉节、慎独、养

心、习礼、检摄威仪、敦行孝悌、崇尚任恤、同体肌溺等传统的思想道德修养。康有为提倡的这些嘉言懿行，既有剥削阶级的行为规范，也有中华民族的优良品德。

在智育方面，康有为在《长兴学记》中对学生提出了进行义理、经世、考据、词章以及礼、乐、书、图、枪的知识灌溉。所谓义理之学，即讲人立之义，天命之理，课程的主要内容包括儒家哲学和佛教哲学，以及周秦、宋明各朝的哲学流派，旁及西方哲学思想。所谓经世之学，即研究历代损益得失，务求通变宜民，课程的主要内容包括政治原理学、中国政治沿革得失、政治实际应用和群学（社会学）。应该指出，英国学者赫伯特·斯宾塞是西方最出色的资产阶级社会学家，《社会学》这门学问在20世纪初传入中国，还是一门比较新的学问。康有为把它看作重要的学问，列入教学和研究的科目，与政治学原理并重，适应了当时社会改革的需要，因此学术界认为：“康有为是传入《社会学》学科最早的中国人。”<sup>[10]</sup>所谓考据之学，即经学、史学、掌故之学，课程的主要内容包括中国经典和中国历史、世界历史、地理、数学、物理。所谓词章之学，即骈、駢、铭、赞、诗的学问，课程的主要内容包括中国和外国语言文字学。康有为特地提出出枪，即练习枪法，有寓武备于文事的意思，并且主张择春秋季节的好天气，找一块适合打靶的地方，进行实弹射击，这在当时是惊人之举。

在体育方面，康有为在《长兴学记》中还提出对学生进行音乐、舞蹈、体操和军事体操的训练，开展游历活动。他还特意写了《文成舞辞》，让学生伴随着鼓乐的节奏，边歌边舞。这一切都成了他锻炼学生的体质，激发学生的热情，以便去迎接救国救民的伟大战斗任务。

最后，康有为还在《长兴学记》里向学生们提出了学者四耻，作为行为的戒条。一是“耻无志”，认为胸无大志，人生无明确的志向，是可耻的；二是“耻徇俗”，指出徇于世俗风气，不能卓立，是可耻的；三是“耻鄙吝”，认为凡鄙吝者天性必刻薄，为富不仁，是可耻的；四是“耻懦弱”，认为懦弱是庸人行径，见义不为，是可耻的。

在中国近代教育尚未兴起之前，康有为在这个学规里毕竟提出了前人所未提出的新东西。梁启超评论说：“其教旨专在激励气节，发扬精神，广求智慧。中国数千年无学校，至长兴学舍，虽其组织之完备，万不达泰西之一，而其精神，则未多让之。其见于形式上者，如音乐至兵式体操诸科，亦皆属创举。”<sup>[11]</sup>可以说长兴学舍是继往开来、承上启下的一个教育创举，它既有中华传统书院的内容，更有传播西方先进文

化教育的新质。

康有为重视德育的教育思想已超越了旧式读书人修身养性独善其身的道德规范，而是以关心国家民族兴亡，立志救国救民兼济天下为道德修养的主要价值取向。所以他在教育学生读书做学问时要志趣高远，以救国救民为己任，其在广仁学堂的教学内容较之万木草堂西学比例大增，意在把学生的目光引向世界，他形象生动地说：“中国古今既通，则外国亦宜通知，譬人之有家，必有邻舍，问其家世，谱系田园，固宜熟悉，邻舍某某乃全不知，可乎？况乎相迫而来，我之所为，彼皆知之；彼之所为，我独不闻，尤非立国练才之道。”<sup>[2]</sup>可见，康有为在发扬中国文化的民族特色的同时，又主张会通中西，力求引进西方先进文化与教育为我所用，为学生们指出了“学以致用”的有效方法。广仁学堂的学生廖中翼回忆说：康氏“讲及时事时，则指陈中国积弱之由，西国兴盛之故，非变法维新，不足以图存，议论精湛，识解鸿博，是以听讲者，多动魄惊心，印入脑际。”<sup>[2]</sup>应该公平的说，康有为的教育思想和教育实践在中国近代教育史上是影响深远的，给后世留下了一份丰厚的文化教育遗产。

#### 四. 结语

康有为倾尽毕生的精力向中国引进和推广西方先进的教育制度，就是他向西方寻找真理的重要组成部分。所以，康有为不仅是中国近代史上的一位伟大的爱国主义者，同时也是一位伟大的教育家。

康有为的教育思想不仅体现在理论上，还贯串在他的教学方式中。他的激发学生“主动学习”的教学模式是留给我们这些站在教学第一线的工作者的宝贵遗产，对今天的教学改革仍具有重要的现实意义。

#### 注释

[1] 童子试：中国明、清两代，凡习举业的读书人，在没有通过考试取得生员（秀才）资格之前，不论年龄老少，皆称童生。每年一度的府、州、县学的入学考试，称童子试。

[2] 陆乃翔、陆敦骥：《新鐫康南海先生传》上编，1929年万木草堂刊本，第9页。

- [3] 梁启超:《南海康先生传》,《饮冰室合集》文集之六,第62页,上海中华书局1925年版。
- [4] 康有为:《康南海自编年谱》,《戊戌变法》丛刊(四),第124页。
- [5] 康有为:《康南海自编年谱》,《戊戌变法》丛刊(四),第137页。
- [6] 张伯桢:《康南海先生讲学记·前言》(未刊稿),广东省社会科学院历史研究所藏。
- [7] 梁启超:《南海康先生传》,《饮冰室合集》文集之六,第64页,上海中华书局1925年版。
- [8] 张伯桢:《康南海先生讲学记·前言》(未刊稿),广东省社会科学院历史研究所藏。
- [9] 蒋贵麟:《追忆天游学院》,《出版与研究》1979年4月号,台北成文出版社出版。
- [10] 康有为:《奏请广开学校以养人才折》,《不忍》杂志第四期,上海广智书局1913年出版。
- [11] 康有为:《奏请广开学校以养人才折》,《不忍》杂志第四期,上海广智书局1913年出版。
- [12] 康有为:《日本变政考》卷五按语,北京故宫博物院藏本。
- [13] 康有为:《日本变政考》卷五按语,北京故宫博物院藏本。
- [14] 康有为:《日本变政考》卷四按语,北京故宫博物院藏本。
- [15] 康有为:《日本变政考》卷五按语,北京故宫博物院藏本。
- [16] 康有为:《日本变政考》卷三按语,北京故宫博物院藏本。
- [17] 康有为:《长兴学记》,《康有为全集》第1集,第500页,中国人民大学2007年版。以下均引自《长兴学记》,不注。
- [18] 孙本文:《康有为和章太炎最早把资产阶级社会学传入中国》,《江海学刊》1962年第4期。
- [19] 梁启超:《南海康先生传》,《饮冰室合集》文集之六,第62页,上海中华书局1925年版。
- [20] 康有为:《桂学答问》,《康有为全集》第2集,第62—63页,中国人民大学2007年版。

- [21] 廖中翼:《康有为第二次来桂讲学概况》,《桂林文史资料》第2辑,第70页。

### 参考文献

- [1] 范文澜:《中国近代史》上册,人民出版社1955年第9版。
- [2] 吴玉章等:《戊戌变法六十周年纪念论文集》,中华书局1958年版。
- [3] 侯外庐编:《戊戌变法六十周年纪念集》,科学出版社1958年版。
- [4] 李泽厚:《中国近代思想史论》,人民出版社1979年版。
- [5] 陈旭麓:《近代史思辨录》,广东人民出版社1984年版。
- [6] 胡绳武主编:《戊戌维新运动史论集》,湖南人民出版社1983年版。
- [7] 钱穆:《中国近三百年学术史》,商务印书馆1937年版。
- [8] 费正清编:《剑桥中国晚清史1800-1911》,中国社会科学出版社1985年版。
- [9] 木宫泰彦:《日中文化交流史》,商务印书馆1980年版。
- [10] 实藤惠秀:《中国人留学日本史》,生活·读书·新知三联书店1983年版。
- [11] 宫琦寅藏:《三十三年之梦》,花城出版社1981年版。
- [12] 康同壁编:《万木草堂遗稿》,成文书局1978年版。
- [13] 蒋贵麟编:《万木草堂遗稿外编》,成文书局1978年版。
- [14] 康有为:《万木草堂口说》,丁酉(1897年)七月(8月)抄本。复旦大学历史系收藏。
- [15] 马洪林:《康有为大传》,辽宁人民出版社1988年出版。
- [16] 坂出祥伸:《康有为—乌托邦的开花—》,日本东京集英社1985年版。
- [17] 竹内弘行:《后期康有为论—亡命·辛亥·复辟·五四—》,日本京都同朋社1987年版。
- [18] 胡滨:《戊戌变法》,上海新知识出版社1956年版。
- [19] 夏晓红编:《追忆康有为》,中国广播电视出版社1997年版。
- [20] 方志欽主编:《康梁与保皇会》,天津古籍出版社1997年版。
- [21] 马洪林 何康乐编:《康有为文化千言》,广州花城出版社2008年版。
- [22] 李剑萍:《康有为教育思想研究》,辽宁教育出版社1997年版。
- [23] 陈旭麓:《近代中国社会的新陈代谢》,上海人民出版社1992年版。

- [24] 李名方辑：《蒋贵麟文存》，香港文化教育出版社2001年版。
- [25] 孔祥吉：《康有为变法奏议研究》，辽宁教育出版社1988年版。
- [26] 卢柏林：《康有为的哲学思想》，中国社会科学出版社1980年版。
- [27] 齐赫文斯基：《中国变法维新运动和康有为》，生活·读书·新知三联书店1962年版。
- [28] 罗荣邦：《康有为传记和论丛》美国亚利桑那大学出版社1967年出版。
- [29] 萧公权：《近代中国和新世界—改革家和空想家康有为1858—1927》，美国华盛顿大学出版社1975年出版。
- [30] 马洪林：《康有为评传》，南京大学出版社2011年出版。
- [31] 上海市文物保管委员会编：《康有为与保皇会》，上海人民出版社1982年版。
- [32] 上海市文物保管委员会编：《戊戌变法前后康有为遗稿》，上海人民出版社1986年版。
- [33] 马洪林 卢正言编注：《康有为集》八卷十册，广东珠海出版社2007年版。
- [34] 姜义华、张荣华编校：《康有为全集》十二集，中国人民大学出版社2007年版。

## 附记

本稿为2015~2019年度科学研究助成基金补助金基础研究(C)《东亚近代化地域论比较思想研究—新出康有为亲笔资料中的21世纪的课题—》(课题No. 15K02036)的研究成果的一部分。衷心感谢课题研究负责人平野和彦先生和顾问中村聪先生给予的研究机会。

## 合著者

王昕：潍坊护理职业学院 副教授



## 古文学習方法論② 「二つの叙法 —— 古文学習への導入」

高橋 良久

### 1. はじめに

以下に紹介する「一筆双叙法」「二重叙法」は、その正確な年数はわからないが、少なくとも今から七十年以上前に、それぞれ異なる人によって提唱された古文に関わる修辞法である。この二つの叙法は、ともに古文解釈に有用であると思われるものの、残念ながら現在において認知されているとは言いがたい。しかし、確かにこの二つの叙法の知識の有無が古文理解度を左右する。そこで本稿は、この二つの叙法での古文理解の有効性を現行の教科書に採用されている作品において示し、この二つの叙法を古文学習に導入することを提案する。

### 2. 「一筆双叙法」

「一筆双叙法」は、村井順氏が恩師である五十嵐力博士から古典における文法上の特色として教えられたものであるという。村井氏は「古典解釈の場合、この文法をあてはめることによって、大変恩恵をこうむっている」のであるが、これを五十嵐博士自身が発表しておらず、「また今日目にする古典解釈書に、この文法を用いて解釈してあるものを知らない」ということで、1959年6月の「國文学 解釈と教材の研究」(4巻8号7月号)に「一筆双叙法について」というタイトルの一文で紹介された。しかし、そこに「一筆双叙法」の定義はなく、「一筆双叙法」とするものの例があげられているのみである。本稿でも、まず、「一筆双叙法」としてあげられた例を見ていき、その後で「一筆双叙法」の定義に触れる。

## 2.1 「一筆双叙法」の用例

「一筆双叙法」の例として、村井氏は、『徒然草』第七段から一例、ついで『更級日記』から二例、『枕草子』から一例、つごう四例を紹介する。しかし、本稿では、紙面の関係もあり、それらの中からわかりやすいと思われる『更級日記』の二例を紹介する。

一例目は、駿河の国富士川の場合、住人が富士川で拾った黄色い紙には、翌年任命される国司二名の名が予想されており、それが、実際その通りになったことを述べている箇所にある。

かへる年の司召に、この文書かれたりし、一つたがはず、この国の守とありしままなるを、三月のうちになくなりて、またなりかはりたるも、このかたはらに書きつけられたりし人なり。

ここで、傍線部は、「この国の守と書かれてあった人も、文書に書かれていた通りの人であったのだ」と言いたいところなので、つまりは、「この国の守とありしも、ありしままなるを」と書べきものであるとし、これを一筆で双叙したのが傍線部「この国の守とありしままなるを」であると説明する。つまり、この箇所が「一筆双叙法」なのである。したがって、口語訳も「この国の守と書かれていたのも、書かれていた通りの人が任命されたが」と訳す必要があるという。

二例目は、尾張の国を過ぎ、美濃の国に入ろうとする場面にある。

美濃の国になる境に、墨俣といふわたりして、野がみといふ所に着きぬ。

この傍線部の箇所が「一筆双叙法」であり、正確には「墨俣といふわたりあり、そのわたりして」書くべきであるという。したがって、この箇所も、「一筆双叙法」であることから「美濃の国になる境に、墨俣という渡し場

があり、その渡し場を渡って、野がみという所に着いた。」と訳すことになるというわけである。

## 2.2 「一筆双叙法」とは

このような例が「一筆双叙法」ということは、要するに、その文脈を正確に理解するためには補う内容が必要である表現が「一筆双叙法」ということになるであろう。ただし、補う内容は文脈から容易に判断でき、それは読み手の解釈によって変わるものではない。

ところで、村井氏によれば、「一筆双叙法」は、書き手の意図的行為ということになるが、素直にそう受け止めてよいであろうか。書き手の不注意ということは考えられないであろうか。あるいは、今の我々がことばの補充を必要と感じる表現も、当時の人にしてみれば、そうとは感じないものだった可能性はないのだろうか。

佐伯梅友氏は、書き進めていくうちに書いていた内容ではないことに意識が行ってしまい、それでも書き続けた結果、文脈の通りが悪くなってしまう現象を「筆のそれ」と呼んだ。「一筆双叙法」の場合は、そうした内容のずれではなく、現代の私たちからすれば、内容飛ばし、ことば抜けと感じる現象である。ただし、たとえそうであったとしても、こうした箇所を「一筆双叙法」と名づけることは、ネーミングの妙もあって、こうした箇所を読み手に意識させるには有効であろう。

## 2.3 『徒然草十一段』にある「一筆双叙法」

さて、村井氏が「一筆双叙法」としてあげる『徒然草』第七段「あだし野の露消ゆる時なく」の例は、以下の箇所である。

命あるものを見るに、人ばかり久しきものはなし。かげろふの夕べを待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つくづくと一年を暮らすほどだにも、こよなうのどけしや。

この傍線部については、「つくづくと一年をくらさば、一年をくらすほどだにも、こよなう長閑けしや」と書くところであるはずが、このようにあるのを「一筆双叙法」だからという。

ところで、この七段と同様、古文教材としてよく採用される十一段（神無月の比、栗栖野といふ所を過ぎて）にも「一筆双叙法」と指摘できるのではないかと思われる箇所がある。それは、この段の最後の一文にある。

かくてもあられけるよと、あはれに見るほどに、かなたの庭に、大きな柑子の木の、枝もたわわになりたるがまはりをきびしく囲ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばと覚えしか。

傍線部の「かなたの庭に」がその箇所である。というのも、この語句に係っていく先を考えるに、この一文にはその箇所がないからである。例えば、日本古典文学全集本（永積安明訳）では、以下のように訳されている。

こんなにしてでも、住んでいられるものだなあと、感じ入って見ているうちに、向こうの庭に、大きな蜜柑の木で、枝もしなうほどになっているもののまわりを、嚴重に囲ってあったのばかりは、少々今までの感興がうすれて、この木がなかったらよかったのにと思われた。

この現代語訳でも「向こうの庭に」に係る先は不明確である。

こうした係り受けの不備は、本来、「かなたの庭にある大きな柑子の木の……」書くべきところを「かなたの庭に大きな柑子の木の……」と書いてしまったことで起きるのだと思う。兼好は、「かなたの庭に木があり、その木が……」と考えていたであろうが、「かなたの庭に」と書いたところで、意識がその先の大きな蜜柑の木がどうなっているかにいってしまい、「かなたの庭に」と書いたことを忘れてしまったかのようである。こうし

た事情で、「かなたの庭に」の係り先がないのであろうが、この一文は、本来、「あり」があったと見るのである。「一筆双叙法」である。もちろん、訳は、「かなたの庭にある大きな柑子の木の……」とある文の訳となる。実際に、この文の現代語訳には以下のようなものがある。

こんなふうにも住んでいられるものだなあと感じ入って見ているうちに、向こうの庭に、大きな蜜柑の木があり、枝もしなうほどに実っているそのまわりを嚴重に囲ってあったのばかりは、少々今までの感興がさめて、この木がなかったらよかったのにと思われた。

『日本の古典を読む1 4 方丈記・徒然草・歎異抄』永積安明 2007年 小学館)

日本古典全集本と同じ訳者であるが、こちらでは「あり」が補われている。もちろん、この訳に関して、「かなたの庭に」を受ける箇所がないのでそれを補ったというような解説はない。しかし、こうあるのは、係り受けの不備を感じたからではないだろうか。

また、この訳は、「大きな柑子の木の」の「の」を主格に解したので「大きな蜜柑の木があり」となるが、この「の」を同格に解した場合は、「大きな柑子の木の、枝もたわわになりたる」がひとまとまりになるために「あり」を補う位置が違ってくる。

こんなふうにしても、住めば住めるものだなと、しみじみした感じで見ているうちに、むこうの庭に、大きな柑子の木の、枝も曲がるほどになっているのがあって、そのまわりの嚴重に囲ってあるのが眼についたので、ちょっと興ざめてしまって、この木がもしなかったらなあ、と思われたことだった。

『改訂徒然草』 今泉忠義 1995年 角川文庫ソフィア)

これも「あり」を補ったことには何も触れない。

受ける語は、「あり」に限らなくてもよい。次の例は、「見える」を補うことで係り受けを整えた訳である。

こんなふうにしても暮らせるのだなあ、と感慨深く眺めているうちに、ふと向こうの庭に、大きな柑子の木で、枝もたわわに実が生っている周囲を、厳しく囲ってあるのが見えた。これは興醒めで、この木がなければよかったのに、と思われた。

『徒然草』 島内裕子 2010年 ちくま学芸文庫)

この一文、文中にある助詞「の」「が」をどのように捉えるかは議論がなされ、いまだに解釈が分かれているのであるが、この「かなたの庭に」の係り受けに関して触れている注釈書類は見あたらないようである。

### 3. 「二重叙法」

「二重叙法」という用語は、高崎正秀氏の『伊勢物語新釈』（1932年 正文館書店）にある「二重叙述法」という用語を岡部政裕氏が「二重叙法（総叙法・細叙法）覚書」（『中京國文学』5号 1986年）において変更して用いたものである。また、「総叙法」「細叙法」の用語は、やはり『伊勢物語新釈』にある「総叙法」「細叙」を「細叙」は「法」を付け「細叙法」としたものである。こうした名称の変更は、あくまで名称に統一性を持たせるためのものであって内容の変更ではない。

#### 3.1 「二重叙法」とは

では、具体的に「二重叙法」とはどのようなものか。『伊勢物語新釈』第一段「うひかうぶり」の語釈に「二重叙述法」「細叙」という語が見出される。

おもほえず、ふるさとにいとほしたなくてありければ、ここちまどひにけり。男、著<sup>アア</sup>たりける狩衣の襦を切りて、歌を書きてやる。その男しのぶずりの狩衣をなむ著<sup>アア</sup>たりける。

春日野の若紫のすりごろも　しのぶのみだれ限り知られず  
となむ、おひつきていひやりける。

狩に行った男が姉妹を垣間見た以降の場面でのことである。本文最後の行にある「おひつきていひやりける」の語釈に、

初めに「歌を書きてやる」とあつて、今又「いひやりける」は二重叙述法である。細叙に先だつて概叙するので、日本の古代修辭法として珍しくない処である。

とある。

また、「総叙法」という語は、第十二段「むさし野」の語釈にある。

昔、男ありけり。人のむすめをぬすみて、武蔵野へみてゆく程に、盗人なりければ国の守にからめられにけり。女をば草むらの中に隠しおきて逃げにけり。道くる人、「この野はぬす人あなり。」とて、火つけむとす。女わびて、

武蔵野はけふはな焼きそ。若草のつまもこもれり。我もこもれり  
よ

とよみけるを聞きて、女そばとりて、ともにみていにけり。

本文二行目「搦<sup>アア</sup>められにけり」の語釈は、

例の総叙法。次に更に其れを細叙してゐる。一旦からめられたが、更

に女だけ残して逃げたと見るのは悪い。

とある。

こうして実際に用いられた例からいえば、つまり、「二重叙（述）法」とは、「総叙法」と「細叙（法）」から成るもので、「総叙法」「細叙（法）」の順で描かれるものということになる。まず、どうなったのか、何をしたのかと結果を述べ、それから、どうしてそうなったのか、なぜそうしたのかと事の次第を述べるという述べ方といえる。

なお、『伊勢物語新釈』において「二重叙述法」「総叙法」「細叙」の語が見出されるのは、ここに示した第一段と第十二段の語釈においてのみである。

### 3.2 『伊勢物語』九段にある二重叙法

村井氏の論文「二重叙法（総叙法・細叙法）覚書」は、まず、「用語は別として、叙法としての意識（自覚）は、つとに注釈書に見られる」として、『古事記』をはじめとして『源氏物語』『更級日記』『堤中納言』での「二重叙法」が紹介される。つまり、「二重叙法」は広く古典作品に見られるもので、決して『伊勢物語』に限られたものではないことを示すわけである。そして、そう確認されたのち、『伊勢物語』第九段「八つ橋」の場面は「二重叙法（総叙法・細叙法）」であると指摘し、新たな解釈を提出した。それは、「八橋」の場面は、「三河の国、八橋といふ所にいたりぬ。……その沢のほとしの木の陰に下りゐて、乾飯食ひけり」までが総叙法であり、これに続く、「その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。……とよめりければ、みな人、乾飯の上に涙おとして、ほとびにけり」までが細叙法という二重叙法の構成であるというのである。

そう考えないと（総叙法と細叙法になっていることをいう）、末尾の「かれいひの上に涙おとしてほとびりけり」が理解できなくなる。

決して、食べ残した乾飯の上に涙をおとしたのではない。時間の順序からいえば、馬から下りて、目の前の沢にあざやかに咲いていたかきつばたを眺め、都に残した妻をしのぶ歌を詠み、さて、乾飯を食べたのである。

ところで、乾飯を食べるには、季節が夏だから水漬けにしなければならない。ところが、乾飯の上に涙をおとしたので、乾飯がほとび、水漬けにしなくてもすんだというのである。もちろん誇張ではあるが、単なる「しゃれ」ではなく、ここにユーモア（笑い）とともにペース（涙 — 都の妻を思う哀しみ）がこめられていることを読みとるべきであろう。

二重叙法であると見ることによって、「乾飯食ひけり」と「乾飯の上に涙おとして、ほとびにけり」との関係がうまく捉えられるというわけである。場面のつながりの悪さも、こう説明されることで解消される。また、この場面の人々は、「水漬けにしなくてもすんだ」と笑いながらも涙を流したであろうという指摘は、この話をいっそう魅力的なものにさせてくれる。

### 3.3 『伊勢物語』二十三段にある二重叙法

ところで、『伊勢物語』にはもう一段、二重叙法がなされているのではないかと思われる段がある。これも高等学校の古文教材としてよく採用される第二十三段「筒井筒」がそれである。

この段は、内容的に三つの場面に分けられる。「筒井つもの」「くらべこし」の歌のある結婚するまでの場面、「風吹けば」の歌のある高安の女のもとへ行くことを取り止める場面、「君があたり」「君来むと」の歌のある高安の女に失望し通わなくなった場面である。このうち二番目と三番目の場面のつながりの悪さは誰もが感じるものである(1)。

この女、いとう化粧じて、うちながめて、  
風吹けば沖つしら浪たつた山夜半にや君がひとりこいらむ  
とよめるを聞きて、かぎりなくかなしと思ひて、河内へもいかずなり  
にけり。  
まれまれかの高安に来て見れば、…

つまり、男は高安の女のもとには行かなくなったと言っておきながら、たまたまやって来て見ると、と続くのである。高安の女とは別れていないのである。

しかし、これは、二重叙法と見れば解決できるのではないだろうか。「河内へもいかずなりにけり。」で終わる二番目の場面は総叙法、そして、「まれまれかの高安に来て見れば」で始まる三番目の場面を細叙法という二重叙法の構成になっていると捉えるのである。

他の女の所に通うのに、嫌な顔を一つしない妻。男はその態度に妻の浮気を疑い、その現場を押さえてやろうと行動に移すものの、結果としては、そのことで、妻のいじらしさ、かわいらしさを知ることとなり、高安の女とは別れてしまった。つまり、「風吹けば」の歌の場面は、男は浮気をきっぱりやめてしまったと述べている総叙法の部分なのである。そして、それ以降の細叙法の部分は、浮気をきっぱりやめるまでに男と高安の女との関係はこのようになっていたと述べているのである。

親密になるうちに、そのがさつき、品のなさが目に付き、高安の女には少し嫌気が差していた。それゆえ、「行く」と約束していたものの、正直、気乗りがせず行っていない状態であった。しかし、この時、なぜか、久しぶりに行ってみようかという気になり、準備を始めた。ところが、準備をしているうちに、ふと、この機会に、高安に行くふりをして妻が浮気をしているかどうかを確かめてやろうという気になった。そこで、家を出たものの、こっそり戻り、前栽の中に隠れた、そういう順序なのである。

このように二番目の場面を総叙法、三番目の場面を細叙法とすれば、こ

の二つの場面がつながる。そればかりか、こう読むことで「この女いとう化粧じて」という表現がなおのこと生きてくるのではないだろうか。二番目の場面の出来事に続き三番目の場面の出来事があるという場合には、「この女いとう化粧じて」は、夫のいない間にも化粧するという品の良い妻ということを表し、高安の女と対照的な存在になるだけである。しかし、この場面が総叙法で述べられた場面であれば、男は「この女いとう化粧じて」という妻のふるまいに、すぐさま高安の女と違いを意識できたはずである。そうであれば、この時、男は高安の女とは別れようという気持ちが起り、夫の身を案じる歌を聞いたことでそれは決定的になったといえよう。そして、このようだとすれば、二番目と三番目の場面は一つと見ることになる。すると、この話は、結婚するまでと結婚してからという二つの場面で成り立つ明確な構成の話になる。

ちなみに、高崎氏の『伊勢物語新釈』では、二つ目の場面の最後「河内へも行かずなりにけり」が「河内へもをさをさ通はずなりにけり」と塗籠本の本文が採られている。これでは、二重叙法の読みはできない。

#### 4. 古文学習での活用

以上、いかに「一筆双叙法」と「二重叙法」、この二つの叙法が古文読解において有効であるかを示した。

「一筆双叙法」の知識を持つことは、古文における語句の、いや、古文に限らず文における「かかり受け」ということを意識させることにつながる。そして、そうした意識を高めることは、文の構造を捉える力を養い、ひいては文の正確な理解へと読み手を導くはずである。

一方、「二重叙法」の知識を持つことは、古文に間違ったイメージを抱くことを防いでくれるはずである。「二重叙法」を知らなければ、時系列がおかしい話の運び方に会おうと、それを論理性の欠如としてしまうかもしれない。そうではなく、それは書き方なのだと見れば、そうした誤解を

防ぐ。さらに、『伊勢物語』の九段と十一段において、その箇所を「二重叙法」と見ることで新たな読解が展開できたように、「二重叙法」という知識の活用は、作品の未知なる魅力を引き出す可能性がある。

## 5. おわりに

古文は面白い、古文を読むことは楽しい。こうした言葉を学習者から聞きたい、とは教授者誰もが持つ思いであろう。この思いの実現に向けて、これまでどれほどの教授法や教授の工夫が提案され紹介されたことであろう。そして、どれほどの教授者がそれらを用い、あるいは、それらを参考にして授業を行ったことであろう。いや、今もそうした努力・工夫は行われている。教授者は試行錯誤しながら自分の授業スタイルを獲得していくのである。

今回は、「一筆叙法」「二重叙法」が古文理解に大きく関わることを示し、古文学習への導入を提案した。言うまでもなくこれは第一段階にすぎない。次は、この二つの叙法を古文学習にどのように活用していくか、その追求が課題となる。

注 1 片桐洋一〈鑑賞日本古典文学〉『伊勢物語』(1975年 角川書店)には、「前の節の終わりに、『河内へもいかずなりにけり』とあった。そこで終わっていたほうが物語としてはよかったのではないか。しかし、おそらくはだれかがこの部分を付加したのであろう。行かなくなったと言って、すぐに『まれまれ…来て見れば』と続けるのだから、大したものである。」とある。

研究室ノート（本学専任教員 abc 順 2016 年 11 月～2017 年 11 月）

- ①論著 ②翻訳 ③研究発表 ④社会活動
- ⑤教育改善に関わる業績・その他

江口直光

①

- 1. 『ワーグナーシュンポシオン 2017』(共著) (アルテスパブリッシング、2017 年 7 月)
- 2. 『知ってほしい国ドイツ』(共著) (高文研、2017 年 9 月)

②

- 1. クリスティアン・マルティン・シュミット著『ヨハネス・ブラームスとその時代』(単訳) (西村書店 2017 年 10 月)

④

- 1. 公益財団法人日本高等教育評価機構大学機関別認証評価員 (2017 年 4 月 1 日～2018 年 3 月 31 日)

⑤

- 1. 愛知文教大学人文学部自己点検評価委員として自己点検評価書作成に携わるとともに、認証評価受審の実務を担当。
- 2. 愛知文教大学人文学部教務部長ならびにカリキュラム委員として、新カリキュラムの編成と科目のナンバリングに従事。

遠藤 康

④

- 1. 東海印度学仏教学会理事・幹事

畠山 大二郎

①

- 1. 「「古典B」教科書の付録における「衣服」「色」「色目」解説の彩色

化」（『愛知文教大学論叢』第19号、2016年11月）

2. 「古文解釈法—装束を読むという視点から—」（『教育研究』第7号  
2017年3月）

④

1. 「平安貴族の年中行事」（朝日カルチャーセンター朝日JTB・交流文化塾特別講座、於・横浜教室、2017年3月）
2. 「キモノの中の洋服」（愛知文教大学公開講座、於・愛知文教大学、2017年5月）
3. 「『源氏物語』の衣装～中の君の細長姿～」(写本で読む源氏物語講座10周年記念講演、於・川崎市総合自治会館、2017年8月)
4. 「光源氏を着る～源氏物語の夏の装束～」(NHKカルチャー特別講、於・さいたまアリーナ教室、2017年8月)
5. 「平安の女性装束—桂姿の女君—」（朝日カルチャーセンター朝日JTB・交流文化塾特別講座、於・横浜教室、2017年9月）
6. 「『源氏物語』の装束 —平安時代の女性衣服—」（フェリス女学院大学オープンカレッジ文化講演会、於・フェリス女学院大学緑園都市キャンパス、2017年9月）
7. 中古文学会 事務局書記およびHP管理
8. 中古文学会 選挙管理委員会
9. 服飾美学会 監事
10. こまき市民文化財団 理事
11. 特定非営利活動法人〈源氏物語電子資料館〉副代表理事

早川 渡

①

1. 「プログラミングとおもちゃ」（『愛知文教大学論叢』第20巻、2017年11月）

稲垣 知子

①

1. 「本藩と支藩の職制上の人事交流～尾張藩と高須藩を事例に～」(『愛知文教大学論叢』20号、2017年11月)

④

1. 「江戸時代の法との対話」(愛知文教大学公開講座、於：愛知文教大学、2017年7月)
2. 「江戸時代は鎖国だった？」(平成29年度愛知文教大学連携講座 全3回、於：小牧市公民館、2017年10月)
3. 名古屋市市政資料館調査協力員

金丸 千雪

①

1. 「ヴィクトリア時代の結婚と女子教育：『アダム・ビード』と『従妹フィリス』における娘たち」(『愛知文教大学論叢』第19巻、2016年11月)
2. 「Jane Eyre 再読：不在の母と娘」(『サイコアナリティカル英文学論叢』第37号、2017年3月)

③

1. 「『アダム・ビード』における女子教育」(第20回日本ジョージ・エリオット協会全国大会、於：大谷大学、2016年12月)

④

1. 「英文和訳から翻訳へ：原文から逸脱しないで読むブロンテと樋口一葉」(愛知文教大学公開講座、於：愛知文教大学、2017年11月)

勝股行雄

①

1. 「学校文法における仮定法指導の再検討」(『愛知文教大学教育研究』)

7号、2017年3月)

④

1. 「日本人と英語学習」(愛知文教大学公開講座, 2017年10月)
2. 「世界の言語と英語」(出張講義、於・杜若高校, 2017年2月)
3. 愛知県商業高校スピーチコンテスト審査員(於・一宮商業高校、2017年10月28日)
4. 愛知県立学校評議員(2017年4月1日～)

小林正樹

①

1. 「俯瞰的な新経営学“Busivics”の枠組み」(日本応用情報学会学会誌『NAIS Journal』Vol. 11、2017年3月)
2. 「事例に基づく二段階意思決定～新語・流行語大賞の世代間格差をケースとして」(『愛知文教大学論叢』第20巻、2016年11月)

③

1. 「大人教授業時の学生自発型LIVE授業の試行と分析」(私立大学情報教育協会、2017年度『ICT利用による教育改善研究発表会』、於・東京理科大学、2017年8月)

④

1. 「意思決定論入門」(全2回)(伊那西高等学校出張授業、2016年12月)
2. 「天満音楽祭」、OAPタワー他、2017年10月

黒田 敏数

①

1. 「Operant models of relapse in zebrafish (*Danio rerio*): Resurgence, renewal, and reinstatement」*Behavioural Brain Research* 第335巻, 2017年

2. 「Reversal learning and resurgence of operant behavior in zebrafish (*Danio rerio*)」 *Behavioural Processes* 第 142 卷, 2017 年
3. 「Baseline response rates affect resistance to change」 *Journal of the Experimental Analysis of Behavior* (出版予定)
4. 「A combination of Raspberry Pi and SoftEther VPN for controlling research devices via the Internet」 *Journal of the Experimental Analysis of Behavior* (出版予定)

③

1. 「ゼブラフィッシュにおける強化率と変化抵抗の関係」(日本行動分析学会第 35 回年次大会、2017 年 10 月)
2. 「ゼブラフィッシュにおける捕食者の動画を用いた罰」日本行動分析学会第 35 回年次大会、2017 年 10 月)
3. 「Resurgence, renewal, and reinstatement of operant responding in zebrafish (*Danio rerio*)」 Association for Behavior Analysis International, the 43rd annual Convention, 2017 年 5 月
4. 「Resurgence with ABA and ABB context changes in children with Autism Spectrum Disorder in an automated touchscreen computer task」 Association for Behavior Analysis International, the 43rd annual Convention, 2017 年 5 月
5. 「Raspberry Pi and Soft Ether VPN for the remote control of contingencies」 Society for the Quantitative Analyses of Behavior, the 40th annual meeting, 2017 年 5 月
6. 「動物園でデグー (*Octodon degus*) が「勉強」している様子の展示」(プリマーテス研究会第 61 回年次大会、2017 年 1 月)

④

1. 京都大学霊長類研究所および公益財団法人日本モンキーセンター(愛知県犬山市)とのデグー (*Degus Octodon*) についての連携研究、2016 年 1 月～現在

馬燕

②

1. 「康有為と宮崎滔天」 (単著、中国古典学会学術雑誌『中国古典研究』第五十八号、2016年12月)
2. 「康有为教育思想在现代教育中的传承」 (共著、『愛知文教大学論叢』第20号、2017年11月)

④

1. 「課題研究(中国語研究)」 (高大連携出張授業、於：愛知県立愛知商業高等学校、2017年4月～2017年11月)
2. 「知っておくと便利な中国語」 (出張授業、於：愛知県立岩倉総合高等学校、2017年5月)
3. 「外国語講座 入門中国語」 (小牧市国際交流協会主催、於：小牧市公民館、2017年5月～12月、全20回)

⑤

1. 2015～2019年度科学研究費助成金基盤研究(C)「東アジア近代化の地域論的比較思想研究—新出の康有為自筆資料に見る21世紀的課題—」, 課題番号 15K02036, 研究分担者

松岡みゆき

④

1. 「異文化理解と外国人に対する『やさしい日本語』について」(愛知文教大学公開講座、於：愛知文教大学、2017年9月)

中島 淑子

③

1. 「Enhancing Lesson Study and Developing Teaching Materials focusing on students learning」(モンゴル授業研究会。於・モンゴル国立教育大

学：ウランバートル、2017年)

2. 「算数教育における量学習の変遷」(日本教育方法学会第53回大会、  
於・千葉大学、2017年)

④

- 1 教師の研究サークル「授業で育つ教師の会」事務局長

Phillip Riccobono

①

1. The Impact of Instructional Design Strategies as a Conduit to Curiosity for Korean University EFL Students. *Studies In English Education*, 22(1), 143-191. (2017)
2. Critical Pedagogy in Japan and South Korea ELT: Surveying key issues and application. *Aichi Bunkyo University*, 7, 21-25. (2016)
3. Authentic Help: Using Corpus Linguistics to Assist in Language Teaching. *Vocabulary Education and Research Bulletin (VERB)*, 5(1), 6-11. (2016)
4. ALAK-GETA Joint International Conference: The Relationship between Pragmatics and Corpus Linguistics. *Pragmatics Matters*, (49), 5-6. (2016)

②

1. Discussions Across Asia: Exchanges to Resolution (Poster Presentation). Co-Presenter. Japan Association for Language Teaching (JALT) International Conference 2016. Nagoya, Japan, November 26, 2016.
2. Discussions Across Asia: Exchanges to Resolution. Presenter. The Third AILA East-Asia and 2016 ALAK-GETA Joint International Conference. 2016. Gwangju, South Korea, September 10, 2016.

西口 智也

①

1. 論文「学校教育における漢文訓読「返り点の運用ルール」試案をめぐって」(『愛知文教大学 教育研究』第6号、2017年3月)

④

- ・大学入試センター試験作問(2015年度および2016年度)
- ・出張授業「中国語で自己紹介をしてみよう」(於：愛知県立稲沢高等学校, 2017.1)
- ・出張授業「中華料理を注文してみよう」(於：愛知県立稲沢高等学校, 2017.1)
- ・出張授業「中国語で自己紹介」(於：愛知県立中川商業高等学校, 2017.9)
- ・出張授業「中国と台湾の中国語」(於：愛知県立南陽高等学校, 2017.9)
- ・出張授業「観光中国語～台湾編～」(於：愛知県立鶴城丘高等学校, 2017.10)
- ・講演「漢詩朗読の魅力 ―日本語としての訓読と中国語としての音読―」(愛知文教大学公開講座、於：愛知文教大学, 2017.4)

⑤

1. 愛知文教大学 CCラウンジ (Chinese Communication Lounge) コーディネーター (愛知文教大学、2017年4月～)

佐藤 良太

①

1. 「夏目漱石『夢十夜』―「第一夜」における〈自己〉―」(愛知文教大学『教育研究』第7号、2017年3月)

③

1. 「夏目漱石『門』―〈罪〉の救済とキリスト教―」(日本キリスト教文学会関西支部シンポジウム 漱石文芸とキリスト教―『門』をめぐって 於・関西学院大学 2017年1月)

④

1. 「漱石作品〈その死後の生〉」（京都漱石の會 司会 於：御所西京都平安ホテル 2016年11月）
2. 「〈J・ブンガク〉の可能性—夏目漱石の人と文学」（出張講義於：愛知県立南陽高等学校 2016年11月）
3. 「〈私〉とは何か？—文学に描かれた〈自己〉—」（高大連携：伊那西高等学校 2016年10月12日・26日）
4. 「〈京都〉に学ぶということ—佛敎大学25年—（学科講演 第8回佛敎大学ホームカミングデー2017年11月5日）
5. 「漱石生誕150年 夏目漱石〈国民的作家の相貌〉」（佛敎大学四条センター講座 2017年11月15日）
6. 日本キリスト敎文学会関西支部運営委員（2014年7月～至現在）
7. 阪神近代文学会『阪神近代文学』編集委員（2015年7月～至現在）

高橋 良久

①

1. 『みたいだ』覚書 2016年」（『愛知文教大学論叢』第19巻 2016年11月）
2. 「野上弥生子・岡本かの子・網野菊の『みたようだ』『みたいだ』」（『愛知文教大学比較文化研究』第14号 2016年11月）
3. 「古典学習方法論② 『二つの叙法』——古文学習への導入」（『愛知文教大学論叢』第20巻 2017年11月）

④

1. 「句読点の力」（「小牧市市民講座」2016年11月、まなび創造館）

竹中 烈

①

1. 伊藤潔志編著『哲学する教育原理』（「4-1 子どもの発見」部分）（保育出版社、2017年3月）

2. 「生徒指導における教師-生徒間の信頼という概念の検討」(『教育研究』、201年3月)
3. 「フリースクールにおけるスタッフ・子ども・親の『感情統制の三極関係』－『FS的自己』としての親を起点として－」(『人間関係学研究』第21巻第1号、2016年12月)

④

1. 小牧市社会教育委員及び副会長 (2016年4月1日～)
2. 小牧市市民活動促進委員会委員 (2017年4月1日～)
3. 外語学院アドバンスアカデミーにて愛知文教大学体験講義 (2017年1月24日)
4. 愛知淑徳大学にて時事通信出版主催学内講座 (2017年3月1日)
5. 京都外国語大学にて時事通信出版主催学内講座 (2017年6月17日)
6. 大阪大谷大学にて時事通信出版主催学内講座 (2017年9月8日)
7. 名古屋学芸大学にて時事通信出版主催学内講座 (2017年11月18日、25日)

富田 健弘

④社会活動

1. 小牧市国際交流協会 理事 (2015年5月～)
2. 小牧市文化財啓発事業調査研究受託委員会 委員 (2014年5月～)
3. 羽島市社会福祉法人万灯会評議員選任・解任委員会外部委員 (2017年4月～)
4. 社会福祉法人養徳福祉会ハチスチルドレンズセンター外部委員 (2017年4月～)

辻 千春

①

1. 「植民地朝鮮における創作版画の展開（４）-仁川における佐藤米次郎の創作版画活動と時局下の蔵書票展の開催について-」（『名古屋大学博物館報告』No.32, pp. 47-62, 2017年3月）
2. 「植民地朝鮮における創作版画の展開（５）-釜山における清永完治と日本人の趣味家ネットワークによる創作版画誌『朱美』の刊行について-」（『名古屋大学博物館報告』No.32, pp. 63-78, 2017年3月）

③

1. 「『空白の美術史、植民地朝鮮における創作版画の展開についての研究』について」（第21回版画史研究会、特別講演会講師、於・東京古書会館、2016年11月）

④

1. 「中国の正月の飾り絵を見る・聞く？」（愛知文教大学公開講座第8回講師、2017年1月）
2. 愛知県小牧警察国際化問題アドバイザー2017年度（継続）

⑤

1. 『中国語ポートフォリオ』作成：2017年4月から実施
2. 中国語学修支援施設「中国語コミュニケーションラウンジ（CCラウンジ）」設置企画：2017年4月から実施



鈴木織部、138 高木平七、141 内藤作兵衛、145 林久右衛門。

(17)

尾張から用人並に派遣され、その後、用人職についた二四人の藩士の内訳は次の通りである。名前の前の番号は、「職禄名譜」の「御留守居・御用人並・御用人見習・御用人格寄合・御用人格」の項に記された順序を示している。

20 三尾忠兵衛、21 各務九八郎、23 深田助太郎、24 内藤<sup>(久)</sup> 又 左衛門、25 浦井千太郎、26

水野喜三郎、27 天野彦七、28 松田忠右衛門、30 佐枝十兵衛、32 朝比奈弥八郎、34 恩田孫四郎、35 鳥居与惣左衛門、36 津田四郎左衛門、38 永井兵右衛門、39 渡辺与兵衛、40 五十嵐作左衛門、44 本多左門、47 平岩兵庫、50 蛭江理満右衛門、54 児玉左内、59 田嶋八右衛門、61 小野沢右衛門、62 西郷重太夫、66 落合源藏。

(18)

海津町・前掲『海津町史』通史編上 二二七頁「高須藩松平氏の家臣団の職制」。

(19)

内訳は、次の通りである。名前の前の番号は、「職禄名譜」の「御馬廻頭」の項に記された順序を示している。後職が家老…9 須賀井惣右衛門、19 堀田十郎兵衛、22 永井藤左衛門、26 林九郎左衛門、28 石原久右衛門、32 長屋安左衛門、36 石川理左衛門、45 神谷数馬、46 飯嶋藤十郎、48 林岩藏。後職が郡代…38 吉田左兵衛、40 水野伴左衛門、49 今泉源内。

(20)

第三期に後職で高須の職について二人の内訳は次の通りである。名前の前の番号は、「職禄名譜」の「御用人」の項に記された順序を示している。後職が番頭(馬廻頭)…128 渡辺与兵衛、129 五十嵐作左衛門、133 柿崎八右衛門、134 蛭江理満右衛門、135 石川九兵衛、136 児玉左内、137 鈴木織部、138 高木平七、141 内藤作兵衛、143 落合源藏、144 西郷重太夫、145 林久右衛門。

(14)

高須藩の下位職から家老職についた尾張藩士二四人の内訳は次の通りである。なお、藩士の前に付した番号は、【表1】の藩士の番号を示している。家老並から昇進…63 森兵太夫、66 大伴庄兵衛、67 正木多門、68 尾崎又六、69 広瀬七左衛門、70 大道寺新六郎、71 成瀬加兵衛、74 間瀬権右衛門、75 柿崎八右衛門。郡代より昇進…28 高木伝右衛門。馬廻頭(Ⅱ番頭)から昇進…7 須加井惣右衛門、16 堀田十郎兵衛、18 永井藤左衛門、20 林九郎左衛門、22 石原久右衛門、26 長屋安左衛門、31 石川理左衛門、37 神谷数馬、38 飯島藤十郎、39 林岩蔵。用人から昇進…3 若林治右衛門、30 成田新五左衛門、32 石原久右衛門、58 佐々武左衛門。高須藩の下位職から郡代職についた尾張藩士四人の内訳は、次の通りである。藩士の前に付した番号は、「職禄名譜」の「高須郡代」に記された藩士の順序を示している。馬廻頭より昇進…14 吉田左兵衛、15 野伴左衛門、16 今泉源内。用人より昇進…7 高木伝右衛門。

(16)

用人職へ派遣された尾張藩士が昇任して馬廻頭職についた四九人の内訳は次の通りである。名前の前の番号は、「職禄名譜」の「御用人」の項に記された順序を示している。4 羽鳥平左衛門、6 小川次郎左衛門、12 宇野朱左衛門、14 須賀井惣右衛門、16 酒井金太夫、17 日下部弁右衛門、24 牧野伊左衛門、28 <sup>(堀之)</sup>増田十郎兵衛、35 永井藤左衛門、38 林八郎左衛門、40 石原久右衛門、41 平沢只左衛門、44 上田伴右衛門、45 鈴木嘉兵衛、46 長屋安左衛門、47 上村猶右衛門、49 須野崎平兵衛、54 石川理左衛門、58 箕形善左衛門、59 吉田左兵衛、60 兼松六郎左衛門、64 水野勘蔵、68 <sup>(周之)</sup>問嶋権左衛門、71 今泉源内、72 酒井金太夫、74 永井藤左衛門、76 神谷数馬、77 飯嶋藤十郎、78 林勘九郎、81 林岩蔵、82 今泉源内、83 成田新五左衛門、84 渡辺弥十郎、97 平岩要人、99 吉田源五左衛門、103 三輪伝内、105 成田新五左衛門、107 浦井小左衛門、113 熊沢又八郎、115 桜井伝左衛門、124 大内小次郎、126 神谷八郎右衛門、127 安井弥三郎、133 柿崎八右衛門、135 石川九兵衛、137

しい情報の一つとして、活用されることを期待する。

註

- (1) 林董一「支藩考」『史学雑誌』七一編一―二号 一九六二年。
- (2) 林・前掲「支藩考」五六頁。
- (3) 林・前掲「支藩考」五六―五七頁。
- (4) 江戸期を通じた高須藩士の職員録。原本は、徳川林政史研究所が所蔵しているが、『海津町史』史料編三に全文が翻刻され収録されている。海津町編『海津町史』史料編三（海津町）一九八〇年。
- (5) 海津町編『海津町史』通史編上（海津町）一九八三年 二五一―二五二頁。
- (6) 大野正茂『美濃高須藩家臣史料』（松風園文庫）二〇一四年 六頁。
- (7) 大野・前掲『美濃高須藩家臣史料』四―五頁。
- (8) 松村冬樹「尾張藩『藩士名寄』のデータベース化」『名古屋博物館研究紀要』二六卷 二〇〇三年、同年、同「尾張藩役職者の変遷について」一―二「名古屋博物館研究紀要』二八―二九卷 二〇〇五―二〇〇六年、同「尾張藩『同心』身分の再検討」『名古屋博物館研究紀要』三七卷 二〇一四年。
- (9) 松村・前掲「尾張藩役職者の変遷について」四一頁。
- (10) 註(4)参照。
- (11) 海津町・前掲『海津町史』史料編三、三八頁。
- (12) 「尾州家官制」(名古屋市教育局委員会編『名古屋叢書(校訂復刻)』三卷 愛知県郷土資料刊行会 一九八二年 三―四頁)。
- (13) 大野・前掲『美濃高須藩家臣史料』六頁。

おわりに

本稿では、尾張藩とその支藩である高須藩の藩士レベルにおける職制上の人事交流の実態を、高須藩士の職員録ともいえる「職禄名譜」をもとに、高須藩の上級職に位置づけられる六職（家老、家老並、郡代、馬廻頭、用人、領知奉行）を対象に検討した。その結果、この六職に就任した高須藩士と尾張藩士の人数と割合は、全就任者三七一人中、高須藩士が四五人（一二％）、尾張藩士が二九七人（八〇％）、不明者二九人（八％）で、本藩から八割もの藩士が派遣されていた実態が明らかになった。高須藩は石高が三万石の小藩とはいえ、独立した藩であるのに、藩政上の上位職に本藩からこのように大量の藩士が派遣され就任しているのは驚くべき実態である。

次に、尾張藩と高須藩の人事交流の時代変化を考察するため、高須藩の職制上の変更に合わせて時代を三つに区切り、その特徴を検討した。即ち、第一期は天和元（一六八一）年から文化二年（一八〇五）まで、第二期は文化三年から天保一三年（一八四二）まで、第三期は天保一四年から慶応四（一八六八）年までである。その結果、第一期と第二期・第三期の間に、大きな変化が見られることが分かった。即ち、第一期には、高須の上位四職（家老・郡代・馬廻頭・用人）のどの職にも高須藩士が就任していたが、第二期・第三期には、これらの職への高須藩士の就任は全くななくなっていること、一方、尾張から派遣された藩士も、第一期には任期を終了後、大半が退職していたが、第二期・第三期には、任期を終えた後、大半が尾張の職に復帰していることが分かった。

第一期から第二期へ変化の時期（文化三年）は、尾張藩でも高須藩でも、ほとんど同時に尾張初代藩主義直の血統が絶え、他家から養子を迎えた時期に当たる。高須藩では、水戸家から義和が養子として入り、当主となった文化元年の二年後に当たる。尾張藩・高須藩の当主に起こったこの変化が尾張藩と高須藩の職制上の人事交流の変化に影響を与えていることは十分考えられるが、それは今後の課題としたい。

全国的にみても本藩と支藩との人事交流の実態は、まだほとんど解明されていないのが実情である。本報の調査結果が、尾張藩と高須藩との人事交流、さらには江戸時代の本藩と支藩との人事交流の実態を解明する上での、新

復帰し、また第三期も一四人中九人(六四%)が尾張の職に復帰している。

次に、馬廻頭の場合、第一期には任期終了後、尾張の職へ復帰したものは就任人数三五人中、わずか三人で、残る三二人の内訳は、退職者が一人人と半数を占めるが、高須藩の他の職についたものが一三人もいることが注目される。因みに高須での後職は、家老一〇人、郡代三人であった<sup>(19)</sup>。ところが第二期、第三期になると、馬廻頭から高須の職についたものは〇人で、高須の上位職への昇任は全くなくなっていく。

一方、用人の後職をみると、第一期には七六人中三八人(五〇%)が高須藩の職へ、第二期にも三三人中二三人(七〇%)が高須藩の職に、第三期にも一八人中一二人(六七%)が高須藩の職についており、一見すると馬廻頭職とは異なる傾向にみえる。しかし、第三期の高須での後職の内訳をみると<sup>(20)</sup>、ほとんどが馬廻頭(当時は番頭)職であり、馬廻頭の準備の職であるようにみえる。最後に、高須藩の独自の職である領知奉行の場合は、第一期から第三期まで、後職として、高須の職についたものはいなかった。

以上、人事交流の時代変遷を三期に分けて考察してきたが、第一期と第二期・第三期の間には、大きな変化が見られることが分かった。即ち、第一期には、高須の上位四職(家老・郡代・馬廻頭・用人)のどの職にも高須藩士が就任していたが、第二期・第三期には、これらの職への高須藩士の就任は全くなっていること、一方、尾張から派遣された藩士も、第一期には任期を終えた後、大半が退職していたが、第二期、第三期になると、任期を終えた後、大半が尾張の職に復帰していることが分かった。

第一期から第二期へ変化の時期(文化三年)は、尾張藩でも高須藩でも、ほとんど同時に尾張初代藩主義直の血統が絶え、他家から養子を迎えた時期に当たる。高須藩では、水戸家から義和が養子として入り、当主となった文化元年の二年後に当たる。尾張藩・高須藩の当主に起こったこの変化が尾張藩と高須藩の職制上の人事交流の変化に影響を与えていることは十分考えられるが、ここでは、その事実を指摘するに止める。

【表6】 各職についていた尾張藩士の後職

第1期 天和元年～文化2年(1681～1805) 124年間

職名	就任人数	尾張の職		高須の職		退職(病死・隠居など)・		不明	
	人	人	%	人	%	人	%	人	%
家老	32	5	16	0	0	24	75	3	9
家老並*1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
郡代	7	2	29	3	43	2	29	0	0
馬廻頭	35	3	9	13	37	18	51	1	3
用人	76	9	12	38	50	28	37	1	1
領知奉行	2	1	50	0	0	1	50	0	0
合計	152	20	13	54	35	73	49	5	3

第2期 文化3年～天保13年(1806～1842) 36年間

職名	就任人数	尾張の職		高須の職		退職(病死・隠居など)・		不明	
	人	人	%	人	%	人	%	人	%
家老	19	12	63	0	0	5	26	2	11
家老並*1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
郡代*2	—	—	—	—	—	—	—	—	—
馬廻頭*3	23	13	57	0	0	6	26	4	17
用人	33	9	27	23	70	0	0	1	3
領知奉行	5	5	100	0	0	0	0	0	0
合計	80	39	49	23	29	11	14	7	9

第3期 天保14年～慶応4年(1843～1868) 25年間

職名	就任人数	尾張の職		高須の職		退職(病死・隠居など)・		不明	
	人	人	%	人	%	人	%	人	%
家老	14	9	64	0	0	4	29	1	7
家老並	14	1	7	9	64	1	7	3	21
郡代*2	—	—	—	—	—	—	—	—	—
馬廻頭*3	12	7	58	0	0	2	17	3	25
用人	18	4	22	12	67	2	11	0	0
領知奉行	7	6	86	0	0	1	14	0	0
合計	65	27	42	21	32	10	15	7	11

<備考>

表中、網掛け部分は、尾張藩の職制に位置づけられた職を示す

\*1 家老職は天保14(1843)年に新設されたため、この時期には存在しない

\*2 郡代職は、文化3(1806)年に家老が兼職するようになるため、この時期は—で示した

\*3 馬廻頭職は寛政10(1798)年より番頭と名称変更となるが、ここでは便宜上馬廻頭のままとした

【表5】 各職についていた尾張藩士の人数と高須藩士の人数

第1期 天和元年～文化2年(1681～1805) 124年間

職名	就任人数		尾張藩士		高須藩士		不明	
	人		人	%	人	%	人	%
家老	41		32	78	3	7	6	15
家老並*1	—		—	—	—	—	—	—
郡代	16		7	44	5	31	4	25
馬廻頭	53		35	66	13	22	5	11
用人	96		76	79	14	15	6	6
領知奉行	11		2	18	8	73	1	9
合計	217		152	70	43	20	22	10

第2期 文化3年～天保13年(1806～1842) 36年間

職名	就任人数		尾張藩士		高須藩士		不明	
	人		人	%	人	%	人	%
家老	21		19	90	0	0	2	10
家老並*1	—		—	—	—	—	—	—
郡代*2	—		—	—	—	—	—	—
馬廻頭*3	26		23	88	0	0	3	12
用人	33		33	100	0	0	0	0
領知奉行	7		5	71	2	29	0	0
合計	87		80	92	2	2	5	6

第3期 天保14年～慶応4年(1843～1868) 25年間

職名	就任人数		尾張藩士		高須藩士		不明	
	人		人	%	人	%	人	%
家老	14		14	100	0	0	0	0
家老並	16		14	88	0	0	2	13
郡代*2	—		—	—	—	—	—	—
馬廻頭*3	12		12	100	0	0	0	0
用人	18		18	100	0	0	0	0
領知奉行	7		7	100	0	0	0	0
合計	67		65	97	0	0	2	3

<備考>

表中、網掛け部分は、尾張藩の職制に位置づけられた職を示す

\*1 家老職は天保14(1843)年に新設されたため、この時期には存在しない

\*2 郡代職は、文化3(1806)年に家老が兼職するようになるため、この時期は—で示した

\*3 馬廻頭職は寛政10(1798)年より番頭と名称変更となるが、ここでは便宜上馬廻頭のままとした

の欄をみると、六代藩主義裕の頃までは、その職を解任後は、(病死や隠居など)退職するものがほとんどであるのに対して、八代藩主義居の頃になると、職を解任された後、尾張藩の職につくものが多くなるなど、明らかに変化がみられる。同様の変化は、各職への尾張藩士の派遣人数や各職間の異動の仕方などにも見受けられる。

そこで、このような時代変化をみるため、時代を三つに区切ってみることにした。ここでの時代区分は、高須藩の上位の職の職制上の制度変更、即ち、文化三(一八〇六)年に家老の高須詰が始まり、郡代を家老が兼職するようになったこと、天保一四(一八四三)年に、家老並が新設されるという制度変更に合わせて行った<sup>18)</sup>。即ち、第一期は高須藩ができた天和元(一六八一)年から文化二年までの一二四年間、第二期は文化三年から天保一三年までの三六年間、第三期は天保一四年から慶応四(一八六八)年までの二五年間とした。

【表5】は、取り上げた六職についての尾張藩士と高須藩士の人数とその割合の時代変遷を示したものである。表中の網掛け部分は、尾張藩の職制上に位置づけられた職を示している。表から、第一期には、尾張藩の職制上に位置づけられている四職に就任した全二〇六人(家老四人、郡代一人、馬廻頭五人、用人九六人)中、高須藩士は三五人(家老三人、郡代五人、馬廻頭二人、用人一人)で、少数ながらも、これら全ての職についている。しかし、第二期・第三期になると、高須藩士がこれらの職につくケースは全くみられなくなる。

高須藩独自の職である領知奉行についても、第一期には一人中、高須藩士が八人ついていたのが、第二期には七人中二人、第三期には七人中〇人と先の四職と同様、高須藩士の就任が激減していることが分かる。このように、尾張藩と高須藩の人事交流には、第一期と第二期・第三期との間に大きな変化がみられる。

次に【表6】は、取り上げた六職についての尾張藩士の任期終了後の動向(後職)を、【表5】と同様な時代区分で分けて示したものである。尾張藩士が各職を終えた後の動向についても、いくつかの特徴がみられる。まず、家老であるが、第一期は後職として、退職が就任人数三二人中二四人(七五%)と大部分を占め、尾張藩の職への復帰は五人(二六%)と非常に少ないのに対して、第二期には、逆に一九人中大半の十二人(六三%)が尾張の職に

して掲げた。即ち、①六職への就任人数、うち②尾張藩からその職へ直接派遣された人数、③六職への尾張藩士の就任人数、④六職への高須藩士の就任人数である。

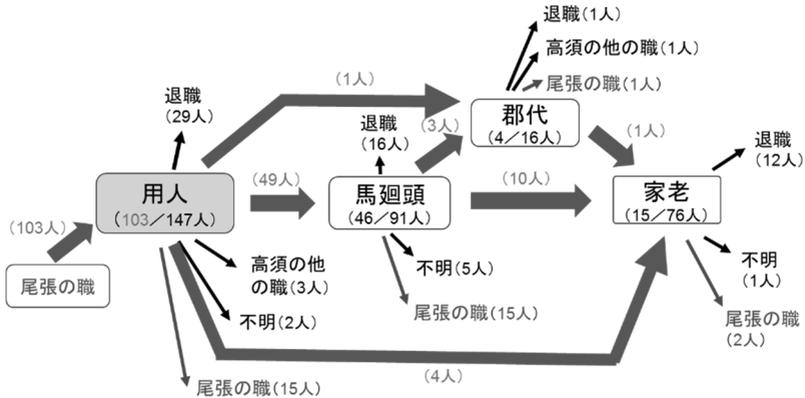
さて【表4】にみられるように、取り上げた六職の就任人数三七一人に占める尾張藩士と高須藩士の人数と割合は、尾張藩士が二九七人（八〇％）、高須藩士が四五人（一二％）、不明二九人（八％）と高須藩士の人数・割合が非常に少ないことが分かる。調査した六職のうち上位五職についてみると、家老は就任人数七六人中、尾張藩士六五人、高須藩士三人、不明八人とほとんど尾張藩士が占めている。さらに同じ尾張藩士でもこの職に直接派遣された藩士は四一人で残る二四人は高須藩の下位の職（家老並、馬廻頭など）から昇任した藩士であった<sup>14</sup>。一方、郡代は全一六人中、尾張藩士七人、高須藩士五人、不明四人であるが、尾張藩から直接派遣された藩士は三人だけで、他の四人は高須藩の下位の職（用人、馬廻頭）から昇任した尾張藩士であった<sup>15</sup>。さらに、この職には高須藩士が比較的多くついているという特徴がみられる。次に、馬廻頭は九一人中、尾張藩士七〇人、高須藩士一三人、不明八人と家老職と同様ほとんどを尾張藩士が占めている。しかし、この職への尾張藩士の直接の派遣は五人に過ぎず、大部分は【図3】のように、用人職へ派遣された尾張藩士が昇任していた<sup>16</sup>。一方、用人は全一四七人中、尾張藩士一二七人、高須藩士一四人、不明六人で、この職もほとんどを尾張藩士が占めている。しかし、馬廻頭の場合と異なり、この職へ直接派遣された尾張藩士は一〇三人とその大部分を占め、残る二四人は用人並へ派遣された尾張藩士が昇任してついていた<sup>17</sup>。

以上のように、高須藩の四職（家老、郡代、馬廻頭、用人）は郡代を除きほとんどを尾張藩士が占めていることが分かった。郡代は家老職に次ぐ職であるにもかかわらず総数が少なく、就任者も高須藩士が比較的多いこと、その一方、家老の予備職とも見られる家老並には全て尾張藩士がついている点は興味深い。

### C 人事交流の時代変遷

一方、この全時代を通じた統計データだけではみえてこないことがある。例えば、【表1】の基礎データの後職

【図3】 用人職に派遣された尾張藩士の異動



<備考>

各職の下の( )の数値は、  
 用人職へ派遣された尾張藩士がその職についてた人数／就任総数を示している

【表4】 各職についていた尾張藩士の人数と高須藩士の人数

職名	就任人数		尾張藩士		高須藩士		不明	
	人	人	人	%	人	%	人	%
家老	76	(41)	65	86	3	4	8	11
家老並	16	(14)	14	88	0	0	2	13
郡代	16	(3)	7	44	5	31	4	25
馬廻頭(=番頭)	91	(5)	70	77	13	14	8	9
用人	147	(103)	127	86	14	10	6	4
領知奉行	25	(14)	14	56	10	40	1	4
合計	371	(180)	297	80	45	12	29	8

<備考>

就任人数の欄の( )の数字は、その職に尾張藩から直接派遣された尾張藩士の人数を示す  
 表中、網掛け部分は、尾張藩の職制に位置づけられた職を示す

【図2】は、高須藩士についてその作業を行い集約した結果である。ここには、①調査した六職に高須藩士が何人ついていたか、②それらの高須藩士がこれらの職をどのように異動したか、③この六職についた高須藩士が、その後どの程度、尾張藩の職についたかを示したものである。まず、①調査した六職に高須藩士が何人ついていたかであるが、一番左の領知奉行を見ると、領知奉行の就任総数二五人中、高須藩士は一〇人、その下の用人は、就任総数一四七人中一四人、その右の馬廻頭は就任総数九一人に対し一三人、郡代は就任総数一六人中五人、家老は七六人中三人、家老並は一六人中〇人と、就任総数に占める高須藩士の割合が非常に少ない。次に、②高須藩士がこの六職をどのように異動したかの、いわゆる昇進コースであるが、用人↓馬廻頭↓郡代というケースと、用人↓馬廻頭↓家老というケースがあつたようである。また、③この六職についた高須藩士が、その後どのくらい尾張藩の職についているかであるが、図中「尾張の職」という部分を見ると、全て〇人となっている。

次に、【図3】は尾張藩から派遣されてきた藩士の異動について示したものである。ここでは用人職に派遣された尾張藩士一〇三人の動向だけを掲げた。尾張藩士がこの四職をどのように異動したかについては、これを見ると、用人↓馬廻頭↓家老というケースが一般的だつたようであるが、用人↓馬廻頭↓郡代↓家老というケースや、中には用人↓家老、用人↓郡代↓家老というケースもあつたようである。高須藩士と違うところは、飛び級昇進がみられることと、郡代から家老への道が途切れていない点くらいである。次に、用人に派遣された尾張藩士が、最終的にどのくらい尾張藩の職についているかであるが、尾張藩士の場合は「尾張の職」の数字を足すと三三人が尾張の職に復帰していることが分かる。即ち、用人に派遣された一〇三人の尾張藩士のうち三三人は、高須藩の職を解かれた後、尾張藩の職に復帰している。そして、残り七〇人の内訳は、退職が五八人、【図3】に上げた職以外の高須の職へ四人、不明八人で退職者の多さが目立つ。

これらの図を用いれば、六職に就任した藩士の動向をかなり詳しく表すことはできるが、全体像を示そうとする、図が煩雑になり逆に分かりにくくなる。そこで、ここでは次の四つの情報に絞って整理したものを【表4】と



次に、各職についてみると家老と郡代の職は、退職者の割合が家老は七六人中四二人（五五％）、郡代は一六人中九人（五五％）と半数以上あるのに対して、下位職の領知奉行では、二五人中六人（二四％）とあまり多くない。これは、家老、郡代は高須藩での最上位の職であるため、解任後は尾張の職につくか退職するかしかなないと考えれば、退職者が多いというのも納得できる。一方、家老並と用人は、後職で高須藩の職についたものが多い。即ち、家老並の場合、就任人数一六人中、尾張藩の職が二人（一三％）に対し、高須藩の職が九人（五六％）と多く、用人の場合も、就任人数一四七人中、尾張藩の職が二一人（一五％）に対し、高須藩の職が八四人（五七％）と多い。このように後職についても、その動向は職によるばらつきが多いことが分かる。

#### B 尾張からの派遣藩士の高須藩の職の異動

前項で述べたように、尾張から派遣された藩士はその職解任後、直ちに尾張に戻るわけではなく、高須の職を異動していたものがいたと考えられた。そのため、この調査では、直前の職や直後の職が尾張の職か高須の職かは分かるが、その職の就任者が生粋の高須藩士なのか、もともとは尾張から派遣されてきた藩士なのかという肝心の点に分からないという問題があることが分かった。

例えば、【図1】のように、尾張藩士が高須のA職に派遣され、その後、異動（昇進）して高須のB職についてとする。この場合、高須のB職は、この調査の仕方では、前職が高須A職になるので、前職は全て高須の職とカウントされる。そのため、もともとは尾張藩士であるとしても、高須藩の職を異動したため尾張藩士であることがみえなくなってしまうことになる。従って、実際に尾張藩士が高須の職にどれだけついていたかを知るためには、直前・直後の職だけの調査では不十分であり、藩士の前々職、前々々職、後々職、後々々職まで個別にたどり、それを改めて集約する必要がある。いわゆる生粋の高須藩士を知る場合も同様に、藩士の前々職、前々々職までたどって、隠れた尾張藩士を除外する必要がある。というのも、高須藩の場合、高須藩士だけのまとまった系譜が残されておらず、誰が生粋の高須藩士かがはっきりしないからである。

本藩と支藩の職制上の人事交流  
 ～尾張藩と高須藩を事例に～

【表2】各職についていた藩士の前職

職名	就任人数		尾張の職		高須の職		不明	
	人		人	%	人	%	人	%
家老	76		41	54	29	38	6	8
家老並	16		14	88	0	0	2	13
郡代	16		3	19	9	56	4	25
馬廻頭(=番頭)	91		5	1	80	88	6	7
用人	147		103	70	38	26	6	4
領知奉行	25		14	56	10	40	1	4
合計	371		180	49	166	45	29	8

<備考>

表中、網掛け部分は、尾張藩の職制に位置づけられた職を示す

【表3】各職についていた藩士の後職

職名	就任人数		尾張の職		高須の職		退職(病死・ 隠居など)・		不明	
	人		人	%	人	%	人	%	人	%
家老	76		26	34	0	0	42	55	8	11
家老並	16		2	13	9	56	2	13	3	19
郡代	16		3	19	3	19	9	55	1	6
馬廻頭(=番頭)	91		27	30	21	23	34	37	9	6
用人	147		22	15	84	57	39	27	2	1
領知奉行	25		13	52	6	24	6	24	0	0
合計	371		93	25	124	33	131	35	23	6

<備考>

表中、網掛け部分は、尾張藩の職制に位置づけられた職を示す

## 2 「職禄名譜」からみた尾張藩と高須藩の人事交流の実態

### A 前職・後職調査からみた人事交流の全体像

上述の基礎データをもとに、高須藩と尾張藩の人事交流の実態の全体像をみていく。

【表2】は、先の六職についていた藩士の人数とその職についていた藩士の前職が尾張藩の職か高須藩の職かを示したものである。【表3】は後職について同様に示した。

【表2】には、左から職名、就任人数、これらの職についていた藩士の前職が尾張藩の職か高須藩の職か不明かの別に人数と割合が示してある。例えば、家老についていた七六人中、前職が尾張藩の職だったものが四一人（五四％）、高須藩の職だったものが二九人（三八％）、不明が六人（八％）ということである。これら六職全体をみると、就任人数三七一人中、前職が尾張の職だったものが一八〇人（四九％）、高須の職だったものが一六六人（四五％）とほぼ半々であり、尾張から多くの藩士が派遣されていたことが分かる。さらに、各職についてみると、家老並は、前職が高須の職であった藩士は一人もおらず、逆に、馬廻頭は、前職が高須藩の職だった藩士が、八〇人（八八％）とほとんどを占めている。また、家老や領知奉行は、尾張と高須がほぼ半々となっており、職によってばらつきがあることが分かる。

次に、【表3】の後職についても同様に職名、その職についていた人数、後職が尾張藩の職か高須藩の職か退職したものの別に人数と割合が示してある。まず、六職全体を見ると、就任総数三七一人中、尾張の職についていたもの九三人（二五％）、高須の職についていたもの一二四人（三三％）、退職、即ちこの職を機にやめたり、死亡したりしたものが一三一人（三五％）で、尾張の職についていたものに比べ退職者や高須藩の職についていた藩士が多いことが分かる。このとき、後職が高須の職であるということは、その藩士が高須藩の職を異動していることを意味するから、尾張から派遣された藩士の中にも、その職解任後、直ちに尾張に帰るわけではなく、高須の職を異動していたものが多くいたと考えられる。なお、この問題については、次の項で改めて考察する。



【表1】基礎データ＜家老＞

藩主・藩臣氏名	就任年	離任年	前職	所屬藩	後職	所属藩	備考
1 頼元・清載	貞享1年(1684)06/06	享保12年(1696)09/25	御足輕頭	尾張	御免御免(尾張)御免し	尾張(他)	
2 頼元・半右衛門	貞享04年(1687)12/25	元禄14年(1701)02/06	馬廻頭	高須	病氣・依願御免御免	退職(他)	
3 若林・右衛門	元禄06年(1689)02/19	正徳02年(1712)10/01	用人	高須	病氣・依願御免	退職(他)	
4 堀山・左衛門	元禄12年(1699)12/02	享保03年(1717)09/16	馬門足輕頭	高須	病氣・依願御免	退職(他)	
5 長屋敷・左衛門	元禄14年(1701)03/11	享保03年(1717)04/05	新普請	高須	依願御免御免	退職(他)	
6 長屋敷・左平	享保03年(1706)10/27	享保02年(1716)01/17	新奉行	高須	病氣	退職(他)	
7 頼元・加藤・右衛門	正徳02年(1712)10/22	享保02年(1716)03/27	馬廻頭	高須	病氣	退職(他)	
8 野田・左衛門	正徳06年(1716)04/26	享保02年(1716)02/03	馬門足輕頭	高須	病氣	退職(他)	
9 近藤・小次郎	享保02年(1717)03/06	享保02年(1717)03/06	新普請	高須	依願御免	退職(他)	
10 小笠原・忠兵衛	享保02年(1717)03/28	享保07年(1722)08/25	馬廻頭	高須	依願御免	退職(他)	
2 養孝							
11 鈴木・左衛門	享保11年(1726)02/23	享保21年(1736)03/27	附屬【御足輕頭】	尾張	病氣	退職(他)	
12 植原・左衛門	享保12年(1727)02/19	享保22年(1735)05/04	附屬	尾張	御奉行	尾張	
13 越前・左衛門	享保17年(1732)02/19	享保21年(1736)01/04	元丸【旗奉行】御附屬	尾張	御奉行	退職(他)	
3 養淳							
14 大野・与一・左衛門	享保20年(1735)05/01	享保07年(1757)10/11	元丸 御附屬	尾張	御奉行・頼元礼改藩召難普請相寄合被仰付	退職(他)	
15 小幡・安左衛門	享保12年(1736)02/06	享保05年(1748)02/28	元丸 御附屬	尾張	依願御免	退職(他)	
16 梶田・十郎兵衛	元禄04年(1728)02/23	享保05年(1748)05/16	馬廻頭	高須	依願御免	退職(他)	
17 養源・本兵衛	延享05年(1748)04/04	享保02年(1716)03/26	馬廻頭	高須	病氣	退職(他)	
18 水井・庄兵衛	延享05年(1748)06/14	享保02年(1716)03/26	馬廻頭	高須	依願御免	退職(他)	
19 里井・庄兵衛	享保05年(1750)08/14	享保02年(1716)03/26	町奉行 御附屬	尾張	病氣	退職(他)	
20 林九郎・左衛門	享保07年(1757)10/25	享保03年(1762)12/05	馬廻頭	高須	病氣	退職(他)	
21 藤野・徳右衛門	享保10年(1760)03/25	享保03年(1761)10/03	馬廻頭	高須	普請相寄合	不明	
22 石原・左衛門	享保12年(1762)08/25	享保06年(1769)03/09	馬廻頭	高須	仍願御免	退職(他)	
4 養敬							
23 小笠原・二郎	明和04年(1767)02/06	明和04年(1767)09/17	小納戸	不明	病氣・仍願御免御免	退職(他)	
24 山吹・徳兵衛	明和04年(1767)11/22	安永03年(1774)12/13	小普請頭	尾張	仍願御免御免	退職(他)	
5 養和							
25 原十郎・兵衛	明和06年(1769)10/01	明和06年(1772)02/11	國奉行	不明	病・願(御免)養御免	退職(他)	
26 長屋敷・安左衛門	明和08年(1771)10/23	安永06年(1777)01/25	馬廻頭	高須	蓋部御用人	不明	
5 養樹							
27 大野弥一・左衛門	明和09年(1772)05/16	安永03年(1776)01/02	新普請	尾張	病・仍願御免御免	退職(他)	
28 高木・左衛門	安永04年(1775)03/04	安永03年(1776)03/22	新代	高須	御免御免	不明	
29 藤田・左衛門	安永05年(1776)10/15	享保03年(1780)08/09	普請組礼殿寄合	不明	病死	退職(他)	
30 成田・新五郎兵衛	安永06年(1777)03/15	享保01年(1789)08/13	用人	高須	依願御免	退職(他)	
31 石山・重左衛門	安永09年(1780)08/29	享保03年(1789)03/27	馬廻頭	高須	老普請依願御免	退職(他)	
32 石原・左衛門	安永09年(1780)10/04	天明04年(1794)08/23	用人	高須	病氣・仍願御免御免	退職(他)	
6 養裕							
33 須賀井・千次郎	天明04年(1794)11/01	享保03年(1791)10/17	先手足輕頭	尾張	病氣・仍願御免御免	退職(他)	
34 大野・与兵衛	寛政01年(1789)09/13	寛政03年(1791)03/23	目付	不明	病氣・仍願御免御免	退職(他)	
35 山崎・重左衛門	享保03年(1791)04/13	享保03年(1803)02/07	新代	高須	病死	退職(他)	
36 藤井・藤五郎兵衛	享保03年(1791)12/04	享保01年(1801)06/19	新普請	尾張	病死・仍願御免	退職(他)	
37 神谷・致馬	寛政08年(1796)04/07	文化03年(1808)04/24	馬廻頭	高須	縫奉行	尾張	

百石 御役料四拾俵 平沢只左衛門

元禄五申六月二日御目付より被 仰付、御知行代被下、宝永二酉十二月廿五日 御本家より式百石地方被下  
之、此方様より五拾石分御足米被下、正徳三巳閏五月四日御郡代被 仰付 (以下略)

右のように、ここには、職名ごとにその職を務めた「藩士の名前」と「石高」、その職への「就任年月日」、「退任年月日」及び、その役につく「前の職名」、「後の職名」が古い順に記されている。「職禄名譜」には、これらのことが家老以下約二〇〇職について、その職についての全ての藩士について記してある。従って、この史料と尾張藩の関係資料とを照合すれば、尾張藩と高須藩の職制上の人事交流の実態が明らかにできると考えられる。そこで、本稿ではこの史料をもとに高須藩の上位職を中心に尾張藩士と高須藩士の人事交流の一端を明らかにする。

#### B 調査対象（取り上げる役職と人物）

次に、ここで調査対象とした役職は、高須藩の上位の役職のうち、尾張藩の職制にも位置づけられている四つの職<sup>(12)</sup>、即ち、①家老、②郡代、③馬廻頭（寛政一〇年に番頭と名称変更）、④用人と、「職禄名譜」の中で家老と同じ項目に分類されている⑤家老並、さらに、尾張藩の官制には位置づけられていないが、尾張藩士から任命されていた事例があるといわれる<sup>(13)</sup> ⑥領知奉行の計六職で、その職についての全ての人物について調査を行った。

#### C 調査方法

調査は、前項で調査対象とした人物について、次の①～⑤の項目について調べ、役職ごとに【表1】のような一覧表を作成、それをもとに高須藩士と尾張藩士との人事交流について考察を行った。

調査内容は、①その役職への就任年月日、②その役職の解任年月日、③その役職につく前の役職（前職）、④その役職を解任後についた役職（後職）、⑤その役職についた人物の「前職」と「後職」とが高須藩の職か、尾張藩の職かの別である。ここでは、紙数の制約から、家老職についた藩士の一覧表だけを【表1】として掲げた。

いる。

一方、尾張藩士の研究において、松村冬樹氏が尾張藩士の系譜集である「士林沂洄」「藩士名寄」の膨大なデータをもとに、尾張藩の二二〇もの役職について役職者一覧を作成し公表するとともに、役職者の変遷の動向について報告された<sup>8)</sup>。その中で、高須藩の役職についても、四谷家番頭、分家鎗奉行、四谷家腰物奉行など、いくつかの役職について役職一覧を作成された。氏は役職者の就任傾向についても考察されているが、ここでは、主として尾張藩の役職について検討されており、尾張藩と高須藩の人事交流については、岐阜奉行職の後職として、高須藩の家老並や姫様の用人への転任が多少目立つことなどが紹介されているものの、あまり触れられていない<sup>9)</sup>。このように、尾張藩士と高須藩士の人事交流の実態に関する従来の研究は、事例紹介にとどまり、交流の全体像や時代変遷については、いまだ明らかになっていないとはいえない。そこで本稿では、「職禄名譜」をもとに、高須藩の上位の役職を中心に江戸時代を通じた尾張藩と高須藩の藩士レベルでの交流の実態を明らかにしたい。

## 1 尾張藩と高須藩の職制上の人事交流の実態調査

### A 調査史料と記載内容

調査史料には「職禄名譜」を用いた<sup>10)</sup>。「職禄名譜」とは、江戸期を通じた高須藩士の職員録で、初代藩主松平義行に仕えていた家臣から、幕末に至るまでの高須藩士の職歴を、幕末の職種別に編集して記録したものである。次に掲げたのは、「職禄名譜」に記載された領知奉行に関する記事の一部である<sup>11)</sup>。

御領知奉行

百石 御役料式拾石

岡崎儀右衛門

天和元酉十月十五日御徒頭より当役被 仰付、元禄五申正月廿一日御取次役被 仰付

本藩と支藩の職制上の人事交流～尾張藩と高須藩を事例に～

稲垣 知子

はじめに

江戸時代、美濃国の一部を治めていた高須藩―高須松平家が、当時尾張地方を治めていた尾張徳川家の分家であり、尾張藩の支藩であったこと、本藩に後継者がいない場合は相続人を差し出したり、本藩の子弟を支藩の当主にしたり、本藩の藩主が幼少、又は病弱の場合には補佐にあたるなど、藩主レベルで非常に密接な人事交流があったことは、よく知られている。

しかし、藩士レベルの人事交流の実態については、十分明らかになっていないといえない。即ち、尾張藩と高須藩の藩士レベルの交流について、早くは一九六二年に、林董一氏が「支藩考」の中で考察されている<sup>(1)</sup>。林氏は、高須藩の分限帳に記載された高須藩の上位の役職（家老、郡代、番頭、用人）が、尾張藩の役職（摂津守様御家老、高須御郡代、摂津守様御番頭、摂津守様御用人）として尾張藩の官制の史料にも記され、尾張藩の役職に組み込まれていたこと<sup>(2)</sup>、高須藩の家老の地位にあった藩士の屋敷が名古屋城下にあったこと、尾張藩から高須藩に派遣された藩士について、定められた役高―給与に達しない場合は、尾張藩から不足分を支払っていたという事実を紹介されながら<sup>(3)</sup>、藩士レベルでも密接な交流があったことを指摘された。

その後、『海津町史』通史編において、「職禄名譜」<sup>(4)</sup>という高須藩士の職員録ともいえる史料をもとに、尾張藩の職についていたものが高須藩の家老、郡代、用人、取次役の各職に任命され、その後、本藩に戻った事例が数例紹介され、藩士が本藩と支藩の役職を行き来していた実態が明らかになった<sup>(5)</sup>。また近年、大野正茂氏が尾張藩の職制に位置づけられていない職にも尾張藩から藩士が派遣されていたことや<sup>(6)</sup>、尾張藩の職制に位置づけられていた家老、郡代、番頭、用人が尾張藩士と同様、名古屋城への月次登城をしていたこと<sup>(7)</sup>などを指摘されて

ISSN 1344 - 4433

愛知文教大学論叢 第20巻  
Aichi Bunkyo University Review Vol.20

2017年11月30日発行

発 行 者 愛知文教大学  
〒485-8565 愛知県小牧市大草5969-3  
電 話 0568-78-2211  
F A X 0568-78-2240  
代 表 者 富 田 健 弘  
編 集 者 愛知文教大学学術委員会

有限会社 一粒社 印刷・製本

# AICHI BUNKYOU UNIVERSITY REVIEW

---

Vol. 20

2017

---

Aichi Bunkyo University , Komaki , Aichi , Japan

## CONTENTS

〈Articles〉

Two step Decision Making using the analysis of intergenerational differences	Masaki Kobayashi	1
Programming and Toy	Wataru Hayakawa	13
A Study of the Free School movement in High modernity	Takeshi Takenaka	23
Outlook on carrier of the university student, judging from a survey for finding employment. - reference by student questionnaire survey (1)	Utsuki Ogawa	35
Chinese language education at Aichi Bunkyo university :About the learning support in Chinese communication lounge	Tomoya Nishiguchi	49
Toward International Understanding Organizational Activities of International Communication Center of Aichi Bunkyo University	Yukio Katsumata	65
The inheritance of Kang Youwei's educational thoughts in modern education	Ma Yan Wang Xin	85
The Methology of Japan Classics Teaching	Yoshihisa Takahashi	97
Research Record		109
~~~~~		
A stady on personnel exchange between the main domain and its branched domain. ~ the case of the Owari domain and the Takasu domain ~	Tomoko Inagaki	一 (142)
~~~~~		